

セチカは、吾人の工夫に由て、己れを救ひ得るや否やに關しては、全く絶望的の告白を倣せり。彼言て曰く、「腐敗したる吾人の性情は、深く罪の蝕毒を飲下せり、而して是は其臍臍にまで浸潤し、之を割截するに非れば、到底之を除去する能はず」と。然れども彼は權かに、超自然的補助の存し得べきを思料して曰く、「人誰も己れを潔むる能はず、誰か來て我儕を助くる者なき乎、誰か臨んで我儕を救出す者なき乎」と。——是れ則ち、一の囁らざる基督に向て、來て其罪を免れ、己を救出すを免れざるものに非ずして何ぞや。

彼は又、宛然第二の羅馬書第七章を記さんとするもの、如く、言を作して謂へらく、「ルシリアスよ、我儕一方に向て進まんとする時、我儕を他方に牽引する者あり、我儕或る進行を避んとするとき、反て我儕を驅て、之に趨かしむる者あり、抑も是れ何ぞや、斯く絶へず吾人と角闘し、未だ曾て一たびも、善決心を遂行する能はざらしむる者は、噫是れ何ぞや」と。

斯の如く、人は到底純乎たる自然力のみにては、其罪より脱する能はずとの、同感と言顯はしたる詞句は、古今東西、殆んど枚擧に遑わらず、而れども其要旨は、唯以上説述したる所のの外に出でず。然れども、余はその尤も顯著なる者の一として、彼等が實際或神性的救助者の發現、及或恩恵ある啓示によれる、神の顯現を渴望したる、一二の例證を附言せんと欲す。而して此種の例證に依て、若し現代衆人の拒否する如く、是等の超自然的顯現なる者あるなく、又

セチカ
子ス

彼等の自ら要求する如く、眞乎に自然界でう闇黒中に、放置せられたらんに、彼等の現狀は果して奈何なるべきやを知らんとす。嗟呼古來異教の學者、及哲學者中の尤も卓識家は、自然の道理てう光明を捉て、發見し且確定せんと努力したる者を、發見し且確定する能はず、却て不確の陰翳依然として其上を掩蔽したると、是れ實に彼等の絶へざる痛苦なりしなり。左れば吾人は、ゼノフハチス(希臘の哲學者紀元前五百八十年生)が、殆んど自然界に於る、彼れの研究を絶望して、斯く言はれたるを聞くも、亦宜なりと云ふべし。——其言に曰く、「人誰も神、及余が宇宙に就て囁らんと欲する所のものを、確然發見したる者あらず、又發見する者あらざる可し。吾人時として、最も完全なる者を發見したりと表白する者あるを聞くも雖も、實は彼れ未だ之を熟知せざるなり、必竟するに、是皆惚測たるを免れず」と。

斯の如く、彼等は人生の眞義を搜索せんとしたるとき、唯不確の疑團に壓着せられて、益々太く惱苦せられ、かくて彌々倍々、飢渴の心情を以て、倅にして、早晚天の啓示あらんとを待望したり。斯くてプラトンは、心靈又其運命に就て論じたる、彼の「フホード」中に於て據べて曰く、「余の見を以てすれば、現世に於て明白に之を識らんとするは、到底爲し能はざるとなるか、否らざれば酷だ困難の業たらざるを得ず、さりとて全然之を等閑視し、可及的の力を竭して、之を耐善し、之を搜索し、之を證驗せざるは、寧ろ善だ在弱の人と曰はざるを得ず。蓋し

プラト
又た或超
自然的啓
示の必要
なるを告
白したり

吾人は、是等の事件に關しては、人に就て其眞義を攻究するか、否らざれば、吾人自ら之を發見せんとを努めざるべからず。若夫れ、此二者にして爲し能はざる乎、然らば吾人は、吾人に道理の尤も正確なりと見ゆる所のものを採り、夫の多少危険とは知りつゝも、敢て身を舟筏に托する者の如く、之に乗じて、生涯の航路を駛走せざる可からず。——別言すれば、他に之より安全に或神秘なる渡舟、即ち或神なる道コトバに達せしむるものあるに非んば、勢ひ然かせざるを得ず」と。吁何ぞ智識を渴望するの緊急なる哉。——視よ々々、世の尤も偉大なる思想家へも、人生の門外に佇立して、強て之を排かんとし、唯横かに眞理の微光を捕捉し、甘んじて之に己が全身を托すると、恰も海上に於て、脆弱なる舟筏になすが如くし、而して哀訴懸望、以て徹かに神なる道コトバの來て、彼れが中に一層眞確なる光明となり、安固なる嚮導とならんを求むるの希望を漏すを。而して斯の一層顯明なる啓示を冀望するの兆候は、夫のアルシヒエリスに依て、一層昭かに告白せられたりと云ふべし。其言に曰く、「吾人は其神たるを、或は靈通を受けたる人たるに拘はらず、何人か來て、吾人に道德及宗教の要務を教へ、而してキーマー作中の「パラス」(希臘の女神)が、ダイオミリスに爲したるが如く、暗闇を吾人の眼中より除去するを耐忍して俟たざるべからず」と。嗟天來の或受身せる神使、即ち超自然的に差遣せられたる大教師が、世を照被せんが爲めに、早晚降臨し給ふとあるべしとの希望は、古今有數の大學者たる、

是等の人々に取て、いかに信じ易かりしとなるよ。それ彼等が吾人に告白せる所は、彼等は、一に教主耶穌を翹望したるを、彰表するものに非ずして何ぞや。

偕て歴史上是等の徴證は、通常かの自然論者が、信仰の福音よりは實かに道理あり、且有望なるもの、如く言做せる、進化の法則及自修の福音は、實は眞平の科學たる價値なきを、尤も有力に證明するものと云ふべし。余は想ふ、彼等が宿昔の迷夢一たび醒覺するや、彼等は遂に、眞箇の自然界は、決して彼等が思想せるが如き、道理あり且有望なる状態に非ず、却て寂寥たる暗夜、飢渴を免れざる虚空、及び終に支ふべからざる餓拳の存する所なるを發見して、一驚を喫するならんを。然り、自然界は、一の秩序ある社會を約束せざるなり、少くとも、罪を救濟するを約束せざる也。

第九章

超自然界は、自然界と並立し得べきものにして、而も一定の法則に服ふ者なり
 吾人が前説したる如く、罪の下に在る人間、及人間社會は、神の超自然的干渉あるに非んば、
 救拯の望なしとせば、吾人は、今や一步を前めて、斯の如き干渉に關し、果して如何なる抗論
 の存するあるかを、探究せざる可からず。而して吾人は、茲に二個の抗論の提出せらるゝを見
 る也。其一に曰く、斯の如き超自然的干渉は、自然界の秩序と並立すべからず。其二に曰く、
 斯の如き超自然力は、是れ法則に外れたるものと曰はざるべからず。故に是れ道理に反すと是
 也。吾人は今序を追ふて、この兩點に就て論ずる所あらんとす。而して第一に、余は、罪を療
 醫せんが爲めに具へられたる神の超自然力は、全然自然界と並立し得べきものにして、其法則
 を破る者にあらず、又その組織的動物を擾亂する者に非るを開陳せんと欲す。
 抑も自然界は、至眞至當の意義に従へば、神の全組織にあらず、唯一層高尙なる超自然力に服
 従し、其用を奉ずるに過ぎざる者なりとは、余の既に前陳したる所也。夫れ之は一の物體に過
 ぎず、而して眞箇の神の王國は、靈者の邦國にして、(——神は實に其執權者也——)、神及衆靈
 は、絶へず物體の上に勢力を傾注して、之を使用し、之を以て彼等が交渉の媒となす。而して

世界は凡
 て靈者の
 正當に動
 作し得る
 所の場所
 也

之は、吾人が今方に開示せんとするが如く、微毫も其法則と衝突するとなき、或方法に依て行
 はる、何となれば、之は本來自箇の法則に由て、彼等の勢力に服ふ者なれば也。蓋し吾人が通
 常罪惡の解離混亂と云ふ所のものも、決して是等の法則の癱瘓絶滅するを假定するものにあ
 らず、是れたゞ其中に、その懲罰的効果を惹起するが如き新元素を投入したるより、起り來れる
 惡結果たる而已。斯の如く、神の超自然的勢力に依て執行せらるゝ奇跡さへも、必ずしも斯法則
 の廢除、若くは停止を合示するものに非るは明なり、何となれば、自然界は、元來自箇の法則
 に由て、神と吾人に服従し、斯くて他より使用せられ、且つ其生じ得べき諸原因の新結合、新
 接排に依て、其作用を變更せられ得る者なれば也。是故に、斯くて惹起せられたる諸の結果は、
 (——その神に由ると、人に由るとに拘はらず——)、皆自然界の超自然的に使用せられたるを
 示すものにして、自然界の顛覆せられたるを示すものに非ず。則ち是れは一方より見れば自然
 にして、他方より見れば超自然たるなり、而して其自然なるは、之が自然界の法則に由て、其
 下に起りたるに因り、其超自然たるは、之が單だ自然界の上に動作せる意志の作用に依てのみ
 生じたる、諸原因の新結合に憑て起り來りたれば也。

且夫れ吾人勤しく、吾人が工夫に懸れる、許多の旋輪及機關、吾人が舟舶に頼て全地に來往せ
 る莫大の重貨、吾人が創意せる諸の大建築、及び吾人が勤勞の果たる、豊富なる農藝等を一考

し來るときは、吾人は人類として、自然界の上に倣したる事業の、絶大なるを驚かざるを得ず。吾人は實に、世界をして、殆んど別世界たらしめたり、而して是皆究竟超自然的勢力に歸せざる可からず。夫れ吾人の意志に由て工夫安排せられざる純乎たる自然界は、決して斯の如き事業を爲す能はず、此大勢力を有する者は、獨り意思あるのみ、而して意志は則ち超自然力たる也。然り而して、若し吾人は、吾人一切の事業、及巧妙の設計に於て見るを得る如く、世界上に、斯く偉大の勢力を有すとせば、神は全然自然界に接近するの途なく、又自然界の上に勢力を有するなしとは、果して吾人の信じ得べきとなる乎、神なる意思に限りて、獨り其上に權力を執行する能はざる乎。

重量の投
擲は、
此至高真
理の好譬
也。

仍ほ此要點を明にせんが爲めに、吾人は今之を、一隊の群童が、投擲を倣すに喩へんとす。それ毬鞠は、或る外部の原因に依て提起せられ、且使用せらるゝに非んば、恒久地上に靜息すべき、一の懶惰なる圓形の物躰也。之は本來、一種の柔軟性、及弾力性を有す。雖も、決して自ら運動するの力なきなり。然れども吾人は、之れが時としては、打着せられ、捕捉せられ、抛擲せられ、かくて活潑々に空中を飛行するを見る、——之れは、所謂就投擲と云はるゝ、此擲の首要なる目的物たり、又器具たるもの也。此時に於て、之は彼等競争者の間に於る、唯一活闘の媒たり、然れども其空中に於る運動に至ては、吾人其後ろに、其重量と柔軟性とに由て、

之を抛擲したる幾多の手腕あるを見る、此れまでは、其運動や、唯自然的のみ。而して吾人其手腕を動かしたるもの、何なるやを問ふに方り、之は純乎たる器械的法則の下に働ける筋骨の、急速に牽掣せられたるに頼るなるを發見す、是亦自然的のみ。而して吾人尙は一步を進めて、何故に筋骨が斯く牽掣せられたるかを問はゞ、是れ一の命令が、神経系を通じて、之に傳へられたるに因るなるを發見すべし是れ俾しく自然的のみ。而して吾人仍は數歩を前めて、斯く意志をして、此命令を發せしめたる所以の原をなすもの、何なるやを問はゞ、その眞の解答は是也、乃ち動作するも動作せざるも、唯其自由にある意志の、自ら動作したる所なりと云ふ是也。此故に、若しこの遊侶の一人、若くは數人が、父母或は教師の許より潜逃せる、偷閑者にして、其遊戯は、一の犯則の行爲たらば、彼は必ず、己が悪行を爲しつゝあるを自覺し、之が爲めに自ら責めんとす、而して是れ一に、彼が其こゝに至りたるは、何物にも強迫せられたるに非ず、全然自箇の失行なるを知覺せる、彼れの直截嚴明なる感格に在るとなりとす。蓋し此時に當て、彼は種々の目的を有し、理由を有し、且動機を有したるは、それ或は疑なからん、然れども、是れ決して彼れが行爲の眞乎の原因にあらざる也、何となれば、彼は是等一切の者を排斥し得べく、又排斥せざるべからざるを、自ら躊躇すれば也。是に於て乎、吾人は竟に、凡て彼れの手腕と棍棒とを運動せしめたる、眞乎の超自然力に到達したり。惟ふに、是等諸原

因なる連鎖の一端に在る者は、投擲者にして、他の一端に在る者は、投擲者の自由意思にてあるなり。夫れ投擲は、手腕あるに非んば、飛躍する能はず、而して手腕は、筋骨の牽制するところなるに非んば、何事をも爲す能はず、而して筋骨の牽制せらるゝや、一に之に傳へられたる命令あるに原由す、而してこの終焉なる命令は、全然超自然的に動作せる自由意思、即ち靈者固有の行為たる也。是に於て、一疑問の起り来るものあらんとす、乃ち斯の遊戯は、かく幾多の諸原因、及其終焉たる超自然力に遂行せられたるが故に、是れ果して、其中に包含せる自然界の秩序を顛覆し、若くは紊亂するものにあらざる乎と云ふとなりとす。而して其否らざるや、言を俟たずして昭なり。何となれば、棍棒なり、臂腕なり、手指なり、筋骨なり、是等の相聯繫せる諸原因は、各々其法則に由て、之を服へんとする超自然力に、服順したるに外ならざれば也。されば此遊戯や、是等服順したる諸能力に由て遂行せられたりと見れば、是れ則ち自然的なり、而れども是れは夫の終焉なる一の勢力より出たりと見れば、是れ即ち超自然的なり。故に吾人の之を見る、毫も奇異の感想を惹起せず、又吾人の信仰を震撼する程の擾亂の、自然界に起りたりとも思惟せざる也、却て此出來事や、尤も普通に於て、少しも非常異變の兆なく、吾人は恒に、是を全然原因結果の自然法中の常事と見做して、毫頭怪しむ所なき也。

吾人は今前例を實地に應用せんとす。夫れ自然界の、神及凡て自甲靈者に於るは、恰も投擲の

神は自然
界を透し
て動き給
ふは超
自然力の
眞面の教
義に非ず

遊戯者に於るが如し。或る見に依れば、吾人は全能なる世界の統治者を、世界の感受官、及行動的腦力と看做すを得べし。若し果して然りとせば、神は其中なる各肢、及各原因を透して、直接に動作するの力を有するが故に、分毫も其秩序を壊亂し、或は其法則を妨碍し、若くは停歇するとなくして、絶へず世界の出來事に、緻密の關係を保ち得べきは、論を俟たず。蓋し自然界は、遊戯者の肢體が、彼等に柔順なるが如く、神に柔順なるなり。而して彼等が肢體の常調は、其發出せる命令の爲めに、聊かも錯亂せざるが如く、神も亦自然の秩序、及組織の分釐をだも、錯亂するとなくして、彼れが大能の奇跡を行ひ、又地に於る救拯を成遂するの、充分の機會を有する也。斯の如く、神が自然界の諸原因の行歩の上に、接近し得るは、宛も心靈が命令を肢體し發送せんとするに方り、夫の神秘なる腦裡に於て行ふ所と、同一正當の理なりとす。

讀者は察知し得るならん、吾人が茲に曰ふ所のものは、主として自然界の作用に就て曰ふものにして、神の可能的作用に就ていふものにあらざるを。是れ自ら思想なりとす。吾人が今言ふ所のものは、假令現存せる自然界の諸勢力、及諸法則が悉皆永遠に繼續するとあらんも、仍ほ神は絶へず、自然界に於る諸原因の行歩の上に動作し、其中に或は其上に、超自然的に其意を執行するの餘地あると、猶ほ吾人の行ふ所に於るが如く、而も自然界の諸法則、及固定せる秩序と、全然並立し得べしといふとなりとす。蓋し彼は吾人と俾しく、世界の上に動作するを得

べし、而して自然界は、彼れの動作に由て毫も紛亂せざると、宛も吾人の行爲に於るが如くならざるを得べし、否、彼は聖旨のまゝに、彼れが無限の威嚴に適はしき方法を以て、動作し給ふとあらんも、些の困難を生ずるとなかるべし。

然れども神の此動作は、些も法則を妨碍するものに非ず

其然る所以の理由

第二に、余は、神の超自然力は、一の法則にも、或は組織にも、服従せずと假定せる抗論に對して、是は一定不變の法則に依て、細規せらるゝ所以を開陳せんと欲す。夫れ吾人は、本來靈智を具へたる存在者として、吾人は一の法則、或は組織を有せざる状態の下に満足する能はず、又聰慧なる主義精神なき所に、安んずる能はざる也。吾人は性來、神の經綸に於る萬般の事物は、皆悉く道理の嚴正なる一致の上に、確立するならんを要求する者也。然り、古代未開の天文學者さへも、或は幾何學の形式に倚り、或は數學の原理を按し、以て天體及其運動を領會せんと、鞠躬努力したり。余は固く信せんと欲す、斯の高尙なる吾人の天性を、神は決して破壊し給はざる可きを。今試に余か斯く信ずるの理由を左に開陳せん。

一、新説する如く、神は此の法則てう先天的信仰を、吾人の性質中に鑄刻したるを以て、吾人は此事實に徴して、彼れの統治は、必ず吾人の尊敬を博するに足り、又吾人が靈性の渴望を盈すに足るべしとの、確證を有す。

二、自然界が、一定不變の法則の下に組織せられたる、一の邦域なりとの事實は、神は超自然界に於ても、亦同一様に動作すべしとの、最善にして且尤も満足なる證憑也。夫れ一たび天體の秩序整然たる壯觀を一瞥したる者は、誰かまた、神は事毎に、法則及嚴正なる組織的一致の中に、動作し給ふを疑ふ者あらんや。

三、神は至高の智慧たり、且完全の道理たるが故に彼は彼れ自身自ら法則及組織的一致に愛着するの傾向あるべく、而して彼は、吾人よりは位階に於て一層高尙に、且其知識に於て一層廣潤なるが故に、此の性質も亦た、吾人よりは覺かに強大なる可し。されば如何なる事實に於ても（最微物に至るまで）、彼は普及統一的な大法より錯行し給ふとあるべしとは、吾人の到底信ずる能はざる所也。——少くとも、彼が吾人救拯の恩恵に於て顯はし給へるが如き、至大至高の事業に於ては、殊に然りとす。

四、道徳上及宗教上斯の如き信仰の必要は、更に吾人をして此思想を虧く能はざらしむ。試に此信仰を取り去れ、吾人は直ちに迷信の中に沈入せん。今夫れ、篤信なる基督教徒ありて、彼は奇跡を信じ、又一切の組織及法則以外に行はるゝ擾理をも信ずとせよ、彼は多神教を距ると違からざる也。蓋し秩序及法則なる觀念の、吾人が心中に喪はるゝ時は、是れ則ち唯一神の信仰死滅するの時也。而して吾人倘し、同一の神が、渾て一定不變の秩序法則以外に、動作するとあるべきを信ずるを得ば、吾人は又た唯一の神が、自家撞着の動作をなすとあるべきをも信

するを得んとす。因て余は苟かに憶ふ、多神教の起原は、概ね此の如き行歩に由来する者ならんを。蓋し無規律に動作せる一神を信ずるの迷信より、却て一層自然に、同一事を做し得べしと信ぜらるゝ、多神の信仰に推移するは、甚だ容易にして且自然なりとす。

然れども爰に吾人の前に横はれる首もなる困難は、神の超自然的動作は、一定の法則に由て遂行せられざるべからざるの、道理ある信仰を確定するに非ずして、之は果して如何にして然る乎、將た如何にせば、合理的に思想せらるべき乎を發見するに在りとす。而して今吾人が力を竭して致究せんと欲する所のものは、實に此點にある也。

諸て今前述せる斯の大事實を、正當に且明晰に、思料し得るの道を開かんが爲めに、吾人は先づ、法則、即ち通例法則なる兩中に合示せる者に關して、或る須要の區別を探索する所無るべからず。

抑も此點は、古來種々雜多の意義を以て用ひられたり。然れども其雜多の中に於て、常に邊徼して保存せられたる一の要素あり、即ち其中に存する一致同見と云ふ事也とす。細言すれば、精密に同一の場合に於ては、恒に（恐くは永遠にまでも）精密に同一の事物を惹起し、指導し、命令すと云ふとなりとす。之あるに非んば、如何なる法則も決して法則とは曰ふ可からず。

吾人は已に此根本的事實を觀察したるを以て、今や進んで、自然法及道德法の區別を探討せん

法則には種々あり然れども其終始均一を規定するに於ては一也自然法あり

道德法あり

とす。而して蓋し自然法とは、自然界の或存在者、若くは物體が、其本來固有の條規に據て、終始一徹に動作せんとするの法則也。例へば、如何なる物體も、其物體たるの故を以て、其物體の容量に準じて、地心に向て墜下するが如し。

然れども道德法に至ては、決して物體、或は原因結果の連鎖中に於る、如何なる物質にも關係せず、單だ自由靈覺者、即ち自擇力ある者にのみ關する也。その統轄や、權威に由るとにして、勢力に由るにあらざ。是（權威）は命令せん、然れども之として決定せしめ、或は實行せしむるとせざる也。是は同意すべく、又選擇すべきを薦め、或は實行を誘獎するとあらん、然れども彼れ自ら選擇するまでは、何事をも作さざる也。將又是は責任を彼に負はしめん、然れども是に聽従する否とは、彼れが自由に在り。是は先きに警誡し、而して後に懲罰するの外、何事をも強迫せざる也。

然り而して、基督及聖靈に於る神の超自然的事業は、是等二種の法則（——即ち自然法及道德法——）の、孰れにも編入する能はざるは、一目瞭然なりとす。蓋し思ふに、或る點までは、神の性質は、彼が行爲の法則たると、宛も吾人の性質が、必然吾人の法則たるが如くなるべし。乃ち吾人にして類智を有せん乎、吾人が類智の性質は、必ず類智の結果を呈すべく。又若し吾人、形状、空間、時間、眞理、正義、公道等の、必然的觀念を有せん乎、吾人の行爲に於て、

幾許か是等の觀念を表現すべきは、固より論莫しとす。將又吾人、若し自由の存在者ならん乎、吾人は純乎たる物體の如く、因果法の下に動作する能はざるは、言を換たずして明かなり。夫れ然り、然らば、神若し其性質に於て無限ならん乎、彼は彼れの行為に於て、無限の徵候を顯はすべきは、また彼が性質の定法なるべく、若し彼れ幾何學的觀念を有せん乎、彼れの工業は、必然の結果として、幾許か幾何學の法則に、或る一定の關係を有すべきは、(——例へば吾人が圓形、隋圓形、拋射的弧線、及光線の微妙なる三角形に於て、發見するが如き——) 是亦た必至の理なるべし。されば夫の大家フーカーク氏が主張したる所は、洵に宜なりといふべし、曰く「神の實體(性質)は、彼れの行為に關しては、一の法則の如し」と。而して彼は仍ほ所見を布延して、「三一の秘義を揣摩して思へらく、一にして又三なる神は、其本體一にして、三の「ペルソナリティー」を有するが故に、彼れの行為に於ても、亦斯の性質に應ずる所の者あるべきは、恐くは必然の理なるべし」。

若し復吾人、道徳法に就て曰はん乎、是は吾人の上に注たるが如く、また神の上にも全然主たるの法則也。是は正義及博愛なる、永遠必然の法則也。此法や、永遠より彼れの全心を以て認識し、且同意する所にして、是は彼れの性質に於る、永古不易の秩序と、聖徳と、榮光との、願て以て立つ所の基礎也。然り而して彼が己れの性質中に嘉納したる斯法則は、勿論復た彼が

然れども
神の超自
然的行為
は、基督
に依て決
定せず、
これは價
に彼れが
目的の法
に服従す

部下の常規たらんが爲めに、恰く字内に公布する所の者たる可し。然れば道徳法は、神の自由なる同意に依て、神の性意を形成し、且つ彼が統治の性質、又目的をも指定する所の者たる可し。

夫れ斯の如く、自然法及道徳法は、神の萬行を決定し、形造するに於て、與て力ありと雖も、吾人は第三種の法則、即ち目的に係る法則(——別言すれば凡そ理性を有する者が、其目的を達するに於て、常に取る所の法則——)を觀察するに非れば、未だ容易に神の超自然的事業は、一定の法則に由て指導せらるゝの事實を、思料する能はざる也。吾人の已に言へる如く、道徳法は神の性質を形成し、又隨て彼れの目的を決定す。されば彼は其性質に於て、道徳上完全なる者なるが故に、道徳上の完全、即ち聖徳は、彼れ自身、及彼が萬物を創造し、或は統治し給へる、終局的目的たるべし。蓋し若し彼にして、聖徳を以て、單に或他の目的(例へば幸福の如き)に達する方法となすに過ぎざらば、彼は唯之を一の方法と見做して、聖徳を貴重せざるも亦あるべし。然れども是は決して聖者の性質に適合せず、而して若し果して聖徳として、神の終局目的たらしめば、彼れの世界に關する總ての設計は、之を成就せんが爲めに、悉く神の目的に拘て兼注すべく、彼れの經驗は、感悉く神目的に適合せ、秩序及組織に合するに至るべし。將又自然界は、夫の諸原因、及諸法則の大器機を率ひて、之が爲めに協働すべく、一切

爰には自
然界の如
く同一事
物に於て
も、
唯永遠に
前進的運
動なる而
已

降り降るべきは、疑ふ可からず、何となれば、彼れの経験は完全に於て、彼には變化あることなく、又轉動して顯はるゝ影も無ければ也。あゝ吾人は嘗て聊かも之を思考せざりき、又短慮淺識の迷信家は、神は隨意に世界を祝福せんが爲めに、彼れが永遠の法則を破りて超脱し給へるは、反て彼れ取て、一の功績なるかゝり如く思想しつゝありき。然れども實は、秩序を而も永遠秩序は、終古言て變ぜざる也。

大抵は曰はん、然れども人間の救拯に關するが如き事業にして、百事一定の法則の下に、秩然生起するならんとは、如何にして思料するを得る乎と。余は之に答へて曰はん、此信仰に關して、吾人が、其法則は如何に動作するか、將た其法則は何なるやを思料するを得る乎否やを究むるは、左程必要の事にあらず。吾人の要する所のものは、單だ之が果して可能的及蓋然的事實なるや否やを發見するに在り。若し之を發見するを得ん乎、假令吾人は其法則を知らず、或は其作用の秘義を發見せずと雖も、或法則の存在して、統率しつゝあるを疑ふ能はず、又其信仰を放棄する能はざるは、宛も自然界に於る普及的統率に於る信仰の如くなるを得んとす。而れども、吾人は奇跡の法則の何なる乎を語る、即ち之は、之を行ふ者に於る、神の使命を證明せんが爲めに行はると云ふが如き是也。然れども其行はるゝ特殊の場合の時日、及性質の如き、將た何故に此人に依て行はれ、彼人に依て行はれざる乎、何故に一の時、或は一の時代

に行はれて、後世には行はれざる乎と云ふが如きに至ては、到底吾人の發見する能はざる所也。夫れ法則其物は、吾人の搜索し得る限りに非ず、然れども或る法則の有るかゝりて、精密に同一の事情、或は同一の靈の關係ある場合に於ては、何時にても、(永遠にまでも)精密に同一の奇跡の行はるべしといふの一事は、吾人神の聰明を疑ふにあらざるより、決して疑ふ能はざる所也。何となれば、若し神の目的に於て、全然同一ならんには、彼れの聰明の點に於て、或る缺點あるに非んば、精密に同一の場合に於て、精密に同一の事物を行はずして錯行し、或は空しく其場合を通過する能はざるの理なれば也。然らずんば、彼れの行爲は、前後孰れか遺失なりと曰はざるを得ず。若し彼れ後時に於て、智慮完全なりしとせん乎、前時に於ては否らずとせざるを得ず。若又前時に於て然りしとせん乎、後時に於ては否らずとせざるを得ず。然りと雖も、吾人が「精密に同一の場合」と云ふときは、是れ果して幾許の事態を含有せるかを注意するを、尤も肝要とす。何となれば、一たび之を考思するときは、自然界及超自然界の間には一大深淵の存するあるを、容易に知了し得可ければ也。而して之に由るに非んば、後者の一瞥甚だ不法亂雜の如く見ゆる所以のものを、解釋する能はざる也。それ自然界は、或強者に依て運轉せらるゝ、複雜の一大器械也。さればこそ、是は間斷なく回轉し又回轉して、爰は四季と歳月とを生じ、其雨露と、暴風と、氣候の變化とを繰返し、同一の場合と時刻とに於て、大抵

同一の事物を作すなれ。然れども心靈と、社會と、世代との事に至ては然らず。こゝには、運動は循環的にあらずして、前進的なり。永遠に前進的也。何事も繰返さるゝものある無し。それ何人も昨日を再び生ずると能はず、又過去に於る何れの時代、否其一年さへも、喚回すと能はざる也。蓋し種々の事情は、相結合して、或る類例を生ずるとはあらん、然れども是れ決して同一なるにあらず、否幾んど同一ともいふ能はざる也。若夫れ、殆んど併しく、教主の「ソ」の奇跡の繰返しを要する場合あらん、然れども其間に多少別箇の奇跡を要するが如き、幾千の相違は必ず有らん。而して縦し外部の状態は、如何に精密に同一の如く見へんも、内部の情況、及心靈上の關係に至ては、殆んど類似の點を滅却せんとする程に、大差あらん。例へば、マルタ島に於ては、保羅をして、パンテラスをその熱病より起たしめ、ミレタムに於ては、トロピモを病瘵に遺さしめたるが如き是也。然れども、吾人は斯の如き差違不同の中にも、決して均一及法則に對する、反證を見せざる也。何となれば、實に其間に、吾人が最初假定したるが如き、場合及事情の再發なるもの無ければ也。是故に若し奇跡が、一の時代に顯はれて、而して他の時代に顯はるゝとなしとせば、是れ必竟、世界は常に一直線に前進して、過去に於る事情及場合を再發すると莫く、却つて絶へず其事情を新にし、爲りに之に適應せる新處方を要すれば也。されば自然界の運行は、同一事の繰返しに過ぎずと雖も、超自然界の運行は、曾

て何事をも繰返すとなく、隨て吾人をして、一見法則なる者あるなしと思せしむる如き、殊異雜駁の觀を呈するものと云はざるべからず。然れども是單だ外觀而已。神の完全の智慧は、尙ほ同一の場合には、同一の事實を假られば已まず、而して全く同一ならざるも、事情の殆んど類似せる場合には、殆んど同一の事實を假らんとを要求する也。然り高事は假ら、法則てう均一の中に起るもの也。

自然界の
神の顯見
を矯正す

斯の論旨を尙ほ追隨するは、最早必要にあらざるべし。然れども吾人が本章を本論に擱くに先ち、自然理學者、及自然界の謳歌者が、通例懷抱せる一二の妄想（一）其懷疑は正式的議論より、寧ろ或一種の感念に基ひせる（二）に留意するは、敢て不可なかるべし。蓋し彼等は、大に自然界に於る秩序ある一定の統治、及法則に依て感動せられ、之を以て、吾人の譲り得べき神の顯現中の、至大至高の者と思量せり。而して其之を仰敬頌讚するや、幾許か神に關する基督教的の思想を輕侮するの跡を呈するに至ると、鮮なからずとす。惟らしく、基督教徒の宣傳し、或は祈禱する間に於て、神に期望するが如き事物を執行せんが爲りに、彼れが法則なる高位を捨て、下降することあるべしと思像するは、只極甚の輕侮者にして、初めてなすを得べき而已と。斯くて彼等は、青春を仰ぎ、永遠渝るとなき無数の殉道が、各々其軌道を守り、巴比倫暨び埃及の星學者の、久しき以前、目睹したる所、今尙ほ依然たると、將た來らんとする懸

き後代に於ても、秋毫變更せんとする兆候なきを視て、方に驚歎して曰はんとす、神の如何に崇高偉大なるかを觀よと。彼等は復た重ねて言はんとす、一定不變の法則が、伸しく最瑣物に至るまでも支配せるの迹、較明昭著なるを見るに於ては、別言すれば、夫の鹽分子、及一砂礫の微に至るまで、其處に微分子てう小天文學あり、且其法則は、衆星と偕に久しく、其範圍なるは、彼等の反映なるが如く然るを視るに於ては、吾曹爾々その廣大なるを驚嘆せざるを得ずと。然れども神爲の絶奇なるは、實は茲に在らずして、反つて彼れが範圍なるものをして、千萬無量の用に適せしめんが爲めに、屈撓し易からしめ、以て之をして、(妄用する者あるにあらざるよりは)秩序及法則の組織に於て、列宿の間に存するが如く、爾く充備完全なるものを生由せしむるに在り。夫れ一點一位に永住せる範圍は、決して高貴なる者に非ず。却て秩序の最卑に高貴にして、且絶妙なるものは、使用及び發現に於て、伸縮自在なる範圍に在る也。サリ、ヤールス、ペルは(千七百七十四年蘇國エナンゴロに生れ、千八百四十二年死す、解剖學及醫學に關する大著あり)手指に巧妙なる關節有て、之が器械的に固く緊握するに於て、神工の美なるを見ずして、唯其真乎に絶美絶妙を稱すべき所は、之が伸縮自由にして、善く幾多無數の使用に服従するにありと道へり。吾人をして之が幾が下解し易く、且吾人の思想に能く投ずるの故を以て、單だ自然界の不動性にかみ、必書を著はるゝと勿らしめよ。夫れ容積也、重量也、距離也、規矩也、斯の如き者は、神の創造工に於る品性

又兩界を比較して自然界を過譽するの謬を破す

の、最高標とするに足らず。抑も眞乎に彼れの榮光たり、且つ彼が萬物造營に關する智慧の最高標は、彼れの事業は、一定不變の秩序中に確立すると同時に、毫も損害若くは損裂を生ずるの患なく、彼れにも將た吾人にも、渾て自由の意志を奉承して、最劣等の者にさへも、甘んじて伏従し。斯くて吾人が隨意の役務に服し、且恒に吾人相互の間に、輕快なる媒となり。彼に取ては、彼が手工を顯はすの手となり、或は日に日を細く、無を傳ふるの舌となり、若くは夜に夜を繼で、知識を運るの使者となり。吾人に取ては、吾人が事業の基礎となり、又吾人が選擇の器械となり、而かも、是厥な彼(神)が寶座の如く、爾く萬古不易の完全なる經綸、及び法則の、序を追ふて成遂するに在る也。而して、此處に信仰の教義は確立し、此處に所應に關する教義は義とせられ、且教徒は之に依て、神は彼を眷顧するを得、又彼れを救護せんが爲りに、諸原因の間を自由に來往し得るを信じて、安慰を得、斯くて彼をして、神はかの堅牢なる科學的秩序の中に幽閉せられ、最早自ら人事に接するの能力を有せざるを發見して、意氣揚々たる夫の陋劣なる器械的懷疑論に比すれば、幾千萬倍優越せる、高尙の意識に到達せしむ。吾人の宜しく着眼すべき他の一點は、自然界及超自然界の、比較輕重に關係す。蓋し自然理學者、及自然界の謳歌者は、未だ基督教の大思想に慣熟せず、又其幽玄深遠なる秘義に關して、聖き經驗を積まざるが故に、超自然、即ち基督教を以て、唯僅かの例外的事實、若くは怪異妄

眞の理想に過ぎずとなし、斯の如き者は、決して之を信奉するに足らずとして、之を一笑に附し、かくて其狹隘なる邦域を去て、彼等が所謂一層廣大にして、且一層満足なる教義（——夫の自然論なる大教義——）に適かんとするを常とす。彼等謂へらく、爰に變化あり、美あり、崇高あり、偉大あり、又神に合當せる牢固堅實なる秩序ありと、是實に、彼等の想像せる眞平の啓示たる也。

嗟呼彼等は、超自然界中に包含せる事實を思料するに、如何に不敏なるよ。夫れ吾人は、宏壯靈活なる思想、神秘幽玄なる哲理を發見せんが爲めに、自自然界に往くべき乎。自然界を目して、大啓示と曰ふべき乎。自然界に行て神を拜するは、徑ちに神を讚るよりは、更に勝れる乎。此處（自然界）には、彼處（超自然界）より優りて、深遠なる眞理と、崇高なる品性と、吾人の心意をして愛着せしむるに足るの、榮光ある思想ある乎。將た金石及植物界には、耶穌の生涯より勝りて、優美なる趣旨ある乎。又颯風及び彩雲の凝て壯麗なる堆積をなす處には、十字架の悲憤蕭然たる光景に勝りて、吾人を感動せしむるの大觀ある乎。夫れ自然界は物轉の邦域にして、超自然界は靈者の邦域也。其處には回轉して又回轉し、常に同一の處に駐在せる、自轉の世界ある耳。此處には心靈、社會、眞理、自由、及聖き統治なる、活潑々の大帝國の、自ら發現して、絶へず廣潤なる、萬種なる、而も神の如き慈愛を以て、進歩開發しつゝある有り。其

處には吾人四季の歌、若くは「マオーシツク」（羅馬の詩人オウィディウスの著作の時あり）を有する而已、此處には吾人「パフダイス、ロスト」（失樂園）を驅ひ出るの絶趣を有す。其處には神が彼れの兵事を遣り、之を放て自轉せしむるを見るのみ、此處には彼が彼の後へに其萬軍を統率しつゝ、乘出るを見る、而も其經綸は至て裕大に、且其工業は至て驚嘆すべく、善徳と慶福とをして、最後の勝利を奏せしめんが爲めに、衆軍を指揮統督し、竟に之をして、善盡し美盡せる完全の社會を建設し、以て爰に衆世界の無數住民（——天使、天使長、「ササフロム」位ある者、主たる者、政を執れる者、權威ある者、及び人類の聖者等——）を算めて、「一大王國を成さむめ、且其輝光をして、彼れが智道及改造の恩惠なる偉業の中に、彼等が永遠に攻究するに足れる、智慧の浩卷を發見せしめんとしつゝあるを視る。

嗚呼吾人は、竟に神の二邦域の眞價を全く知了し盡す能はざる也。已に前説せる如く、一に於ては、秩序は唯外面的、且感覺的に過ぎず。他に於ては、是れ尤も深遠にして、其經綸の充分なる發達を遂んには、永遠を要するほど、玄奥にして且濶大なり。然れども之には尙ほ經綸あり、秩序あり、且眞理と道理ある也。熟々使徒約翰の黙示録を按ずるに、彼が現實ならざるものを開示せんとするに方て、種々様々に精密なる數字を用ひたるは、大に闡明せんと力むる所のものであるが如し。例へば七人の天使、七箇の筵（ツラ）及七箇の壘（ツラ）と云ひ。或は四個の獸、及二十四人の

長老と云ひ。或は十四萬四千人の各が、録されたりと云ひ。或は新エルサレムなる城市は、四角にして、其高さ、長さ、幅さ皆均しと云ひ。或は又、十二種の寶石なる、十二の基礎の上に築られたる、十二の門は、十二の天使を以て衛られたりと云ふが如き是也。——惟ふに斯の示現者は、此の如き形容と、此の如き精密なる数字とに藉て、吾人をして可成丈、神が一度び墮落したる靈者の中より、再建せんとしつゝある、秩序整然たる榮へある社會の、奈何なるかを思想せしめんとしたる也。吾人は茲に、その萬般の事物、之に法則に據り、其神たる吾人たるを問はず、如何なる經驗も、如何なる行爲も、如何なる喜樂も、咸々悉く永遠の眞理と道理の中に於てせらるゝ程に、爾く完全なる邦國の、樹立したるを觀る。而して如斯邦國は、自然界よりは豊かに騰りて絶奇なりと曰はざる可からず、何となれば、凡そ自由を有する靈者は無覺の物躰よりは、之を統練するに於て、更に大に困難の事業なれば也。

第十章

耶穌の品性は彼が人間以上の者たるを表明す。神の超自然的施設の必要なるは、吾人の先に開陳したる所、而して斯の如き施設は、自然界の秩序と並立し得べく、隨て是は道理上可能的の者なるが故に、又蓋然的希望として期し得べきとも、亦已に開示したる所也。是に於て乎、吾人は今直ちに一大問題に逢着するに至れり。——曰く、斯の如き縣城の大事を、吾人は果して事實上に發見するを得る乎、神の超自然的施設は、眞箇に建立せられ、而して之は充分の證據に依て、證明せらるゝ乎と云ふ是也。

而して吾人の第一に問ふべき所の者は、基督教の聖書也とす。何となれば終始超自然的事實、及び行爲を論じて、所謂神の國或は天國と呼はるゝ天の制度が、竟に耶穌基督の身に於て、地上に建設せられ、而して是は實に人類救済の恒久的、超自然的療法なるを闡明するは、聖書ゆ著しき特性なれば也。此見に憑れば、基督教は單に二の組織的教義、若くは倫理的修養の道に非ずして、自然界以外、及以上より、自然界に降下し來りたる一大勢力にして、宛然一箇の奇跡たる也。別言すれば、是は耶穌基督の身に於て、顯然自然界に入來り、且彼に於て組織せ

耶穌の超
人性は充
分に彼が
品性に依
て證明せ
らる

彼れは初
頭完全の
幼児たり
しを表明
す

られて、一の形跡を取りたる、歴史上の超自然的一大運動なりとす是故に、彼は實に斯教の骨髄、即ち唯一の勢力にして、全跡の組織は、彼と偕に立ち、彼と偕に仆るゝ也。
左れば吾人は今一に、斯の骨髄に向て、吾人の注意を集中せんとす。而して太陽の照耀せるを證するに方て、光線の外、別に必要なる者無きが如く、耶穌は彼れ自身の自證に依て、己れを證明する所以を見んとす。此故に、單に彼れの生涯、及び品性を審查するは、是れ彼は人間以上の者たる、(假令彼は人なりと雖も)、宛も彼れの奇跡が、純乎たる自然界の出來事以上の者たる如くなるを、知るに於て充分なりとす。然り、彼の生涯、及彼の精神なる單一の證據は、彼が自白せる、「我は上より出づ」「我は天より降りり」との言の充分なる證明也とす。是故に余は確信す、基督教の超自然的制度たる「隨」の論證は、耶穌の人間以上の者たるの一點に在て存すと。何となれば、若し耶穌に、人間以上の品性あらんか、是れ則ち或る自然に屬せざる者が、自然界に入來りたるを其に明晰にして、不信の迷夢は、忍る難きべきければ也。惟て今吾人が彼を觀察するに方り、彼が品性の根本に於る第一の特性を以て、吾人は、彼は完全なる少年として、人生を首めたるを視る也。見よ、幼時に於る彼は、其性情純粹潔白にして、宛も爛熳たる美花を觀るが如し。抑々人間以上、即ち天眞の幼孩てふ觀念は吾人之を想像するに於て、頗る困難なるを覺ゆ、然れども聖經記者は、克く僅々數言の中に、巧みに之を描き出

したり。乃ち吾人は經に於て、彼は豫り「夫の聖き者」として告知せられたるを睹る。蓋し此優美にして、而も有力なる一言は、正に吾人の思念を高めて、然く神秘なる性情の、一端を窺はしむるに足れり。而して彼が未だ幼なるや、彼は衆人に敬愛せられたり、今その外形的景狀の記載せられたるものを藉りて曰はん乎、彼は成長するに従ひ、益々神と人との愛せられたり、念ふに斯兒、その愛すべくして、且美麗なるや、天地も爲めに、彼の上に笑を含みたるべし。而して之に加へて、この兒稍々成長し、精神健か、智慧益々増さ、神の恩寵(即ち美とす)の力彼れの上に居れり云ふを見るに迫んでは、吾人は宛も陽春一たび來て、天上の曇花漸く綻ぶを睹、且つ他界より吹來て、吾人を襲ふの香氣を聞くの思ひある也。而して其續に十二歳の時に於て、彼が當時の大學者(即ち神學に在る教師等)の中に立て、之を問答する所あるを看るに其間に、分毫も或基督教の「ラビ(教師)、若くは愚蒙輕佻なる信仰者等の、屢々附加せるが如き、早進と過敏の能ある莫く、教師等は少年不似合なる早進と無禮との爲めに、感觸を害せらるゝとなく、反て斯の如き理會力が、いかんにして、爾く妙齡にして且純朴なる者の心に、存在し得たるかを見て、驚嘆したるが如し。且つや彼れの母は、其處に彼等の中に彼に尋ね逢ひ、彼に諫戒を試みたるに、彼れの答言は、甚な奇異にして解し難かりき。惟ふに彼女は思念せしなるべし、是れ必ず彼が幽秘なる生涯、及び彼が平常に於る、神妙なる行爲

に合するの、或る深意義を有するならん。斯くて彼女は彼の言を心裏に藏り、空しく彼が思惟の奈何なるかを想像しつゝ、郷里に歸り往けり。ア、斯の母が、久しくその胸中に藏りたる神聖にして幽玄の秘義たる、夫の聖き者、彼女が夫眞の幼穉より、十二年の久しき、留意着目したる、夫の少年は、頓て彼女の思量すべからざる深奥なる隠語を以て、言を作して謂けらく、「我は親父の事を務むべきを知らざる乎」と。

然りと雖も、記應せよ、吾人は是等傳説の言は、一々眞なりと云ふにあらず。吾人の只言ふ所のものは、此等の傳説が事實なるにせよ、將た二の小説に過ぎざるにせよ、鬼に角、彼に完全にして神聖なる少年（——詩人の好んで描出せる如き、單純にして、愛すべく、且類教たる純平たる人間らしき少年に非ず、神聖にして夫の空氣に盈る「少年」——）の傳記ありと云ふはなりとす。此點に關しては、耶穌妙齡の品性は、古今異歩と稱すべし。吾人の記應に存する所に依れば、吾人は未だ、凡そ人物を傳記せんとする者にして、彼等純潔無垢なる少年として、其生涯を始りたるを想像したる者あるを聞かず。若し其傳記ありとせば、偉人物の幼時は、概ね同一様にならざらん。吾人の如く記應せられたり。否とせば、其凡庸に超越せる所は、唯或る怪異の談に過ぎずして、決して眞平に品性の偉大、若くは遺傳の卓越を示すものに非ず。偶々少しく偉大なる人物ありと思へば、其人に異れりとして描出さるゝ所は、決して少年妙芽の中に合著せられたる齊整完備せる美の、自然に開發したるに非ずして、是れ唯素悪は修補せられ不調和は交除せられ、將た儼岸は失敗に依て修飾せられ、情態は理性に依て緩和せられ、過敏は經驗に依て老實にせらるゝ等、渾て修正改補の工に練て作爲せられたる、品性に過ぎざる也。然り大抵は一種の興味を以て、幼時に於る幾多の執拗性急は、練磨の功に由て、竟に人衆の頌贊を博するに足れる、智慧、正義、公殉の氣象に、進歩せるを記するを常とす。

彼の幼時の録さるるや自然にして著も過大憶想の懸なし

て少年妙芽の中に合著せられたる齊整完備せる美の、自然に開發したるに非ずして、是れ唯素悪は修補せられ不調和は交除せられ、將た儼岸は失敗に依て修飾せられ、情態は理性に依て緩和せられ、過敏は經驗に依て老實にせらるゝ等、渾て修正改補の工に練て作爲せられたる、品性に過ぎざる也。然り大抵は一種の興味を以て、幼時に於る幾多の執拗性急は、練磨の功に由て、竟に人衆の頌贊を博するに足れる、智慧、正義、公殉の氣象に、進歩せるを記するを常とす。加之ならず、如何なる時代の如何なる記者と雖も、若し其目前に實在を見るとなくして、單に純粹無垢なる耳ならず、又人間以上、即ち天來の少年を描かんとせば、彼れ先づ自ら幾分か人間以上の者ならざる可からず、然らざれば、彼は唯徒らに幾多張大の言を堆積し、堆又堆をなして、卒に天も地も、分毫其眞象に類似せるを、發見する能はざるに至て止まん而已。今進んで成熟したる耶穌の品性を考察するに方り、吾人は直ちに、彼には諸他の人物に異なれる。一要素を發見せざればならず、彼れの無罪なると則ち是也。吾人が斯く言ふときは、彼は眞平に一點の罪汚無かりしと云に非ず。之れ或は否むを得ん、故に是は吾人の愛に假定せざる所也。唯吾人の言ふ所の者は、外觀より觀察したる所にては、彼は一の破壊的情念に動かされたることなく、劣弱なる者に對すると至て柔和に、何人にも曾て邪惡或は損害を破らしめたる

彼は常に無罪者ととして表顯せらるる而も毫も無力の感なし

なく、一箇の完全なる無害者なりしと云ふに在り。夫れかの悉皆の優處を危ふすとなしには、偉人物には到底被辱する能はずと思せられたる、羔羊の譬喩は、毫も斯の如き恐れなくして、彼れに適用せられたり。蓋し吾人は、怯弱と無害とを常に聯想す、而して其聯想や至て強勢にして、如何なる傳記者も偉人を傳するに方り、首めより彼れの無罪を假定する者なく、又假定し得べしと思惟せざる程なりとす。夫れ幼孩の無罪なるは、吾人之を確認するを得、然れども成人にして全く無害に、且無邪氣にして、瞬時も決して悪を行はざる者を睹れば、吾人は彼が活氣なく、且勇氣に乏しき、凡庸者に非るなきかを疑はんとす。然るに基督に至ては非らず。彼は常人の成し難きものを成せり。彼は人間以上なる雄大崇高なる人性を有すると同時に、毫釐もその壯嚴を減殺することなくして、無罪なる清情を併有したり。實に天賦の無罪が、自然に開發したるもの、如く、將た純乎たる天眞の赤子が、其儘成長したる者の如くなるは、彼が性質に於る特殊の榮光なりとす。吾人は深く斯の奇異なる結合の、甚だ有力なるを感ず。然れども吾人は之を思想し、或は之を心中に有つて於て、吾人は時としては、通常人類の水平に下降し、不知不識の間に耶穌眞子の品性を離れて、代ふるに別種の異分子を雜るに臻る程、爾く困難なりとす。喩へば、吾人が「パリサイ」(當時に於る猶太教の一派)人に對する彼れの酷烈なる宣告を讀むや、其強暴猛烈の音調、殆んど罪ある吾人の唇頭より迸出する所と均しきを

見て、一驚を興せんとす。而して其顯露を來す所以のものは、吾人の中に在て、彼れの中に存せざるを曉らず。然れども若し吾人、之を以て無罪者の、胸中抑ふべからざる、醇乎たる雷火の、激發して痛苦なる義憤となりし者なるを思念するを得ば、吾人は毫も恚訝する所なからんとす。何となれば、世に凡そ無罪者が、偽善若くは弱貧者に加へられたる殘酷の威に依て、刺衝せられたる憤怒ほど、激烈なる者莫ければなり。されば吾人は彼れが神殿より兇兇商を驅逐するを見るや、宜しく粗暴劣情等、凡そ彼れが品性を傷くるが如き惡分子を、彼に被辱すべからず、却て斯說話中に在て、吾人の尤も注意を要する一點は、彼が此の如き群集を驅逐し得たる(單に勢力に依るもの、如く)に非ずして、彼等が斯一人——其容貌と風采に形はれたる無罪の烈怒は、彼等が決して領會する能はず、况んや到底抵抗する能はざる威嚴を示したる、神妙なる一人——の道徳力の前に、畏縮顛倒したるとなりとす。

吾人は無罪なる人性に、斯の如き剛氣と決斷あるの證明を、多く有せず、反つて吾人の常態として、別に深慮もなく、

「無力にして且つ淺薄なる無罪」

とて、之を輕悔するの傾向あるを以て、吾人は動もすれば、耶穌の義憤を以て、有毒なる私憤の如く思惟せんとす。然れども吾人は須く、耶穌は爰に神が其恩恵を、自然界の疾風迅雷の中に

包蔵(隠蔽)せしむる時、殊に著しく己れを顯示し給へる、厥神性を發揮したりと思考すべき也。夫れ果斷也、偉大也、將た剛毅也、是咸基督の有する所なり。加之、彼は尙ほ勝りて高貴なりと云ふ可し。何となれば、彼は之を愛すべく、且人情に通き、無罪てう軟衣の中に、之を包有したれば也、而して之が眞平の觀念たるは、古來曾て何人も彼を怯懦なりと思惟したる者なく、又何人も彼が生涯を見て、幾許か無罪てう感に動かされざる者莫きの事實に徴して明白なりとす。視よ、かの悖理暴戾なる彼れの敵すらも、我れ何の悪事を做し、やと反問せられたるとき、たゞ彼は彼輩の陋見に逆らへりといふの外、一事をも舉示すると能はざりしに非ずや。又かのドラトすらも、彼を釋さんとする時、我れ彼に罪あるを見ずと宣言し、且壓止す可らざる想念に震慄せられて、無罪の血より己れを潔めんが爲めに、其手を洗ひたるに非ずや。斯くて彼れは純潔なる、無害なる、汚點なき、聖者として死せり。而て彼は打撞せられたる花の如く其十字架の上に、罪なき首を垂るゝや、上なる太陽は愀然として其面を蔽ひ、下なる大地は惘然として震動したり。嗚呼斯の寰宇の慈悲痛悼、是れ天來の無罪者なる、彼れが崇高なる最後を弔するの、至當の敬禮に非ずして何ぞや、

彼れの敬
虔には悔
改あるを

吾人は今進んで、彼れの宗教性を究めんとす。而して是に於て吾人、彼れの宗教は、其基礎常人とは天淵の差有て、通常宗教性の根底たり、要素たる所の者と、完く反對の點に原づくを發

見ず而も
終給滯ら
ずして維
持せられ
たり

見せんとす。夫れ人間の敬虔は、愈々悔改を以て素まる者也。蓋し是は人間が、罪惡の爲めに窘められ、又罪科の感に刺衝せらるゝより、之を脱却して、神は歸らんと努むるの、一現象たるに外ならず。左れば尤も正義なる人々、否極めて自ら義とする人々さへも、其修行に際し、懺悔の告白と、改新の誓詞とを交へざる者は殆んど稀なり。然れども基督に至ては否らず。彼は其性來として、未だ曾て罪を認識したるとなき也。然り、基督は曾て一回も、彼れの現狀、及彼れの行爲に關して、痛悔したるとなく、曾て聊かも、悔恨若くは無力の感覺を洩したると無し、而して是れ彼が敬虔の一大特徴なりとす。却て彼は、大膽に彼を訴ふる者に挑言して曰く、「爾曹の中、誰か我を罪に定むる者ある乎」と。加之ならず、彼は復たその生涯の畢りに臨んで、毫も若痛の模様なく、肅然として神に上言して曰く、「我れ爾が我に委ね給ひし榮光を、己に彼等に予へたり」と。

偕今吾人の前に横れる問題は、基督は果して實に、彼れの宗教性に假定せらるゝが如き、遺誤なき者なりしや否やといふに在らず。吾人が茲に着眼すべき一點は、彼は兎に角然か主張したり、而かも單に言語に於て耳にならず、彼が平生の操行、亦歴々之を證し、而して此事實に縁て、彼れの敬虔は、全然萬人の敬虔に勝りて、特立獨歩せりといふとなりとす、而れども若し純然たる人間が、俄ち嘲笑を招くが如き過失を顯はすとなく、又彼れの朋友をさへも、嘔吐せ

しむるが如き、過誤若しくは怠慢を現はすとも莫くして、宗教上斯くの如きの状況を久しく保持せんとせば、必ず失敗せんと更に疑なしとす。あゝ單だ一條の懺悔、一滴の涕涙、一點悔悟の貌、將た一回の眞摯なる罪の告白、或は赦罪を得んとて天に對する一の哀求なきの敬虔なる哉、——何人に抱はらず、試みに斯種の敬虔を励めしめよ、彼の衷心、己れは一大欺罔者なるを感得するとなくして、幾轉瞬を經過するを得べき乎、將た毫も悔恨を感得するなき彼れの情性、些の懺悔に依て弱められざる彼れの驕傲が、自ら警醒して其悖理たるを認め、其誇張の實に笑ふに堪へたるを發見するまで、果して幾分時を要すべき乎。あゝ何人に拘はらず、凡そ自ら義とせんと試むる者は、反つて忽ち一個の顯然たる自欺罪に陥らざるを得ざるを發見せんとす。然りと雖も耶穌に於ては、斯の如き困難の踵至するを見出さざる也。それ彼は分釐の懺悔々恨を知らざる敬虔を以て素め、終生之を保維し、而も一點斑汚の見るべきものある靡し。

之を要するに、彼は無罪なる乎、將た否らざる乎、二者孰れか其一に居らざる可からず。若し彼れ果して無罪なりとせん乎、一の完全にして汚點なき人物が、曾て一度世に生存したりと云ふより、人間開發の法則に、一層大にして且一層明白なる例外果してある乎。若し又人間自然の開發以上のものは一切之を拒否せる人々の假定する如く、否らずとせん乎（即ち罪ありとせんか）、乃ち吾人は爰に、悔改なきの宗教、人間的ならざる天界の宗教、その幼時に於て未だ教

彼は人の
到底兼備
する能は
ざる情性
質を兼備
したり

訓せられたるとなく、又人の未だ曾て思想したるとなく、或は企圖したるとなき、一種の敬虔、——爾のみならず、罪人としては全然彼れの性情に適せず、畢生の力を竭すも、到底險越すべからざる一の假妄想談として存するに過ぎざる的の敬虔を、而も人類一般の仰敬を博する底の、牢固なる恩恵と美の狀態に於て保ちたる、一偉人を有するあるを奈何せん。嗚呼余は寧ろ純乎たる人間開發として知らるゝ所の總ての者よりは、匱かに廣大なる法外異例あらんとを望む。彼は復た、他人の不完全に且不十分にさへも、結合するを甚だ難しとする品性の諸要素を、完全に結合したるを見る。夫れ彼は曾て微笑したりと云はれたるを聞かず、然れども彼は決して峻嚴、酸酷、沈鬱、若くは不幸の感を、吾人に與へざる也。反つて彼は、恒に神聖なる喜樂を以て滿されし者の如く記載せられたり、曰く、「彼れ心に喜び云々」と。又彼れの方に世を去らんとするや、弟子等に其の喜を遺して曰く、「是れ我喜を彼等に盈しめんが爲なり」と。それ吾人は、其面未だ曾て晒を催したるとなく、又安慰の微笑に和らげられたるとなき人物には、永く伴侶たるを好まざる也。斯の如き殆んど人情を存せざる者に、吾人いかに同情を有するを得ん、又吾人いかに如此者に信任するを得ん。夫れ然り、然りと雖ども吾人、基督には同情を有するを得る也。他なし、蓋し彼が心中には自ら喜樂の洋々たるあり、又た彼は實に、其負荷する所の大任の爲めに、その偉大なる生涯も、殆んど倒壓せられ、且壓迫せられん計りに、吾人

のために、痛楚なる同情の経験を嘗めたるを睹ればなり、彼は眞に人生行路の難を識れり。彼は一人の有力なる友を有せず、又その首を枕する處さへも無かりき。凡そ斯の如き状況に陥りたる者は多少吾人が憐察の情を喚起せざるものなし、而して吾人は須く之に憐憫を垂るべきなり。然れども吾人は決して基督を憐憫することをせざるなり、沮喪せる卑きところより、之を提起せんと力むる者の如く、彼に就て思考せざる也。否々、彼は吾人をして斯くするを容さざるなり、然のみならず、彼れの困乏に就てさへも、餘り考慮せしめざる也。却て吾人、彼が逆境に在るを以て、彼が一層昭かに證明せられ、一層大勢力の源となりしを惟ふて一層貴くぞ思念する也。且夫れ彼は人類中尤も世に染汚せざる人なり、彼は全く世の與へんとする所のものを欲望せず、又其權利を羨慕せんとするの念に、心を奪はれたるとなく、况んや眩惑せられたると無し、然れども彼には分毫も、世より隔離せんとする者の如く、之に對して固く心を緊鎖する底の、隱匿的、厭世的、恨人的、酸情あらざるなり。彼は漸く他の世界に近くに従ひ（即ち現世を去るの期近くに從ひ）、新世界の人類を想ふと、一層嶄新に、且濃厚になれり。孩提は彼が欣悦の標表にして、彼の心は之を抱懐せんとして躍起てり。婚禮也、喪葬也、葬送也、是等の者は、咸彼の胸中に、其同情の琴線を發見したり。婚禮に在ては、彼れ之を祝福したり、喪葬に在ては、彼れ之を教誡したり、葬送に在ては、彼れ同情の涙を灑ぎたり。然りと雖も、

古來如何なる守錢奴も、彼が斯世界の上なる世界に於るよりも、強大なる欲望を以て、彼が財貨に愛着したるを聞かず。夫れ人は靈性的人物たらんと欲すれば、通世に陥り。社會の幸福快樂に對して寛容の見を有たんと力むれば、倏ち世に生葬せられて、形態の奴隸となり。之に反して、各箇の罪を^{ユウツク}支劔せんとして、謹慎警醒、倦ざらんとすれば、其弊や儀式的に流れて、自由を亡ひ。又或は高尚優美なる天の自由を羨慕すれば、瞬時にして疎懶無責任の生活に趨る。斯くて懸篤は粗暴となり、熱心は狂妄過激となり、溫柔は卑屈となり、確信は頑硬となり、寛容は放縱となり、慈惠は虚飾となり了る。嗟呼、厄弱なる吾人々類は竟に何物をも牢固に保持する能はざる乎。それ正義てふ中樞一たび潰裂するや、秤盤も亦隨て其權衡を失はざるを得ず。蓋し理想上の見に於てさへ、人の品性を、平衡に且適度に、勤學と經驗を積むも、尙ほ之を修整改補するを要せざる如く、爾く完全に描出するは、尤も熟達せる基督信徒と雖も、太甚だ難しとする所也。然ども基督の品性に至ては、決して修補を要せず、否匡正の微影をも要せざるなり。是は首めより畢りに至るまで、徹頭徹尾同一也。彼は曾て足らざるを増補したることなく、過ぎたるを削去したることなく、又何れの極端よりも反正したると莫し。將た彼れの品性の平衡は、未だ曾て紊亂せられたること無く、又修整せられたること無し。而して是が基ひたる驚くべき告白は、決して搖かされたることなく、又彼が主張するに於て、聊かも狐疑脚躓したること

彼の驚くべき要求は、家なきへも承服せしむる程に牢固に支障せられたり

と無し。

尙ほ吾人の注意すべきは、耶穌の世に對する態度の、渾て他人に勝りて大に奇異なる也とす。而も是が充分に維持せられたることなりとす。余が斯く曰ふは、彼れ自箇の身に關して主張したる、驚くべき要求なりとす。斯の如き要求は、曾て狂人と癡漢とに依て爲されたることあり、然れども余の知る所に憑れば、未だ曾て理性醒明なる者に依てなされたるを聞かず。然り竟に其大言虚妄によりて、全く世の信用を失墜すること莫くして、世に對する彼が如き超絶なる態度、神と本來の親和、即ち同一を主張し得たる者、古來一人も有らざる也。今假りに茲に一人あり、世に對ては——「我は父より出來れり」——「爾曹は下より出で、我は上より出づ」と曰ひ。又總ての智者及學者に對しては、大膽なる確信を以て、——「視よソロモンより大なる者茲に在り」——「我は世の光なり」——「我は道なり、眞理なり、生命なり」と云ひ。又凡ての民人及宗教に對ては、宣言して——「人若し我に由らざれば、父の許に往くと能はず」と道ひ。將た彼れの死に際しては公々然として——「我は萬民を率て我に就らせん」と約束し。無限の至高者(神)に對しては、——「我れ世に在ては爾の榮光を顯はしたり」と證言し冷く人類を招ては、——「我に來れ」——「我に従へ」と宣傳し。其れ耳ならず、人生の至親至密の關係の間にさへも立入り、最大の愛を要求して、——我よりも父母を愛する者は我に適はざる者なり」

と宣告したりと想像せよ。ア、坤輿は廣く、歲月は悠久なりと雖も、斯の如く虚妄大膽なる要求と、放言とを做したる例證、果して安くに在る。視よかれは悉皆の光明は己れに在り、彼に従ひ、彼に適ふ者は、是れ人間の終局、即ち至善なるかの如く揚言したるに非ずや。斯のごとき傍若無人の妄言を以て、世に臨みたる者、開關以來果して存したる乎。今夫れ假りに存在したりとせよ、彼はその狂妄の報償として、第だ世の譏笑と、嘲弄とを挑扇するの外なからんとす。然れども異なる哉、耶穌に於ては、何人も曾て斯く嫌忌侮慢の情を惹起したるを見ず。而して彼の福音書を讀む者にして、彼が自ら欺かれたると、彼が托言の甚だ誇大なるを譲りんとする者、千萬人中恐らくは一人も存せざるは、是れ彼が成功の尤も較明顯著なる證據に非ずして何ぞ耶。

然のみならず是等の要求の中には、秋毫も論駁し得べき者あるなく、又牽強附會したる、荒唐無稽の傳説に似たる、形迹の存するを見ざる也。蓋し是等は愈々彼が教旨の神髓に入り、若し之を除去して、一も純乎たる人性に超越せるものを貽すとなからんか、殘る所殆んど皆無ならんとす。且夫れ是等諸の正式的要求に比すれば、尙かに超越せる默會的要求の、絶へず保持せらるゝある也。則ち彼れの言に之れあり、曰く「我と我を遣はし、父云々」とあり「我と父」——斯くの如き言語は、抑々何を意義する乎。此耳ならず、彼は毫も僭越、若しくは妄信の感なく、

普通複數の語を用ひて、無限の至高者と己れを同等にして曰く、——我儕彼に來り彼と偕に住む可し」と。試に想像せよ、人類中の如何なる至大至聖なる者にあれ、將た預言者にあれ、或は又使徒にあれ、己れと大なる「エホバ」(神)とを並稱して、我儕と曰はば、是れ何たる僭冒ぞや。且夫れ、彼が「我父は我より大なり」といふが如き告白を要したる時、彼は彼れ自身に就て、吾人が如何に思惟するを欲したる乎。然のみならず、彼は謙卑りて常に自ら言へりし如く、自らを「人の子」と呼稱したる時は、是れ畢竟何を合示するぞや。又彼が曾て橄欖山の巔に立て、頑冥なる城市を下瞰し、斯の如き憐憫痛哭の言を作したるを睹よ、曰く「母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我れ爾の赤子を集めんとせしと幾次ぞや、然れども爾曹は好まざりき」と(——今假りに人あり、倫敦或は新約育の市を、此の如く痛哭したりと想像せよ、蓋し思に過るものあらん——)。又一の嘲弄せられ、世に棄てられたる人なる彼が、夕飯の時、自らの爲りに、記念の式を制定して、「是は我牀なり」——「我を憶へんが爲りに之を爲せ」と遺命したるを思へ、是れ必竟何を意味する乎。

余が斯く丁寧反覆、耶穌の超越せる要求を説述したるは、他なし、爰に彼れが人間以上の者たるに就き、敵すべからざる論證のある有れば也。古今上下千八百有餘載、是等饒多なる大言壯語は、虚憊を發露するに敏に、欺騙者の驕傲の挫折するに鋭なる、世界の中に公布せられ、

宣傳せられたり、而も此間、第に不學彼賤なる耳ならず、學者有力者をも包有せる、萬國民は咸悉く耶穌の名に無限の崇敬を表し、未だ曾て彼れの功績と、彼の要求との間に齟齬逕庭を發見したるとなく、曾て毫末も、彼が言の誇大に過ぎたるを感ぜしむるも莫し。是に於てか吾人は、彼が驚くべく自信自言したる所の者の、決して空言に非るの、鞏固なる保證を得たり。且夫れ吾人の一般に領會する所に據れば、彼れが殊に吾人の仰敬を博するは、彼が斯く高大なる要求を爲すと偕に、極めて謙卑遜讓なるに在りとす。夫れ彼が品位の絶大なる、彼が權威の崇高なる、彼が精神の純潔なる、吾人をして、彼が托言の大なるに驚かざらしむる而已ならず、却つて斯の如き者が、吾人の間に棲息するは、餘りに謙讓に過ぎたるに非るかと思はしむるものある也。余は彼を贊する者、彼に従ふ者耳が、此く感得したりと曰はず、是れ實に彼を信せざる者すらも、自然に且必然に感ぜしむる所なりとす。余は未だ如何なる懷疑家、若くは不信家も曾て虚妄者として彼を訴へんとしたる者あるを聞かず、又若し彼が最も牢固に、最も潔淨なる部分に非んば、最も薄弱に、且最も悖理なる、斯點に就て、彼を攻撃したる者あるを聞かざる也。來れ、凡て爾の聰明に依頼して、耶穌の純平たる自然の人なるを主張せんとする者よ、來て、如何にして、彼は單だ人間自然の開發に過ぎざるを發見し得るかを教へよ。爾の最善最賢と思料せる人物を擇べ、若し爾の欲する所ならば、一切の大哲學者、及び大聖人を列擧し、中に就て、尤

る完全なる者を撰出せよ、或は若し幸にして有らば、爾が概ね耶穌と平等なるべしと思惟せる或一人を拔擢せよ、(爾曹の屢々爲せる如く)而して彼を導ひて此試験場に前み來りて、試に斯く曰はしめよ、——「我に従へ」——「我に適ふ者となれ」——「我は世の光なり」——「爾曹は下より出で、我は上より出づ」——「視よソロモンより大なる者茲に在り」と。彼をして是等の超越せる要求を爲さしめよ、爾は直に、爾の髮に誇張したる榮光は、忽ち銳利なる批評的眼光の前に消滅し、己に人類の讚歎を博するに足らずなり了るを發見すべし。而して是れ何故に然る乎、此挑戦は果して公平に非る乎、爾は曾て彼(耶穌)の如く神秘の事物を語り得るを主張したるに非ざや、(若し耶穌を神性を有すとするも)爾は勿論人力に具はれる渾てを爲し得るの力あるに非ざや、(而して若し耶穌を單に人なりとせば、彼の如く言ふ能はざるは何ぞや)爾は卒先して人間開發の教義を主張したるに非ずや。爾は耶穌の言語に於る、幾多の過誤迷謬を訂正するの力ありと誇言したるに非ずや。然らば此一の試験に、充分満足なる解答を與へよ、而して其結果の——爾は單に人にして、耶穌基督は其れ以上なりといふ眞理を證明せざる所以の理由を示せ。然れども耶穌の性質の受動的方面(即ち忍耐力)に於ても、亦均しく特殊にして、吾人の注意を要する者あり、余は基督教の下に養成せられたる者を除くの外は、適當に、受動的美德を兼有し、或は之を以て完全なる品性に缺くべからざる要素と思考したりと、稱するを得べき大人物

彼は又眞
乎に受動
的徳性に
於ても優
越したり

の存したるを、未だ史上に回想する能はざる也。若夫れ強て其類例を求めん乎、忍くはソクラ
スは尤も之に近き者なるべし。故に彼が死に於る服順の状況は、頗る基督に似たる者あり。然
りと雖ども、熱々彼れの状況を察するに、彼が心情は其慘境に臨むに先て、己に斯の如き容態
を具へたりとは見るべからず。彼が公然の宣告に服順したるは、實は只竊かに困圍を通るゝと
を潔しとせざりし耳、而して之は、一は彼が國法に違背すべからざるは、凡そ其民の本分なり
と思考したるごと、一は(彼れの狀態より判断すれば)彼が遁走者の如く、國法及法庭の前より
逃避するは大哲學者に取て、不名譽の如く感覺せる、或る榮譽心に支配せられたる也。若し夫
れ「ストアック」派(希臘古代の哲學派)は、其大主義の一として、人生眞平の智慧は、受動的能
力、即ち正しく苦難を忍ぶに在りと爲したるは蓋し疑ふべからず。然れども彼等が之を思想し
たるは。或は感覺に對しては、心意を堅硬にし、或は人生の痛苦に關しては、之を反跳し、之
を振落し得るまでに、意力を強むるが如き、努めて苦難を感ぜざらんを工夫したる而已。然
れども是れ實は、全然受動的美德の存在を許さず、反つて渾て情性及忍耐てう種類の徳量を、
排擠し去る如き極端に迄、行動的能力を擴張したるに過ぎざる也。而して「ストアック」主義は、
此點に於て、總て世の偉人物の普通の感想に、善くも符合すと云ふ可し。彼等は概して事物に
方ては英雄的豪氣あり、邪惡を見ては、勇猛敢爲の義氣、胸中に鬱勃として抑ふべからず、患

害の敵すべからざるを見ては、奮進挑戦して快死する者也。然り世人一般の眼底には、久しく、忍耐、柔和、及び敵せずして難を忍受するとの如きは、唯怯弱の別名として映じたる也。然りと雖も、基督は是等一切の感覺に反して、是等柔和温順の受動性を、最も嚴肅なる宏壯偉大の品性中に併有し、加之ならず、吾人をして是あるに非んば、眞乎の大人物と稱するに足らざるを思はしめたり。

先づ彼が日常生活の間に存する苦難に、處する有様を觀察せよ。蓋し若し吾人、眞乎に人の品性を嘗試せんとせば、彼れ果して毫釐も脚躓すると莫くして、些々たる平生の災殃、及び人生行路の難に耐へ得るや否やを見るに如かず。人多くは堅剛勇敢の氣象を以て、節に死するを得、而して唯續かの疲勞困憊、或はある種類の固陋執迷、若くは一二憚悍輕浮なる抗抵に遭逢すれば、倏ち煩悶憂苦の深淵に投ぜらるゝ者、比々として天下皆然り。夫れ大機會は大精神を發揮せしめ、人心をして非常の高潮に激昂し、往々人をして己れ自身の水平以上に昇らしむるとあり。然れども平常の試誘に至ては、却て天真の素性(若し有らば其善と美と)を發露せしむ。然り而して基督が大事に於けるが如く、小事に於ても完全なりしは、別言すれば、同一の大精神を表現せしは、殊に彼れが品性に於る、人間以上の榮光なりとす。吾人は彼が生涯の歴史を通観するも、未だ曾て彼が失錯し、或は趑趄したるの微影だも、發見する能はざる也。而して是

彼は通常の試誘に於て過誤なかり

れ吾人、彼が彼れの如き大事業に、彼れが大熱心を以て、殆んど之を以て飲食に代ふるまで、其生涯の全勢力を傾注したるを思ふときは、彌々その非常なるを感覺せざるはあらず。夫れ人の大事業に當るや、屢々其熱心や往急に陥る。而して其一たび逆抗せられ、或は理不盡に阻碍せらるゝに遇へば、心勃然として憤激し、障礙と失望とを累ねる毎に、愈々益々懊惱窮迫し、竟に暴亂狂妄の醜態を呈するに臻る。然りと雖も耶穌は、或る道理の有るありて、彼れが洗滌困頓の間に於るも、彼れ宛も一の爲すべき事なきが如く、爾く平然として沈着せり、神聖なる忍耐の空氣は、到る處に彼を包圍せり。彼れはその事業に處するに、未だ曾て粗暴豪放の意氣を以てしたると莫く、如何なる試誘、如何なる抵抗の中に居るも、彼れ其沈靜を守ると、恰も雲上の人の如く、曾て之が爲めに輻晦せられたるとなく、反つて己れの脚下に之を踏過したり。彼常に貧乏に、數々飢饉に迫り、數々疲勞し、數々輕侮せられ、數々敵に嘲弄せられ、又友に棄てられたり。然れども決して失神したるとなく、決して錯亂し、或は狼狽したると無し。然りと雖も、彼れ決して「ストイック」の流を耐むものに非ず、彼れその優美なる感情的性質に、必然の結果として、顯然斯の如き災禍を感覺する也。しかれども彼れは又、其痛苦と俱に或る神聖にして且つ超越せる心神の平和を有し、而して之は力りずして自然に、渾ての疾痛痛苦を緩和するに足る。彼れ自己の氣質を抑制する如く見へず、寧ろ毫も之を抑制するの必要なきもの

の如く見ゆ。蓋し氣質なる者は、情性を意味すとせば、之は宛も閃光の、雲間に於る大氣の擾亂に次げるが如く、意志に従ふの狂暴なり。是故にかの黒雲を捲起し、天空を攪亂するの利己的なき處には、閃電は眞本稱を得て、恰も之が全く存せざるが如くならんとす。

彼れの痛
苦は時に
於ても度
に於ても
人間的に
非ず

若夫れ、所謂殊別に彼れの苦難と稱する、彼が最後の殉教の光景に關しては、其中に都て靡平たる人間の殉教より、遙かに超越せる性質の存するものは、蓋し賭易きことなりとす。試みに觀よ、彼が苦楚の最も劇甚にして、且最も激烈の場合たる、彼れの痛苦(ゲッセマの苦を指す)は、人間普通の理に依れば、全く其處を得ざるに非ずや。抑々是は時に先ち、未だ囚捕せられざる前、人間の見にては、斯の如き事の有るべしとも思はれざる時にありし也。且彼は概ね自ら其志望したる所に適きたるなり、而も其外觀は全く安全なりし也。彼れの門弟等は、一家の懇歎濃情に勝れる有様を以て、彼れの周圍に磨集せり。彼宛然波濤の寄せ來るが如き大群集の先きに立て、天地も震はん計りの懼呼喝采を以て覆かれ、方に擁立せられて王と爲されんとする程の榮譽を以て、市城に上り來りしは、實に僅な數時間以前の事なりとす。然れども爰には未だ顯然たる不祥の兆候も現はれざるに、吾人已に彼が至深の悶絶中に投ぜられ、彼れの感情は殆んど人間以上の痛苦を以て壓迫せらるゝを見るは抑々何ぞや。然れども一たび神定り、氣晴まり、確信と安慰とを以て、其中より出來るや、彼は忽ち捕へられ、法庭に曳かれ、竟に

十字架に磔せられたり而して此間彼が狀態に就て若し曰ふべきものあらば、そは彼が何人の思ふ所よりも、勝りて泰然たりしことなりとす、否彼が毫も自ら降て己れを辯護し、或は己れの罪なきを證明せんとすら爲さざりし事實なりとす。實に彼れの死するや殉教者の死の如くに非ざりなり。夫れ殉教者は其告白したることの爲めに死じ、而して後の沈黙は卒に前言を撤回する能はず、然れども彼は其告白せざりしことの爲めに死じ、而して其沈黙や今に尙ほ依然たり。嗚呼斯く吾人が彼れが事前の痛苦と、痛苦の時眞箇に來りしとき、不思議にも彼が沈黙を守りしことを以て、味を得たるものに非ず(寧ろ轉倒したるもの)となしたるは、是れ畢竟自然の道理の爲めに誤まられたる也。然り、繩子たる人の如く、囚捕せられ、且死に處せらるゝまで、何の用意もなく、第だ遽然として時の至るを俟ち、時至て而して後、卒然神經を刺衝せられ、勝利を獲たるの觀を裝ふは、彼に適はしきことに非ず。夫れアンラハムの先に在りし者は、又彼れの期に先つて準備する所あるべきは當然のことなりとす。嗚、彼れの友輩には解すべからざる安全の時に於て、四方閃として聲なき憂悶の冷冽に於て、心裡の怖るべき奮戦苦闘を試み、その一旦出來るや、宛然傍觀者的の沈靜を以て、最も懼るべき十字架の悲劇を踏みたるは、果して時を躍りたるものなる乎、

諸斯の悲劇は何故に爾く劇甚なりし乎、何故に此痛苦ありし乎。こゝに幾許か失眸めらざる乎、

幾許か眞箇偉人に價值せざるものあらざる乎。今假りに彼を以て純平たる人として見よ、仍ほ恐くは然るものあらん、否若し彼にして女性なりしとせんも、仍ほ然るものありといふを得べし。然りと雖も、此一事耳は明白也。即ち人間の中何人も「男性にせよ、或は女性にせよ」、未だ會て然く痛激に、苦楚を感ぜしたる者莫しと云ふこと是也。實に彼は心意の争闘劇痛の爲めに、滿身血汗を滲滴したり。余苟かに惟ふ、爰に或る秘義有て存すること昭々たりと。而して厥秘義や、吾人の容易に感得する能はざる所なりと雖も、是は幾許か神性的なるを疑ふべからず。而して吾人は問はんと欲す。超人的感動力とは如何なるものぞ。人軀は如何に斯の如き能力の下に顛倒する乎。將た醇良高潔なる無罪の靈か、方に其躬の上に前古未曾有の大罪を受んとするとき、果して如何なる感格を有すべき乎と。

然のみならず、茲に愛に依れる代贖の精神の存したるも、亦明なるべし。大凡愛あるものは、自ら甘んじて、代贖的に入の患難災禍に與るものなり。或る意味にては、他の罪を取て自ら負ふ者なりや果して然らば、耶穌若し神性を有し、世界に顯現したる神愛の具軀たらば、彼れ墮落したる人類が、方に罪惡史上最大の極惡を將はんとし、曾て世に顯はれたる唯一完全なる者を釘せんとし、又無限の神愛を傳ふるの使者とし、公使として彼等に來り、且つ自ら降て彼等に代れる救主を確せんとするを視たるとき、彼れの感覺は其れ果して奈何ありしか、彼は如何なる

徴候を以て、その言ふべからざる感情を發露せんとしたる乎。是等の問題を慎重に深思熟考する者は、渾て、己れは次第々々に、耶穌は單だ人なりとの假想より、遠かるに至るを發見せざんばならず。斯くて彼等は、己れが凝視しつゝあるものは、人間以上の痛楚なるを、愈々益々明瞭に職認すべく、且是はその因由する所、全く人界以上に在るを察知するを得べく、又斯痛苦や、顯明に怯懦退縮の感に非ずして、却つて至聖なる品性、否、神祕に超絶せる神性の感に原由する者なるを、確認するに至らんとす。

然れども彼は何故に法庭に於て自ら辯護し、己れの罪なきを主張せざりし乎、是れ一は彼が、斯の如き場合には、眞箇の審判なるものなく、又有り得べからず、此の如き一揆の論争するは、適々己れの徳性を傷くるに足る耳にして、到底無益の勞たるを認めたる、彼れの智慮に頼るなるべし、それ斯の如き場合に罪なきを主張するは、唯だ恐怖の念あるを吹聴するに過ぎずして、沈靜壯重なる眞偉人には、全く相應しからぬとなりとす。若夫れ他人は或は之を傲すとわらん、然れども是れ耶穌の決て傲さざる所也。加之ならず、熟々彼が容姿を察するに、確然彼が罪なきを證明するに足る者ある也。親よ、彼が唇頭より饒かに洩れ出たる、甚だ著しき教言は、夫の頑冥不靈なるピラトの心胸を震動せしむるに足り、如何なる正式的辯論よりは、勝りて銳利有力なる者ありしに非ずや。斯く吾人が此間に於る、耶穌の全動作を益々深く熟察するとき、

吾人は益々彼が言ひ出たる所の充分なるに満足し、倍々受難者の不可思議なる沈勇、智慧、確信、及人間以上の忍耐に、敬服せざらんと欲するも得ざる也。あゝ彼が死は、超越せる愛の死に於る光景なると、炳乎としてそれ昭なり。彼は人の如く逝かず、却て不可思議なる人間以上の者の如く逝けり。然り夫の鐵面如夜叉の兵卒さへも、聲高らかに喊叫して曰へり、「眞に斯人は神の子也。これ宛も——予は人の死するを賭たり、然れども是は人に非ず——と云ふもの如し。彼等にして猶且つ彼を神の子と呼べり、——是より以下に彼を見ると能はざりき。然らば吾人何を以て是より以下に彼を引下ぐるを得ん耶。

然れども、基督は、たゞ彼が生涯に於る個人的行跡に依て、その人間以上たる品性を顯はすのみならず、彼が籌畫せる設計と、事業と、彼れが自箇の教主たるを證明せる教訓とは、尙ほ優に之を顯彰し得て餘ある也。

先づ彼が設計の範圍を思考せよ、尙し彼れ單に人にして止まん乎、是は彼が凡そ人類中熱狂者の、尤も無法なる、尤も思慮なき者たるを示さざるを得ず。看よ彼は當代國民一般の宗教上の僻見に反對し、又ラ摩西の比較的狹隘にして、且排外的宗教、及び其下に於てせられたる彼が平生の教育に反對して、彼は絶大なる神の國、別言すれば、天國を地上に創建せんと計畫したり。彼れの目的は、人類の——實に猶太人、及び其宗教に改宗したる人衆のみならず、全人類

地上に神の國を建設せんとする彼の設計は超人的也

の——(道徳上改造に在る也。左れば彼れ尙ほ宣敎の初期に於て、夙く己に宣傳して曰く、衆人東より西より來て、アマラハム、イサク、ヤコブと偕に神の國に坐すべし。畑は斯世界なり。神はその生給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。彼は復たその福音は、萬國に宣傳せらるべきを望み、且使徒等を任じて、洽く世界を巡り、各人に福音を宣べよと命じたり。

惜今吾人は、彼が宣敎の大觀念を賭たり、——乃ち是は人類を改造して、之を神に回らしめ、以て心靈上一大王國を設立せんとするに在り。而してレインハルツ(獨逸人、千七百十年に生る)は、此單一なる事實の上に、彼が人間以上の人物たるの、充分なる論證を建立せんとて、正式的に、凡そ有らゆる大建國者、及び最も著名なる立法者、大英雄及愛國者、又總ての明君賢相、總ての哲學者、總ての宗教の開祖を歴觀して、斯の如き思想、或は之に近似せる思想の、未だ嘗て歴史上如何なる人物に憑ても、懷抱せられざりし事實を發見し、かくて又諸他の大人物は、縱し彼等は教育に由て其意見を弘濶にせられたるにせよ、其思想幾許か、自箇の民人及邦國の利益の中に局限し、隨て多少世界の他部を敬視するの迹莫きを免れざるを彰明したり。然れども獨り單だ一のガリライの工人に過ぎざる耶穌は非らず、彼れ恐くは、一生世界の全國を目賭したるとなかるべく、或は其中なる大邦國の名を、半ばも聞きたると無るべし。然れども一度その工場より出來るや、歴山王の大帝國よりは、尙かに廣大に、且數層困難なる經綸——何となれば其目的とする所一

層多に、加之ならず、一層深く徳化に倚頼するものなれば也——)を設計したり。あ、神の中に統合せられたる普通の王國なる新思想の前には、夫の幾世幾代の戦争及凱旋に依て築造せられたる、彼が當代の羅馬大帝國も、何ぞ見識に類するの甚しきや、——其廣袤に於ても、其價值に於ても、——然り而してカリヤヤの質朴なる工人は、しかも之を己れの使命として開示し、その之を爲すや、其經綸の裕大なるは、毫も思慮考究より出るに非るもの、如く、爾く單純靜謐なる確信を以てしたり。

豈唯是耳ならんや、彼れの經綸には、純乎たる人間には、彼れ在弱の身を以て、到底成就し得べきの理なしと、思はるゝものを含有したり。他なし、其經綸の目的の範圍が、遍く全地を蓋ふが如く、またその歲月の恒久に亘ると也とす。彼は生涯の間に之を實現せんとを望まず、否來らんとする數世紀に於てさへも必成を期せず、反つて彼は善く其性質を理解する者の如く、告げて曰く、我教は芥種シダの如し、首めは微小なりと雖も、一旦其の成長するや、方に鬱然として徧く全地を蔽はんとす。然り耶穌の勇氣は千年を以て單だ一日と數ふるの剛毅にして、克く彼が事業の進行に適せり、且彼は人のたゞ羸拙と脆弱との外、何物をも看る能はざる處に、鞏固なる岩を發見するの眼光を有したり。夫の性急にして殆んど倚頼し難き、彼得其人さへも、一度彼れの許に來れば、一變して岩となり、牢乎たる大磐石となれり。彼れ曰く、「我教會をこ

彼れの經綸に其歲月に於て悠久なり

の磐の上に建つべし、陰府の門は之に勝つべからず」と。彼れの希望は、また遅く彼が死後に起出し、死は却つて彼が大帝國の種子なるが如く思惟せられたり、——彼れの言に曰く、「一粒の麥、若し地に落ちて死なずば唯一にて止まん云々」と。吾人若し彼が死の漸く近けるに際し、彼は如何なる確信と勇氣とを以て、其經綸を固守したりしか——彼がいかに之を失敗、若くは壯年血氣の迷想として棄却せざりしか——を語らんとせば、吾人唯、彼とヘタニヤの一姉一妹(その懇篤なる待遇を彼が屢々樂める)との、最後の會見を觀察するを以て足れりとす。禪よ、かのニダが無用の糜費として悉りたる、價高き香膏の、彼が頭上に掛かるゝや、彼は此婦人の行爲に於て、今方に眼前に迫らんとする、彼が死と緊密の關係ある、葬儀即ち預言を發見したり、然れども分毫も、彼が之に依て其勇氣、若くは彼が經綸に關する確信を挫折したるを見ず、否其希望に一點の陰影だも翳りたるを見ざる也。「その爲す所に係はる勿れ、この婦は力を盡して作せり、蓋し豫め我を葬らんが爲め、我身に膏を灑したり、我賊に爾曹に告ん、天の下何處にても此福音の宣傳へらるゝ處には、此婦の行しゝとも、亦其記念の爲めに宣傳へらるべし」と是れ允に當時に於る彼が言なりとす。斯の如く、彼が生涯の間は、僅かに其果を示すに止り、反て死後永く無窮に繼續せんといはれ實にその經綸に於る、彼が高尙の確信なりし也。諸君斯の何人も未だ嘗て思想したると莫き大觀念——全人類を擧て神に歸らしめんと云ひ、

其經綸が此の如き同一の勇氣を以て保障せらるゝと云ひ、將た世界將來の進運の確信に於て、爾く絶倫なると云ひ、一々驚異すべき大觀念——は、果して人間自然の開發なる乎。試に神と人類との關係を調訂するの事實として、其仁慈なる所其普遍的なる所、及び其肅然壯然たる所を觀よ、(——その性質の價值と、その歳ふ所の歲月の悠久なると、その成就せんとする時日の遼遠なるとを併せて——)、是れがナザレの工人、無教育の一寒賤人の、設計し、工夫し、着手したる所の者なる乎。古來世に大熱狂者出現したると鮮なからず、然れども其誇大なるに準じて、概ね其狂妄的氣風の爲めに、竟に馬脚を露はさるは無し。故に吾人は確然主張するを得、耶穌の企圖したる如き、總て人力に超越し、數千年を経過するも、未だ完成せず、而も正々肅々として其歩を進め、渾ての人類を征服して、其偉業を全ふせんとする如き、大經綸を按出するは是れ人間の業に非ずと。蓋し人類は唯世界の終局、即ち最後の收穫に於て耳執行せらるべき、爾く長久の經綸に、晏然として耐へ得るものに非ず、是れ人間の事に非ず、神の事也。

彼は貧民
を伍を爲
し先づ彼
等を集め
たり

吾人は今尙ほ一步を進めて、彼れが品性の發現とも稱すべき、彼が宣教の一層内部を觀察するに方り、吾人は他の特殊の點を發見して、更に一驚を喫せんとす。則ち彼が貧民と伍を爲し、初めより其宏業の根底として、社會の下級卑賤の民人に、矚目したるとなりとす。夫れ彼は自

らも貧民の中に生れたる、一介の貧民也、然りと雖も、彼れの風姿と、嗜趣と、智力とは、脱然としてその境遇の上に卓越し、若し彼れ純乎たる一人士にして止まんか、彼は己れの生存せる社會を甚だしく厭惡して、殆んど耐へざりしならんと、思惟せらるゝ程なりしなり。吾人の認る如く、大人物は彼れに聞かんとして群集し來れり、加之ならず、時としては夜窮かに彼が教訓を受んとして來る者あるに至れり彼は、若し志望せば、直ちに社會の最高層に進入し、充分に勢力を振ひ得るを歸れり、而して若し彼にして單だ一人の人士たるに外ならざらしめば、彼は不平の念に滿ち、出來得る限りの好地位を獲んとし、之を以て己れが勉勵と材能とに當然の報酬なりと思料せる、(——、姑く夫の突然昂起せる人々の、普通に洩露し易き、その門地の卑賤なると、その伴侶の陋劣なるとを曰ふを休めよ——) 一個有爲の好青年たるに過ぎざらんとす。然れども彼は決して斯くの如くならざるなり、彼は仍ほ貧者を友とし、彼等を宣教の主眼としたり。然のみならず、彼は明かに、彼等の中には、高等社會に缺如せる、一種の美德あるを看取し、彼等には他の者の未だ有せざる好性質あるを洞察したり。惟ふに彼等は智者達者にわらず、學問地位の慢心あるにわらずたゞ一個の寒素朴實なる赤子たるが故に、他の者に先づて、新思想、新教義を享受するに適當の者たり。是故に彼は貧者を愛し、而も毫も彼等の狀況に卑化せらるゝとなく、彼等の伴侶たるを喜ぶしたり、且夫れ彼が愛を以て彼等に事ふるに

勉なる、他人の貴富人に諛事するに於るも、遠く及ばざる所也、彼は徒歩して四方を周遊し、彼等を教訓し、或は彼等の疾苦を救へり。斯くて高尙寛大なる彼れの心思は、全生涯を通じて、絶へず層々たる勞働と掛慮——(恐くは如何なる病院の看護婦も到底及ばざる)——とを以て支配せられたり。——癡狂者、瞽者、熱病者、血漏者、癩者、及癩瘋者は、實に彼れの注意の下に在りし也。而して彼れの患者は、皆彼れの水平以下に在りて、彼に酬ふる能はず、否唯一息の同情をさへも、彼に表する能はざりし也。誠には勞作に伴ふの快活るな意購の外、何物も彼を支ふる者莫かりし也。

今日らく眼睛を轉じて、當時貧民を輕侮するの氣風、いかに世の大政治家、及慈善家の間に、磅礴したるかを思へ。貧民は社會にあらざりしなり、或は社會の一部に算入せられざりし也。彼等は只社會の便利なる隸僕、國家及富豪の附屬物、又貧名家の器具、否らざれば戰爭に使用せらるゝ物料に過ぎざりし也。古來社會を改革矯正せんとの抱負を有したる者、或は理想的邦國(若くは共和國)を建設せんとの觀念を爲したる哲學者にして、貧民より着手せんと思考したる者、未だ一人もあらざる也。彼等は勢力なる者は、第だ高等社會にのみ存するもの、如く思惟し、如何なる社會改良策にせよ、之をして世に徹底せしめんとの唯一の希望は、先づ彼等を以て羈り、且彼等に賴て其功を奏せんとするに在りしなり。然れども基督は全く之に反し、彼

は古今唯一の貧民の哲學者なりし也。(若し彼れ純乎たる人にして、吾人彼を目するに哲學者を以てするを得ば。而して吾人は之よりも善美なる名稱を彼れに與ふるの道を知らざる也)。彼等高等社會の門戸、開けてその前に在るを觀、且彼れ一度その教説の爲めに、大家有力者の間に地歩を占むるを得ば幾層容易に成功を獲るならんとの想像に誘惑せられたるに拘はらず、彼は決して如此思想を把持せざりし也。彼は事實の之を證する如く、渾ての勢力の下層に其基礎を奠き、人の見る所に依れば、彼は彼自身を社會以外に投棄したり。夫れ然り、然りと雖も、彼が全然その時代に先つて榮光ある智慧と、品性とを顯彰したるは、實に此處に在る也矣。觀よ、千八百年は倏忽の間に飛去れり、而して吾人は今に至りて、漸く彼れが宣教及品性の斯方面に於る、卓絶せる深義を領會し索めたるが如し、吾人は千古の宿夢首りて醒り、爰に新に衆民を祝福し、揚起するは、社會眞平の利益たるを發見したるが若し、——而して測らざりき、是れ惟耶穌の精神が、竟に社會、及國民の歴史に、浸潤し始めたるの一特徴に過ぎざらんとは、夫れ現代幾多の鉅大なる變革を作興せんとし、許多の奴隸同様なる貧民の爲めに、自由と權利とを予へんとし、彼等の教育を興起せんとし、嶄新にして更に勝れる冀望を以て、彼等の事業を振作せんとし、又彼等が悲惨と痛苦との大源たる、戰爭を廢絶せんとし、而して吾人が期望する如く、世界に喜樂と、光明と、善徳の充滿せる新时期を開創せんとして、運動しつつある

彼は斯く
或階級の
首領とな
れりと言
も決して
黨派的感
情を起さ
しめざり

者は、則ち斯の耶穌の精神也とす、是れ宛も或る一層高尚なる、一層良善なる思想が、新に吾人々類に入來りたるが如し。——而してこの一層高尚なる思想は、耶穌の精神なりとす、夫れ總ての哲學派は既に逝けり、數百年以前に逝けり、而して彼等の幻象は、業已に稀薄なる空氣中に消滅し畢れり。然れども獨り斯實民の哲學者のみは、彼れの貧民を、自由と、光明と、美德とに昂起しつゝ、又諸國民を一層煌耀せる一層善美なる時期に引導しつゝ、今尙ほ生々陸々として吾人の間に活く。嗚呼又何ぞ偉なる哉。

且夫れ、耶穌の人間以上の性を有するは、又、彼は斯く貧民と伍を爲すと雖も、彼れ仍ほ毫も彼等に徒黨するの感と、彼等に惹起せしむるとなくして、之を傲し得たるの事實に於て現はれたり。蓋し甚しく人情を考察したる者は、何物も、之より困難なると無るべきと了解するならん、乃ち彼等に非常なる仇怨の情を萌發せしむると無くして、蹂躪せられ、且つ輕侮せられたる僻蠻の、眷顧者となる程、至難なると莫きを曉知するならん。而て是れ一は、如何なる眷顧者も、——假令公正に且密達なる者と雖も——、彼れ自身の中に、全く黨派心を抑制する能はざるに基因す、それ只僅かの妄想に刺激せられたる渺少の功名心、或は彼れが慈善てう表面上に浮揚せる微末の名譽心、若くは隱微の間に發露せる分毫汚穢の念、——是等のものは、實彼が黨類の感情は、一の導火線にして其一以て彼れが部下に或惡感と點火せしむるに足る。

然のみならず、人は元來黨派を好むものなりポリッパ、アポロ、ベテラの實、尙且互に相對立して、誇耀せる黨派を有したり。彼等の全力を以てしても、仍ほ爾く陋劣なる弱點を一掃するに能はざりき。然りと雖も斯の如き感情は、基督の下には、未だ曾て瞬時もその立脚の地を得る能はざりし也。彼れの門徒等が、その彼等と偕に隨伴せざるの故を以て、或者の耶穌の名に依りて、病を癒すを禁じたるや、彼は靜かに彼等を諷め、彼等をして、彼は斯くの如き迷妄を容るる能はざるの、弘量と有するを囁らしめたり。且夫れ彼は貧民及總て抑壓せられたる者の友として、自ら前んで敢て當り、抗すべからざるの嚴責を以て彼等を懲戒したり。又彼等が教義の悖理なるを摘發し、或は議論に於て彼等を沈黙せしめたり。又た彼等の賤劣なる偽善に對して、電火的勢力を以て彼が美徳を發揮したり。然れども吾人は民人の徒らに放言壯語以て快としたるを聞かず、また彼れが指導の下に、苟くも怒情を洩すを以て、一時の憤を買ふたる者あるを見ず。是れ必竟、仍ほ耶穌の風姿容態の中に、幾許か彼等をして之が不適當なるを感せしめたるに、否之を爲す能はざらしめたるに因らざるはならず。念ふに是れ宛も、爰に一偉人——其人や高大測り難く、之を稱賛するは却て不敬に亘るに似、况んや附和雷同、喧嘩呼喚して、之を贊同するに於ては、倍々然るが如き偉人物ありて、彼等を扶助したるが如くならん乎。又彼等は悉くは天上より天使の來り接くるを喜び、彼等の首領として彼れの下に群集したるの感を爲

したるならん乎。若し夫れ曾て彼が奇跡を以て大衆を食ひたる時、彼は彼等の迷信非常に激昂し、彼を聖書に預言せられたる「メッサシア」(教主)なりと思惟し、強て彼を擁立して、王となさんとするを見たるを云はん乎。是れ國民全株の感情にして、或一黨派の感情に非るなり。その由來する所は迷信にして、憎悪仇怨に非る也。將又彼れが大衆の嚮呼に依て迎送せられ、堂々乎としてエルサレムに上るの事實や、現代批評家の棄却する如く、無稽の荒唐の一に非ずとすも、是れ決して黨派的惡感の證據にあらず。試に彼等一統の信仰たる「メッサシア」の即位てふ、神秘奧妙なる意義を除き去れ、是は何の意味もなきに至らんとす。然れば其後數刻にして「キツナ」(讚美の聲)の喝聲一度歇息するや、耶穌は獨り遺され、且棄てられ、剩さへ彼の行列に加はりたるその群衆すら、絶叫して「十字架に釘せよ」と曰ひり。約言すれば、耶穌は恒に人心を得たりとは、決して曰ふ能はず。四方の人民は時としては、彼に群從せり、然れども是れ惟好奇心に駆られて、彼に吸引せられたる耳。彼等は病を癒されんが爲めに彼れに來れり、彼等はたゞ朋友として彼を知れり、然れども彼には自ら壯重深嚴なる所ありて、彼等の陋劣汚穢なる感情をして、彼の周圍に炎威を逞ふる能はざらしめたり。あゝ實に彼は、宛も神が眞界の頂上に卓立し給ふが如く、歴史の上に巍然として高く聳立し、曾て黨派を作りたることなく、又人衆の品性に退化するともなくして、衆民と己れを等ぶしたる偉人物の、唯一の例を示しつ

彼の教説は全然創發的にして且獨立也

つある也。

次に彼が説述したる教義は姑く置き(是れ後章別に余が論ぜんとする所也)、教師として彼れの方法、操態、及び諸他の特殊の優點を考察せしめよ。

而して吾人の第一に注意すべきは、彼れの教説の全然獨創的なるとなりとす。夫れ教育せられたる思想界の、或界限中に於て、創發の見を啓きたる者あるは、吾人の屢々耳にする所なり。然れども基督の創發的なるは教育せられたるに非ず。彼が學問の倉庫より、何物をも藉來らざりしは、蓋し何人も一見して認め得る所也。吾人は今日、彼が教訓を熟讀諷味するに方り、當時之を聞く者の、「斯人未だ學ばず云々」と曰ひ出たるの、寔に至當なるを感覺せんばあらず。彼れの引例及び發言の様態には、分毫も學問の徴すべきなく、又彼れの時代、或は邦國に屬する者(——斯の如き教説、或は趣旨、或は迷信——)ある莫し。視よ、彼が純乎たる自然の人に過ぎざるを確定せんとて、彼は其思想を波耳亞人、及東洋の宗教より藉來りたるか、否らざれば、彼は「エズセニ」派を熟知し、之より藉來りたるか、將た否らざれば、彼は埃及の學派及宗教に通曉し、之より其教義を抽出したる者なるを發露せんとしたる百般の計畫は、皆悉く失敗して、毫も論駁を要せざるに非ずや。若し彼にして、吾人の聞くが如く、純乎たる人ならん乎、然らば彼は、吾人が未だ曾て見聞したるとなき、宛も人に非るが如き、奇跡的なる、唯一

の新人と曰はざるを得ず。それ吾人は容易に、彼れが教説の直截なると、自由なるとに於て、彼れの發言する所のものは、愈々彼自身より出たるを承認するを得る也。例へば夫のシェイクスピアは、古今無雙の獨發創見に富る、所謂自修家なりと稱揚せらるると雖も、實は彼れが一切の著作は、概ね人間の學文を以て着色せられざるは無し。彼が榮光は、大抵彼が時代の榮光の反映なりと云とは、髣髴として今尙は彼が戯曲の上に表顯する所なり。吾人は時として、彼は人情の祭司長なりと人の評するを聞く、然れども彼よりは一層深く人情の精微を理會し、一層工妙に之を解示せる基督は、決して之を時世の寶庫中より得來らざりしなり。彼は寧ろ神より出來り、地より何物をも藉らざるもの、如く語り出でたる、神性の祭司の長なりと曰ふべし。吾人は如何に彼を發查するも、彼が棲住したるその人類社會が、彼に何物をも頌興したるの徵候を發見する能はざる也。それ彼れの教説は、宛もシェイクスピアの人情に於るが如く、神性の事物を以て充盈せり。

彼は人間
的即ち哲
學的方法
を以て教
へざりき

彼は又人間普通の方法に依て、教説せざるなり。彼は學者の如く、神に就て思考し、繁雜なる論理に倚て結論を抽出し、斯くて其教説を論證するとせざる也。彼は世の哲學者輩の愛好せる、斯種の組織的行歩に憑て、論臺を造立せんとせず、彼はたゞ神より來り、彼れの熟知せる所のものを語るもの、如く、神及び靈界に關する一切の事物を説述する也。而して彼れの平

易率直に之を語り出るや、之は直ちに吾人の肺腑に入りて、心中の事實となり、其高尚なる自證を以て吾人を承服せしめ、且つ吾人が胸中の意識を喚醒警醒せしむ。而して正式的論證或は辯論的證據は、其推歩の冷々淡々たる、吾人をして却て光明に接近するの障礙物に非るかと思はしむるものあり、實に彼は單にその言語を以て、世界を光明ならしめたり。——神の嶄新にして且つ密通せる感覺を以て、之を滿したり、而して爾來何物も之を消滅せしむること能はざる也。それ上界の香氣は、彼れの衣裳に纏ふて持來されたり、而して腐敗したる大氣の中に薫香の如く冷く世界に溢れ出たり。

彼は決して
群衆の
同意を得
んとして説
を枉げざ
りき

然のみならず、彼は曾て世の教師輩の、通例免れざる弱點を現さざりしなり、即ち人衆の同意を獲んが爲めに、毫も己れの意見を枉屈したるとなく、又教義を變易したると莫きなり。彼れは決して衆望、否彼れの友朋の希望にさへも、合従するとせざりし也。視よ、彼等が、彼が大預言者ならんを期望したるとき、彼は何事をも預言者の如く行はざりき。彼等が、彼れの國に於て榮位を請求したる時、彼は却て其驕愚を呵責し、彼と偕に貧窶嘲笑を受るの外、何物も興ふべき者なきを告げ。彼等が、彼が一度劍を掲げて國民の大救主となり、天下に號令せんとを期望したる時、彼は戰士に非ず、又王者にも非ず、反つて第だ喪はれたる人々に遣はされたる愛の使者たるを告げ、又人に事へ且死せんが爲めに來りたるにて、國を建て或は回復せん

が爲めに來りたるに非るを告白したり。斯の如く彼を歓迎せんとて起り立つ總ての冀望は、愈
 な一々棄却せられたり。然れども奇なる哉、彼れの様態は、人衆をして尙ほ彼れに緊着して、
 彼れを去る能はざらしむる程、爾く偉大なる勢力ありし也。彼は密雲驟驟たる暗黒中に掩蔽せ
 られたり、而も彼等は仍ほ彼に信委し、彼れの後に従ひ、彼れの言に倚頼すると宛然或る不可
 思議力に虜にせられ、離らんと欲して離る能はざるもの、如し、あ、彼れの如く一々隨從者の
 希望を打毀し、而も彼の如く牢固に隨從せられたる者、天下果して安くに在る。

耶穌の教説に於る諸部の平稱は、又彼が人間通弊の上に超然たるを顯彰す。それ人間の教説は、
 概ね普通一般と思惟せらるる程、一定の法則の下に形成せらるるもの也。蓋し首めに二個の極
 端説は、二個の反對の首唱者、若くは學派に由て唱道せられ、而して後第三派は其中間に入り、
 彼等兩論者の討索しつゝ、ある眞理を發見せんとし、彼等の能力足らずして生出したる偏見説を
 一掃して、終に眞理の存する中庸説を樹つるを常とす。斯くて古來尤も弘濶なる意見を把持し
 たる者と雖も、未だ曾て都ての主旨に於て、平衡を得たる者あるを聞かず。左ればにや、現代
 尤も熱達せる學者と雖も、猶且絶へず或極端に陥り、其平稱を失ひ、將に顯はれんとする後代
 の學者に依て修正訂補せられんとしつゝ、あるを免れざる也。

然りと雖も、基督は曾て學派及黨派を樹てず、又何れの極端にも走りたるを無し、——如何な

彼れの教
 説は湖大
 にして何
 れにも偏
 せざりき

る論理も彼を或一方に偏せしむると能はざりき。而して是れ彼が諸他の教師より超絶せる一
 の較著なる事實なりとす。蓋し彼は何事も論歩に由て推論するを要せず、萬事は彼れが超人的
 睿智の前には、直覺的に明晰なるが故に、彼は決して人の如く中心以外に突飛したると莫し。
 然耳ならず、彼は吾人の如く、明白なる兩極端を平均せんと試むるとなく、宛も彼は曾て偏見
 てふものを想像する能はざるもの、如く然り。彼は決して急進家に非ず、又決して固陋家に非
 ず、彼は弟子等の、王侯方伯の前に己れを拒否するを許さると同時に、又「シイザル」(羅馬
 皇帝)に忠節を欠くと勿らしめたり。彼は「パリサイ」人等の、摩西の位に座して抑壓を逞ふする
 を酷責すると俱に、黨派的抗争を啓くとなからん爲に、「彼等が爾曹に言ふ所は之を行へ」と云
 へり。且つ彼は總ての點に於て改革者なりき、——彼れの主義に従へば、教會も、國家も、將
 た社交的狀態も、一として正當なるものあるなし。然れども彼は決して、世を警敵視せざりし
 也。若夫れ人己れが勢力に驅られて、單だ或る一改革事業にすら従事したるときは果して如何、
 彼が抗敵に對して懷抱せる熱火は、いかに熾盛に、いかに暴烈に、いかに慘劇なるぞや。且つ
 其事業の進歩緩慢なるや、其心情は如何に酸酷に、如何に執拗に其極終に見るべからざる醜狀
 を呈するに抵るぞや、——是れ吾人の親しく識る所なり、然るに基督は躬に全世界の萬事業を
 改革するの大任を負ひ乍ら、尙ほ平靜沈着にして、秋毫も酸苦燥急の容姿莫きこと、宛も衆心

既に己れに歸し、大業已に成れるが如く然るものあり。ア、彼れが感情の恒に全く平衡を得、之に依て萬事直覺的に指導せらるゝこと、到底人智の企及し得べき所にあらず。

彼は迷信時代に在りしと雖も、迷に感染せざりき

余は今此の特殊なる優所を、彼れが實際のまゝに充分に寫出すの餘裕あるなし、而して竊かに信ず、其一斑を覗ふは、以て全般を察するに足るものあるを。されば今吾人をして其一例として、彼れが一切の迷信、及び寛容として人の稱美する所の者に、感染せざりしことを觀察せしめよ。夫れ彼れは迷信時代に於て、迷信の人民中に生活したり、且つ彼れは教育に乏しき者なりしなり、而して吾人の識る如く、教育なき人心程、迷信の固着し易き者ある無し。例へばロルド・ペーコンは、實に至高の教育を受けたる者なりと雖も、尙ほ彼れは、彼れに取ては餘り見識に類する如き迷信に感染し、而も彼れが一切の哲學思想に拘はらず、死に至るまで之を固守したり、然れども基督は、毫も教育なきの資を以て、彼れは宛も幼より、ホニーム或はストラウスの門に在りしかの如く、毫も彼れが當代の迷信に沈溺せずして、ガリヤヤより出來り、告て曰く、「爾曹迷信の徒よ、爾曹は、ピラトが其血を供物に雜へしガリヤヤ人及びシロアムの塔倒れて壓死せられたる十八人は、斯の如き災禍を受くべき非運に定められたりと思惟せり、然れども我爾曹に告ん、然らず、爾曹悔改めずば皆同く亡ぼさるべし」と。又他の一團に對て曰く、「爾曹パリサイ的法式家よ、爾曹は摩西の命定したる安息日の本義を知らず、徒らに之を死守す、我爾曹に

告ん、安息日は人の爲めに作られたる者にして、人は安息日の爲めに作られたる者に非ず、是故に爾曹が此日に於て善を爲すは宜しからずと教ふるは、神を罔するの太甚しき者なり。爾曹は洗手の禮を以て大事となし、爾曹は慎みて野菜の十分の一を取納て之を献ぐ、然れども義と、信と、仁とは、寧ろ之より勝りて大事ならずや」と。斯く人間中至大至高の一人にして、かの偶像に心醉せる郷人の、未だ曾て夢想せざる、神の秘義に通曉したる、ソクラテスすらも、「エスキュラピアス」神に、鶏を奉供するを免れちりしとき教育なき耶穌は、毛頭彼れが時代の迷信に搖かさることなくして生死し、之が當代に信ぜらるゝの故を以て信せず、之が風俗習慣に由て神聖にせられたるの故を以て崇敬せざりし也。且つ彼れが生涯の終に方てや、吾人はかの學者教法師等さへも、躬汚れて節(趨越節)に伴する能はざるを恐れて、カヤバの法廳に入るを欲せざるに、(彼等は殺人の惡意に關しては、毫も脚躡する所なかりしに拘はらず)、彼れ之に反して、彼等の迷墜を憫み、十字架上に於て、彼等の爲めに祈禱して、——「父よ彼等を赦し給へ、彼等は其爲す所を知らざれば也」といはれたるを見る。

夫れ然り、然りと雖も、基督は決して寛容家には非りき、彼れか郷黨の間に、寛容をもつて聞へたるものに非りき、蓋し一の誤謬を發見して、他の極端に突飛するは、彼れの弱點にあらざれば也。彼れの立脚地は愛にして、寛容にあらず。抑々此二者の實際的意義に於て、大運庭の

彼は寛容家には非りき然れども完全の愛を顯

るは、實に渾て真理に忠實なると、之に弛緩なるとに在りとす。夫れ愛は真理の極微なる者に至るまで、神聖高貴なるものにして、之を尊敬し。弛緩疎懶の如きは、劈頭より之を棄却するもの。寛容は之に反し、真理を忽略にし、容易く之を變改し、且之より差行するを許し、或は自家の隨意に由て、之を看過し若くは背犯するを容し、斯くて次第に凡ての真理に無頓着となり、責務に怠慢なるに至るもの也。且愛は人を恕するものにして、寛容は欺妄其物を恕するものは、愛は真理を神聖にして且動かすべからずとなす者にして、寛容は恣まゝに之を塗抹し、或は輒晦に附するを意とせざる者也。其れ之を以て、夫の不虔屈弱、偽と眞とを同一視し、以て自ら高しとし、且つ自ら善しとせる寛容家に比す、耶穌の様態はそれ如何に大差別あるぞや。視よ、彼は聖愛を以て誠めて言へり、曰く「人の罪を定むること勿れ、恐くは爾曹も亦罪に定められん」と。而れども又同一の聖意を以て曰へり、「凡そ誠の至微なる一を境り、又其如く人に教ふる者は、神の國に於て最微の者たるべし」と。斯の如く彼れ時として、「凡そ我と信ならざる者は、我に敵するなり」と曰ふと同時に、又「我に敵せざる者は、我に與みする者なり」と曰ひき。また他の時に於ては、「爾曹薄荷、茴香、馬芹の十分の一と捧ぐ」と云ひ、次でまた、「然り是れ行ふべき者なり、然れども彼れも(義と、信と、仁)亦廢すべからざる者なり」と云ひ。尙ほ復「爾曹の中罪無き者先づ石にて彼を擲つべし」といふと俱に、又「行て再び罪を犯

彼れの教
説は單純
にして曉
り易し

す勿れ」と警めたり。耶穌の百事に於て平衡を得ると、概ね如斯其れ崇宏に且神妙なり。何物も真理の存する中心より、彼を極端に走らしめたる者なく、將た錯誤を正ふし、迷妄を排斥し、實行を矯正すべき、一の僻見、一の障礙、一の勞苦の存したるを見ず。若し是が人間ならば、余は未だ人間の何たるを識らざる也。

且又耶穌の著しく人間に超越せる所のものは、彼は善く哲學の演繹的結論に超越せる教義を呈出し、人の全力を注で、尙ほ漸く其一斑を覗ふを得るに過ぎざる深遠の奧義を啓發すると共に、彼は之を單純なる状態を以て開示し、且つ如何なる人々にも、理會し易からしむるに在り。而して是れ一に、彼が直ちに人の本心に訴へて、未だ學ばざる者の理解する能はざる如き、紛糾錯雜なる理論に倚頼せざるに因るそれ古來如何なる大學者と雖も、未だ曾て常人の理會し得る如く道德問題を解釋したる者莫し。是は大抵善と云ひ、或は至當なる事と云ひ、或は斯の如き性質の或物と曰ふが如き、常識より遠く、且つ宛然金石學と俾しく、活力に乏しき者として教示せられたり。左れば如此者は、縦し世に予へられたりとせんも、是れ「パン」に非ずして、却て石を予へられたりと曰はざる可からず。然れども耶穌は人衆の常識に適應する如くに、彼等が永生を嗣んには、缺如せる所のもの行はざるべからざる所のもの及び有せざるべからざる所のものを、直截簡明に彼等に語り、而して彼等胸奥の本心は昭かに彼れの言に應へて是と云へり。

加之ならず、彼れの教義は單に教義に非ずして、寧ろ一の傳記たり、有心的勢力たり、活力に充る真理たり、且吾人々類に密通して、地上に行歩せる活る愛たる也。彼れの語り出るや、彼れ只心裡に鬱勃たる活感情を拵へ來て、徑ちに萬人の心中に鼓吹したる也。是故に彼が教義を講らんとする者は、彼れたゞ一片真理を講らんと欲するの赤心あれば乃ち足る。

然らば曰はんと欲する者をして、彼を人、また人なる教師と曰はしめよ、然れども人なる教師が何時斯の如く、宛も天の一方より杲然として降り來り、陰々憺々たる暗黒を變じて照々快々たる白晝と化せしめ、以て萬生類を活かし、且萬造物を光被せる旭光の如く、人類の心靈上に照臨し來りたる者ある乎。夫れ凡そ學者は真理に就て思考し且論談したり、而して誰か之に従ふを得んや、然れども耶穌は躬自ら一箇の真理にして、彼は之に血と肉とを與へたり。而して若し彼にして純平たる人なる教師ならん乎、彼は實用的に真理を顯章したる、先登第一の人なりと云はざる可らず。然り而して彼が教示したる所の真理は、世の總ての哲學者の開示したる、總ての教義に超越したり、而して彼は其單純なるに於てよりは、其教義の高遠闊大なる所に於て、數百倍彼等に卓越したり。

嗚呼是れ果して人爲なる乎、將た神工なる乎。卿等若し人爲の何たると、人智の幾許なるを知んと欲せば、宜しく夫の基督教初代の豪敵たる、鋭敏にして且老實なるセルサス(紀元第二世)が、

其駁撃の要點として指摘したる所の者を一瞥せよ。彼れの言に曰く、「斯教に熱心歸依する者は概ね毛布製造者、造靴師、及柔皮工等、凡そ教育なきの野人、學者の面前には、片言隻句も口を開く能はざる輩のみ、彼等はたゞ婦女少童をして歸依せしめんとす」と。彼等は復た宗教は哲學の如く、學者の爲めに耳存立する者の如く思惟したりと見へ、別狀の下に同一の意義を據べて曰く、「余は歐、亞、弗等に廣く散在せる開明人、及未開人——否、地の四極に至る萬國民までも——を網羅して、同一宗義に一統し得べきを信する者あるを見て、怪訝に堪へず」と。プラトールも亦言を作して曰く、「夫れ萬物の父たり、造物主たる神を發見するは、これ容易の業に非ず、而して縦し發見し得べしとせるも、之を衆民に認識せしむるは、到底望むべからざるの事也」と。然れども基督教家デヤクソン、マーターは謂へらく、「咄、是れ眞乎に我主基督が、其力に依て成功したる所也」と、而してターチュリアンも亦、福音の單純なる（吾人が已に其優越せる美點を描出したるが如く）を誇て曰く、「それ基督教徒は、彼夫工人の徹に至るまで、愈な伸しく神を識認したり、而して大プラトールは、世界の造物主を以て、容易に發見すべからずとし、縦し發見し得べしとせんも、之を衆民に識らしむるは到底望み難しと爲したるに拘はらず、彼等は神を卿等に指示し、且都て卿等が神に就て講らんと欲する所のものを顯彰せん」と。左れば吾人は茲にセルサス對基督、及びプラトール對基督なる比較を看るを得る也。而

して斯二人は偕に倅しく、神は唯大學者耳漸く論究し得べきを主張したるに、獨り基督は尤も
 微賤なる民氓すらも指示するを得、且萬人同一の信仰を以て、均しく領會し得る神を現示した
 るを覩る。嗚呼是れ果して人爲なる乎。

彼の道
 徳は造
 作的に非
 す

而して又耶穌の道徳は、是が人爲的若くは理論的工作に憑らざして、自ら證印を佩たる命令と
 して顯示せられ、且是が神に依て制定せられたる靈の大法(宗教の權威を以て)たるの事實に於
 て、遙かに人たる教師の上に卓然たる者ありとす。彼は最上の善は果して何なるやを定めんが
 が爲めに、冗長なる議論を試むることをせず、又之に合致せんが爲めに、倫理説を組織する
 爲らず、將た道徳の根柢は果して何なりやといふが如き難問を解釋して、其上に組織を建てん
 どもなさいりき、又彼はフラー^{Flour}或はソクラテスが、行爲の奈何なる種類が美行たるかを究問
 したるが如くに、道徳の原理をして、不學者に取て困難なること、恰も彫刻術の如く然らしむ
 る的、難解の教説は、一も作さいりし也。然れども基督は其賦命の美に於て彼等に優越せると
 宛も未だ曾て其美ならんを思考したるとのなきもの、如し。彼は單に神より出來り、毫も批辯
 論を費すと莫く、吾人の爲すべき所のものを、吾人に告諭したり。然るに批評的、辯論的諸哲
 學者の建設したる所のものは、未だ確立せず、又須臾も人類の贊同を博する能はざるに、基督
 の道徳教は、己に人の信念中に確立したると其軀軀中に於る引力の法則の如く然るものあり、

是れ果して何の徴ぞや。

蓋し彼は神の物界に於るが如く道徳上の美に満ちて世に來れり。夫れ神が始めて世界を丈量し、
 形成するに方て、曾て美學を習熟するを要せざりし如く、基督は人心を統治せんが爲めに世に
 來るに方り、曾て批評辯論の習練を要せざりし也。彼れ一度唇を啓くや、彼れが心中の創造的
 榮光は、自ら活る賦命となりて、滾々として湧出せり、曰く——凡ての人に爲られんと欲する
 者は、爾また人にも其如くせよ、——和平を求むる者は福なり、——人爾の頬を打ば、亦他の頬
 をも轉じて之に向けよ、——悪人に敵する勿れ、——爾の敵を救せ、——爾を憎む者にも善を行
 へ、——何とも望まずして貸與へよ、——幼孩の如く眞理を容納せよと。試に是等の中より、彼
 が宣傳せる深奥なる靈性的教義を排去して、代ふるに人なる教師の据置たる道徳的基礎を以て
 せよ、是等の者は、尙な倅ち賤劣冷硬なる者と化し了らんとす。其れかの辛苦勉勵の後、漸く
 にして創始せる高見卓説は、之を基督の道徳教に比する、宛も塑像の、造物主の映像となりて
 發出し、彼れ之美と靈活なる意志の反影たる、柔軟にして自動力ある、温かなる人跡に於るが
 如き乎。實に耶穌の教示したる所は、單に口授的に非ずして、創發的、活動的、神性的道徳た
 ると、是れ耶穌が特殊の優所也とす。彼は道徳的紛裝を修飾して、其美に倣へと曰はず、たゞ
 躬を以て如何に生活すべきかを教へたる而已。而して古來世に於る、尤も壯嚴優美なる品性は、

毫も自ら美てうと思慮すると無くして、彼れの誠命を嘉容し、循々として之を實行したる者也とす。

彼は決して其成功を憂慮せざりしなり

教師として尙一つ基督の超越せる所は、彼は決して其教義の成功すべきや否やに就て憂慮したるとなきに在りとす。彼は、世は己れに逆抗し、己れを詬諆し、輕侮し、憎惡し、己れは孤立して、一の勢力ある黨與なきを熟知せり。然れども人雖も、彼がその教義の最後の成功に關して、微毫も憂慮を露はしたるを發見する能はず、彼は決して其教義の世に容れられざるを意とせず、彼れの朋友が驚鈍にして彼が言ふ所を曉る能はざる時、否彼を棄てたる時も、彼は決して其心を攪亂せざりし也。彼は自ら言ふ所の上に確立すると、宛も彼は高く天涯の上に泰然安座したるが如く爾り。夫れ凡そ大人の眞理を確信するや、概ね如斯効果を生ずるは、吾人の常に承認する所也。然れども此の如き十全なる効果を奏したる者、果して安くに在る。試に思へ、古來人なる如何なる教師、如何なる大哲學者が、其學派に關して、幾分の弱點を示す處の憂慮の痕跡を露はさざりしや。將た幾許か彼れが朋友に誇り、彼れが仇敵を嫌惡し、或は其教説の論駁せられ、或は抗拒せられたるとき、衷心挫折の形迹を示さざりしや。然れども爰に一人あり、其人や孤獨なる、謙卑なる、且教育なきの人也。又未だ曾て精神安靜の秘術を究めたるに非ず、威儀容態を修むるを鍛鍊したるに非ず、而も世擧りて彼に抗敵するを見るも自若として

彼は益々熱知せらるゝに隨て益々其優大の感に深ふせしめたり

彼が教義の上に確立すること、宛も地球の千載其樞軸の上に固定するに異る無し。且夫彼れがピラトに眞理は如何なるものぞと問るゝや、第一一言答へて、「凡て眞理に屬する者は我聲を聞く」と曰はれたる而已。是れ果して人なる乎。若し是が人ならば、余は確信す、人類中如斯偉例を以て、人間を崇めたる者、他に曾て一人も有るなきを。

夫れ教師としての基督は、實に斯の如き者也。此の如き一現象の世に現出するや、別言すれば、如此孤獨なる教育なき少年が、カリヤの道德闇黒の中より出來るや、彼れの時代及び境遇と懸絶せると、かの大プラト^{（北米未開の地）}が、獨りオレゴン^{（北米未開の地）}の蠻野中に突起するよりも、尙ほ甚だしきものあり。而もは彼忽ちにして世界の首位を占め、單に彼が生涯と教義の自體に賴て、千八百年の間、克くその地位を保持して毫も失墜すると莫し。彼は果して純乎たる人力、若くは材能に依て是を成就し得たりや。如し其れ然らん乎、吾人は今より材能を見て奇跡となさざるを得ず。何となれば是より大なる奇跡は決して存せざれば也。

爰に又耶穌の品性に於て、吾人の看過すべからざる尙一の特性あり、而して是れは彼をして大に全人類と懸隔せしめ、實驗上正に人と反對の地に立たしむる所のもの也。夫れ人の品性は、之に密通して益々之を熟知するに従て、次第に其の高貴と尊嚴とを喪ふに至るを常とす。之に親炙接近するに隨て、弱點と缺點とは發見せられ、崇敬の念は漸く減退し、光冕（佛像等の）は

次第に其光輝を減ずるは、世間普通の事に屬す。來て見れば聞くより卑し富士の山、蓋し古人我を欺かざる也。然れども是れ基督に於ては決して非らず、彼は三周年の久しき、彼れの弟子等と尤も親密なる交際をなしぬ。彼等の昆弟、朋友、教師、忠諫者、賓客、若くは旅伴も、彼と偕に居りぬ。彼が公然の宣教、及び平生の素行も、彼等に觀察せられぬ、左れば假令ひ毛髪の微だも、功名の念、或は驕傲の思、或は情緒の錯亂、或は浮夸尊大の心、彼が心理の明鏡に屬るあらば、彼は確然最も公平なる批評家の前にさへも、其價値を失墜したるや、更に疑ふべからず。然るに彼に於ては、否らず、彼れの位階と品位とは、倍々彼等の目前に高められ、彼は彼等に取て彌々大に驚くべき者となり、且彌々神聖なる秘義となり、斯くて速かに一般の尊仰畏敬の集點たるに抵れり。彼に取ては熟知親炙は却て化神的作用を作し、彼は單に熟知せらるることに依て、人より神と崇めらるるに到れり。蓋し彼はその當初に於ては、單にマリヤの子にして、ナザレの工匠と思はれしなり。次に彼は學者に比すれば、權威を以て語るを以て聞へたり。次に彼は或者に由てユリヤか、否らずんば預言者の一人が、大勢力を以て世に再來したるならんと憶想せられたり。厥時に於てペテロは、夙に眞平に神秘なる大教主、基督として彼を信じたり。然れども未だ彼を諒諒する能はざる程、偉大なる者とは思料せざりしかば、彼が首めて敵の爲めに殺されんとするを睚り出るや、直ちに抗言して、「主よ宜しからず、此事則

に來るまじ」と曰へり。然れども次に吾人は、一度大膽傲放なりし夫の使徒が晚餐の席上に於ては、宛も聲を揚げて公然の問を發し、もつて主の聖體を煩はすを恐るゝもの、如く、他の弟子に點頭して、耳語もて彼を賣す者の誰なる乎を問はしめたるを視る。其後數刻にして、彼れが三度の虚言と、賤劣なる偽誓の爲めに、報顏惶懼しつゝ、カヤバの法廳より出來るや、彼はたゞ専心大主の眼邊を注視し、忽ちにして彼が心胸は、勝へ難きめ懊惱を以て摧かれ、覺へず小兒の如く流涕哭泣したるを看る。斯の如く諸他の弟子等に於ても、基督が次第に彼等と離れ、彼等をして蕭然その前に立たしむるや、彼は反つて一層彼等に近づき、彼等亦一層完全に彼を諒認するに至れり。而して是れ彼れの敵に就ても均しく眞なりとす。彼等は初め、彼は唯徒に社會民人を惑亂するの、一狂漢に過ぎずと思料したり。次に彼等は彼れの教育ある者に非るを議るが故に、彼れが教説と、彼が宣教に於る勢力とは、何れより來るか知らんとしたり。次に彼等は彼を捕へんが爲に、一隊の使者を遣はしたるに彼等は彼れの語るを聞くや、痛く其心を打たれ、命を果すを得ずして、戰慄しつゝ、返り來り、「未だ斯人の如く言ひし者あらず」と告白したり。其後彼等彼に關する迷想を擊破せんとして、彼を解さん爲に、彼が友朋の二人を雇備したるに其時すらも、彼等一旦彼の前に靦面し、彼の語るを聞くや、彼が己等を擧て殲滅せんとを恐れ、若惶措く處を知らず、覺へず後方に退歩逡巡して地に仆れたり。且夫れピラトは彼れの

前に顯然震慄し、彼が緘黙して、異しむべき程口を啓かざるを見て益々懼れたり。然り而して爰に竟に極悪の執行せらるゝや、群集は十字架上の人物に、或る怖るべき秘義の存するあると感得し、己等が行ひたる輕躁殘暴の行爲に就て、深く痛哭しつゝ、胸を打て各々その家に返り行きたり。

是故に耶穌の歴史に於て尤も彰著なることは、吾人衆人に關して眞なる所のものは、彼に於ては全く顛倒せることなりとす。夫れ彼は熟知せらるゝに循て、滋々聖潔なる者、特殊なる者、驚異すべき者、神性なる者と爲れり。初めには彼は五官の報ずる如く、人と思惟せられたり、然れども確認せられ、觀察せられ、親炙せらるゝに従て、彼は固りて神の人となれり、彼は其性徳純潔に、完全に、且其智慧も人間に越へ、神聖なる秘義の中に掩蔽せられたる、畏れて且愛すべき、全人類の友となれり。——且つ其死するや儼然として尊むべく、其悲愁や變じて崇拜の原となれり。而して是れ毫も人工の徴候なく、又顯然たる故意なくして（——是が顯はるるは其の眞なるが故のみ——）歴史の上に表顯せり。顧ふに恐くは一の福音記者も、常人に關しては眞なる所のもの、耶穌の生涯と品性とに就ては、反て顛倒せる斯の著しき一大事を、毫も心附がざりしならん。斯の者果して人なる乎、將た是れ昭かに神なる乎。

再び喜説す

倍今吾人は略々耶穌の、人間に優越せる性質の、首要なる諸點を叙述したり。而して吾人の觀

察したる所は、概ね斯の如し。彼は全く少年の頃より天真の美を備へ、成長するに従て、次第に躬に大任の在るを覺知し、彼れの生涯は大半痛苦患難の境遇なれども、恒に心意の調和を失はず、眞理に乖るとなく、完備十全の美を現はしたり。彼は無罪なること羔の如く、崇高なると神の如く、何人も未だ曾て冀圖したるとなく、如何なる大徳の人と雖も到底企及すべからざる、懺悔なく且つ過失なき敬虔を顯はしたり。彼は毫も自囂驕慢の態なくして、尤も驚くべき要求を爲したり、彼は聊かも心中の平和を讓らるゝとなく、また名譽の念に制せらるゝとなく、何人も耐ふる能はざる苦難を嘗めたり、而も人の見る所にては、少しも苦惱すべき理由なき時に於てしたり。斯くて彼は第に日常生活の間に於る艱苦に依て、柔和忍耐の摸範を示す耳にあらず、尙ほ彼れが大苦難と、その愛に基ける忍耐に憑て、神の受動的徳性の深さ幾許なるを顯はしたり。彼は又萬國民を正義なる神の國に一ならしめんとて、廣延に於て普及に、歲月に於て恒久なる、經綸を計畫し、世の大教師の爲す所と異りて、貧民の心中に其の基礎を奠きたり、而も曾て黨與を爲るとなく、又彼れの徒弟に、毫も黨派的感情を惹起すると莫くして之を爲したり。彼れの教説に關しては、彼れ全然創發的にして、彼れが當代、及び凡ての時代の上に超越し、曾て彼が友朋の希望の爲めに、其所説を變改したるとなく、恒に中正の眞理を保持し、決して過不及ある無し、且つ毫も迷信の迹なく、又寛容放肆の態なく、至近至易の形狀に於て、

至大至高の教義を示し、以て前代未聞の純潔なる普及的道德を建設し、而して之が爲めに、彼は眞理に忠なるを竭盡なりと雖も、然れども彼れが教義の成功に關して、憂慮したる形迹の徴すべきものある無し。今之を一括して約言すれば、彼は熟知せらるゝに従て愈々益々偉大に、賢者に、神聖になれり。——良に彼は固と完全なるを以て、然か謙認せらるゝは宜なり。而して吾人は更に言はんと欲す、是れ則ち基督耶穌也。是れ決して人に非ず、地の屬に非ず。——地に降臨し來ると雖も、地に屬せざる者也。今且らく彼を呼ぶに「聖者」を以てせしめよ、而して「之に依て我等爾は神より出來りしとを信ず」と告白せしめよ。

請ふ吾人をして此零傳に満足せざるを以て、彼に不敬なるものなりと曰はざらしめよ。憶ふに耶穌基督を記述せんとする者すらも、誰か自ら満足するを得んや、吾人は數々絶等の妙手に依て、耶穌の聖像の描畫せられたるを睹たり、然れども一として遺憾と思はるゝ弱點の存せざるは無し。耶穌の品性を描出する亦斯の如し。夫れ吾人が力の及ばん限り、之を思索討尋するは、眞理の爲めに須要のみに屬す、然れども之を試むるに方てや、深く人間の思慮及想像は、彼を思料するに足らざるを感覺せざんばならず、然り而して吾人の失敗したる所は、則ち成功したる所也、何となれば吾人が彼を思索し、之を顯彰するの難きを覺ふる程、彼は吾人が高位の上に超然たる、一の奇跡たり、神祕たるの證據歴然たれば也。

地の如き人物果して實在せし乎、將た人爲の小説に過ぎざる乎

是に於て吾人の答義を要する、尙ほ二個の問題の遺るあるなり、而して其第一なる者は、——吾人が今叙述したる如き人物は、果して實際に生存したる乎と云ふとなりとす。而して是が事實にせよ、或は小説中の人物たるにせよ、兎に角吾人が上來記述したる如き人物、已に愛に存すとせば、之を解説するの假説は、唯二途ある耳。乃ち此の如き人物實際に生存し、而して彼は眞平に如斯性質を具有したるが故に、之を記載するを得たりとなすか然らずんば耶穌は單だ一の純平たる人間に過ぎざれども、其後附加せられたる想像や、寓言や、傳説に依て、斯く過大に修飾せられたりとなすか。二者必ず其一に居らざるべからず。而して今姑く前説に従はん乎、吾人は直ちに斯の如き完全にして且榮光ある品性が、曾て生來の荏弱なる人類に由て到達せられたりと、信ぜざるを得ざるの難關に、出會せざるを得ざるを奈何せん。何となれば若し基督にして、純平たる自然の人ならんか、彼は彼の徳性に關して、吾人と同一なる缺乏的狀態の下に在りとせざるを得ず、然らば吾人は論理自然の勢に驅られて、彼はたゞ琢磨修養の工夫に由て、罪汚より逃れ出で、終に此の如き新にして且鞏固なる聖徳に抵達したりと假想せざるを得ず。若し夫れ果して然らんか、吾人は基督は人にして、而も前述したる完全の域に達したるを信ぜんよりは、幾倍の容易を以て、如何なる奇跡をも信ずるを得る也。若し又後説に従はん乎、吾人は茲にその文牒と性情とに於て、全然異様なる四人の記者を有す、——而も其能力に

於て謫劣に、一人も著大なる人才なる者ある無く——而して彼等は各々己れ思想を呈供し、且相合力して、こゝに各部及び全體ウィニコムに於て、完全に均衡調和を保てる一大人物——如何なる詩人も未だ曾て創意すると能はず、如何なる哲學者が、その至深至大の思想力を用ふるも、想起し且つ世に呈出する能はざる理想的人物——)を作為し得たりとなさざる可からず。然耳ならず、此四人の者は概ね輕信の徒、當時の背理虛妄の空談を轉賣する者たるに拘はらず、偶然にして、古今唯一の完人物を、思想し且つ傳記するを得たりと假定せざるを得ず。然れども吾人が之を信ぜんにには、彼等の時代は餘り開明に過ぎたり。於是乎吾人は再び原との結論に復歸し、そこに安慰せざるを得ず。輒ち是は眞乎に耶穌の歴史上の品性たりし也。彼は誠に斯の如く生存したりしなり。而して之が活潑範に依て確的にせられたるが故に、彼等は斯の如き人物を傳するを得たりし也。左れば此問題に對する唯一合理の解答は、曾て耶穌自らに由て與へられたる者ある而已、其言に曰く——「我れ父より出で、世に來れり」と是也。

第二の問題は、——斯の如き無罪なる人物が、果して世に實在したりと思料せらるゝを得る乎と云ふとなりとす。而して是れ余の敢て支持せんとする所也。何となれば如斯絶秀せる人物に就ては他に別に至當の解釋を發見する能はざれば也。試に思へ、ガリラヤより出たる、淳朴なる一野人が、いかにして斯の如き秀絶せる教説を説き出し、且つ其諸徳の結合に於て然く特殊

彼れが品性は果して無罪なる乎

に、純乎たる人類には到底企及すべからざる、品性を發揮するを得たる乎。他なし、彼の心靈は、内に優美と聖潔とを盈し、分毫の疵汚ある無く、微末の僻見邪情ある莫く、隨て何れの極端と醜狀にも陥るとなければ也。吾人は彼が眞乎に無罪なりしを信するより、容易なる解説を發見する能はず、否吾人は決して他に之を解釋するの道なき也。夫れ彼は、人間的に言へば、不可能的たるを實現したる也。何となれば彼の心靈は、一も人間普通の弱點に依て枉屈せられず、又弱められず、萬事を行ふの容易にして、且自然なると、宛も銀水の清泉より湧出するが如きの觀有れば也。而して耶穌が一個の作爲に依て、此の高位に陞り、而して彼が心理に情緒の錯亂せるあり、且つ彼が心中の明光は罪惡の爲めに昏朦せらるゝに係はらず、爾く行爲するを得たりと云ふは抑々人心の法則と、罪の作用とに關して、太甚しき無智盲信を合示する者にして、尤も憫笑に堪へたるもの也。設し之をしも信するを得ば、「タルムド」(猶太古書中の尤も荒唐不稽に流るる)中悉皆の妄誕を信するは、最と容易の業たる而已。

加之ならず、倘し耶穌果して罪人ならん乎、彼は吾人と俾しく、罪を感覺せざんばあるべからず、反言すれば、彼が品性は全體偽善的なりと曰はざる可からず。あゝ斯の如き神妙なる優美を彰はし、斯の如き牢乎たる一致と天來の恩寵とを顯章したる者にして、都て是れ紛亂糾錯したる心情より出たる、偽善也と曰ふ乎。若し是れ果して偽善なる乎、此の如く成功したる偽

善は、これを是れ實に前古未曾有の最大奇跡に非ず耶。
 是故に余は今断じて曰はんとす、(第一に)基督は實際に生存し、且つ歴史の彼に歸するが如き品性を眞箇に保有し、(第二に)而して彼は全然無罪なる人物なりしと。さて斯の如く觀察し來るときは、彼は所謂天才なる者とは、いかに零境シレンツカレンゲの相違あるぞや。而して斯く吾人既に此論點にまで到着したれば、今より進んで、次章に於て基督教の奇跡に論及し、以て基督彼れ自身に最大奇跡たれば、微毫の困難なくして、彼れは彼れに相應にしき奇跡を行へるを論述せんと欲す。

第十一章

基督は奇跡を行へり

奇跡は福音を證明せず、却てこれは奇跡の眞否を證明するの重荷を負ふ

夫れ基督の奇跡を以て、彼が教義及び福音歴史の證據と做したるは、古來神學者の常慣なりとす。然れども是れ畢竟當時見證の時以來、疑問の形狀全く一變したるを看過したるの誤に座する者也。蓋し基督と同時に生存し、親しく彼が講説に陪伴したる者には、奇跡及休徴は直ちに、彼が神より遣はされたるの證據たるを得ん、何となれば、彼等は躬自ら目撃者にして容易に其事實なるや否やを確むるを得たれば也。然れども之を目撃せざる者、即ち唯だ歴史の報道する所に依てのみ、之を識り得る吾曹後人には、之れ決して直接には何の證據ともならざるなり、何となれば、吾人が先づ確定せざるを得ざる首要の問題は、事實其物は果して眞なるや否と云ふにあれば也。されば福音歴史は、奇跡に依て之が眞なるを證明せらるゝよりは、寧ろ之が爲めに、其眞確なるや否やに關して、一の重荷を負はせられたりといふ可し。蓋し基督の如き人物が、福音書の報ずるが如き、大使命を佩びて世に臨まんとするや、彼は奇跡に依て其使命を證明すべきは、吾人の固より豫期する所、否、之なくんば、吾人は却て彼が要求の眞正なるや否を疑はんとするは、正に當然の理なりとす。是故に奇跡也者は、福音書に開陳せられたる如く、基督の人物、及び彼が使命に合致して、歴史上諸部の一一致調和を得るに至て、爰に首りて

その真理の一證とならんとす。左れば之が須要の證據たるは、疑ふべからずと雖も、然れども、之は其れ自身にては、決して有力なるものに非ず、吾人は尙ほ之が果して事實なるや否やを確むるを要す。而して若し是にして成就せん乎、基督教が神の超自然的啓示たるの證據は、彌々堅固なりといふ可し。是あるに非んば、奇跡は未だ充分の合理的證據に非ると、宛も歴史の材料足らずして、隨て充分の合理的證據を樹つる能はざるが如くならんとす。

夫のスピノザの唱道し、而してバーカー氏の賛同したる、基督教の奇跡に對する駁論は、乃ち——これ神の榮譽を毀損するものなりといふ是也。何となれば、これ自然界に於る彼れの大啓示は、不完全にして、後に至て修補せらるゝが如き者たるを暗示し、且つ之を修補するに方り、奇跡を行はんとせば、是れ彼れ自家の法則を顛覆し、且自家の工業を破壊するものと思惟せらるれば也。

ヒューム

ヒュームに至ては、彼は無神論者なれば、勿論神、或は彼れが經綸の錯亂に就て、言を作したると莫し。彼は第だ、吾人は經驗に頼るの外、何物をも議る能はずと假定し、吾人は經驗に徴して、悉皆の證據(奇跡に關する)の立つ能はずして、自然法の一定なるのみ、獨り樹立し得べきを論じたり。されば此論法に循へば、如何に許多の證明も、到底奇跡に關する吾人の信仰を維持する能はず、何となれば、吾人は常にいかなる證明よりは、自然法の一定不變なることを

奇跡は信
すべから
ずてう體
疑派の假
定スピ
ノザ及バ
ーカー

確信するもの、否確信せざる可からざるものなれば也。

斯く一時殆んど、人の靈性的傾向に關する思想を壓倒せんとまでに、自然法を尊崇したる、近代科學の不信的傾向に驅られて、博士ストラウスは、餘り深遠なる考究をも盡さずして、先づ奇跡の信すべからざるを假定し、其假定に憑て、彼は福音歴史に於る、沈痛有力なる攻撃を試みたり。偕て吾人は、今前章已に準備したる諸種の材料に藉りて以て、現代自然的傾向の特色たる、是等及び是に類する抗論に反對して、基督教奇跡の事實たるを確證せんと欲す。然れども吾人の企圖せんとする所は、其一個々々、即ち其特別なる一個を論證せんとするに非ず、何となれば、吾人の議論如何に拘はらず、精微の點にまで論及し、此れ若くは彼れ、若くは其或物の、或特殊の理由の爲めに、信すべからざると、乃ち傳記者の過誤輕信を關發するは、尙ほ各自の自由に爲し得る所なれば也。吾人はたゞ、基督は眞乎に奇跡を行へるを證明せんと欲する而已、是れ本論に於る最要點なりとす。

然らば先づ吾人をして、疑問の中心たる奇跡とは何ぞやといふの問題を、考定するに努力せしめよ。

吾人は嚮に、已に自然及超自然の區別を立て、自然とは、原因結果の連鎖にして、物體に於る因果の法則に指導せられて起り來るものを曰ひ、超自然とは、原因結果の連鎖の上に、連鎖以外

ストラウス

より働きを及ぼし、他より動かさるゝに非ずして、先行原因の如何に拘はらず、自ら行爲するを曰ふなるを明言したり。されば自然と超自然との區別は、實に既存の原因の連行と、創發的原因の活動との間の差也別言すれば、物體と靈者との間の相連也。而して此見に依れば、人は靈者として、渾て受造の靈(善惡とも)と偕に、其自由に且道德的に行爲する點に於ては、神と俾しく超自然的存在者たる也。今夫れ彼が自由に依て、彼れの一肢を動かさん乎、是れ彼は自然界に於る因果法の下に行爲したるなり。然れども若し彼れ、之に由て殺人罪を犯すとあらん乎、吾人は直ちに之を譴責し、之を國法に附せんとす。而して是れ一に彼は彼れの裏面なる有効的原因に依ても、支配せられたるに非ずして、彼れ自ら之を執行したれば也、即ち法律の所謂「豫謀的惡意に因れば也。」

奇跡を定義す

然れども吾人は、是等人の自由なる道德的行爲を指して、奇跡とは呼稱せざるべし、何となれば、是れ尙な普通のものにして、驚異すべきの性質、毫も茲に存在せざれば也。然らば奇跡とは果して何ぞや。他なし、是れ超自然の行爲、即ち自然界に於る原因結果の連鎖上に、連鎖以外より働きを及ぼし、五官力の達する界限に於て、吾人の駭異を惹起するに足るの或る出來事を生出し、斯くて人間以上の大能の實現を覺知せしむると也とす。吾人は爰に三要點の存するあるを忘る可からず。即ち(一)是は原因結果の連鎖中にあらず、其れ以上の或る行爲に依り。

消極的に奇跡を説明す

奇跡は自然的原因以下の出來事に非ず

(二)且つ五官の界限中に在らざるべからず。何となれば、かの心靈の更生なるものは、ラザロの復活と同一の大能力を要すと雖も、是は五官の徴すべゆなきが故に、奇跡とは曰ふべからざれば也。(三)又是は、人間以上の大能力を覺知せしむる爲のものならざる可からず、然らずんば、術若くは魔術師若くは妖術師の作爲も、亦奇跡たるべし。夫れ奇跡なる者は、時としては休徴及び偽異能と曰へる場合の如く、之を天使及惡靈等、凡そ從屬的勢力に歸するとなきに非ずと雖も概ね神力に由るとなすを恒とす。抑々「ラテン」語に於ては、奇跡てう語は、限制的形狀を取るものにして、吾人が驚異せる或有限的、孤立的事實を表示する者也。蓋し惟ふに、是は自然界全體より區別し、比較的狭小なる事物に關するの故を以て、斯くは限制的形狀を取りたるものなるべし。而して聖經に於ては、之を顯示せんが爲めに、種々なる名稱を用ひて、「休徴」といひ、「異能」といひ、或は「大能」といひ、又一回「不思議」と譯せられたるとも有るなり。今吾人の定義をして、一層精密にして、且誤解の患を免れしめんが爲めに、吾人をして尙ほ數點の消極的説明を加へしめよ。

一、奇跡は吾人の定義已に暗示する如く、自然の法則、即ち自然的原因の下に開發したる、或る驚異すべき出來事に非ず。或宗教の教師は此見解を取り、自然界は、元來、時至て是等特殊の愕異すべきことを生出する如く、設計せられたりと思惟するもの、如し。蓋し全體として見る時

は神の本来の經驗は、爾く施設安排せられたるは疑ふべきに非ず。然れども此經驗は、固と純乎たる自然界よりは一層大なる者、即一切の超自然的勢力及事實、然耳ならず一層高濶なる超自然力たる、神自身の事業及行爲さへも、含有するとを遺るべからず、而して是は自然界は存在の總計にして、凡ての異能は、咸な自然界の開發なりと想像するものとは、全く別個のとなりとす。

二、奇跡は宇宙の組織を離れて、單箇に起り來る出來事に非ず。何となれば、神の眞乎の組織なる者は、吾人の己に縷述したる如く、自然界にあらざ、靈者をも含有する、統治及び秩序の一層濶大なる全躰を意味する者にして、自然界はたゞ之に服従せる、比較的輕微の部分に過ぎざれば也。此の至高の見に據れば、奇跡は反つて神の眞組織の一要素にして、これあるに非んば、之は完全の組織にあらざる可し。是故に奇跡に對抗して、是は神の王國に於る秩序を壞亂する者なり——故に吾人の信ずべからざる者、且神の名を褻瀆する者なり——といふは、無根の空論なりとす。

三、奇跡は吾人の經驗に矛盾するものに非ず、是れ只吾人の經驗に超越するとある耳。夫れ吾人は、所謂自然界及自然界の秩序に就ては、多少の經驗を有す、然れども一たび超自然力之に逢着し、之に注入せらるゝに迫んでは、自然界に於て如何なる結果を生ずべき乎、是れ吾人の

奇跡は宇宙の組織以外の出來事に非ず

奇跡は吾人の經驗に矛盾するものに非ず

の語る能はざる所、此に至ては、吾人の經驗は、僅かに、吾人自らの超自然力に依て執行せられたる結果にのみ、限られたりと曰はざるべからず。神及び天使、或は惡靈の超自然力が、如何なる事物を做し得べきかは、吾人の未だ識らざる所也。是故にヒューム氏の辯證したる所のものは、全く地に墮るの外なき也。夫れ斯の如き有力者に依て執行せられたる事物を信仰し、或は證明するは、頗る困難の業たるべし、然れども是れ至當の意義に於て、吾人の經驗に反對するが爲めに非ず、是れ唯吾人の經驗には、頗る奇異なる者の如く見ゆる而已。

四、奇跡は自然の法則を停止し、或は破壊するものに非ず。古來奇跡の保護論者が、過大の言論をなして、却つて甚だしく己れの立場を危ふしたるは、實に此點に在りとす。それ自然の法則は、奇跡に服従するものにして、之は奇跡に依て停止せられ、或は廢絶せらるゝに非ず。喩へば、余今余が手腕を高く揚ん平、余は引力の法則を服従して、之に反する結果を生じたるにて、引力の法則若くは勢力が、之に依て廢絶したるに非ず。反つて是は宛も手腕を正當の地位に保たしめたるが如く、斷へず依然として均一に働きつゝある也。又かの有機物は、その自己の化學力に由て、無機化學の法則を服従しつゝある也。蓋し自然法の服従せらるゝ事實程、吾人の熟知する者は莫るべし。想ふに自然界を征服し、之をして其自己の因果法のみにては、到底生ぜざる所のものを生出せしむるは、凡そ生命を有する者の、特殊の大功業なりとす。吾人

奇跡は自然法則を停止し或は破壊するものに非ず

は曾て吾人の宇宙より隔離し、其間に大淵の存するありて、我宇宙の毫も關涉する能はざる、別箇の宇宙あるを假想したりき、若夫れ斯の如き別宇宙の、我宇宙と兩々相對して、並立するところらん乎、是が絶へず我宇宙の全動作を變更するは明なり。而してこれ其法則を停止したるに非ず、たゞ之を服従して、其作用を變改したる而已。今夫れ靈者の世界は自然界と呼ばれたる斯他の世界に降臨し、神の豫め制定したる方法に従て、其上に活動するを許されたる、別箇の世界たる也。然れども其活動するや、一の法則を停止し、若くは組織の一斑をだも、壞亂するものに非ず。蓋し自然界は依然として、原因結果の法則中に確立し、神に命定せられて、超自然者相互の間の媒介となりて存する也。彼等は其中に、又其上に動作し、斯くて其活動に依て、人と人と、又總て受造の靈と其同族と、或は神と受造物と受造物と神と、相互の間に道德的交親を做す也。斯くて又彼等が受る所の災害に憑て、法則の須要なるを熟知し、且彼等が行ふ所の罪禍を自覺するとに倚て、己等が心意の劣悪なるを認識する也。此の如く全軀の經驗に頼て、彼等は次第に教訓せられ、懲戒せられ、又た愛の中に薰陶せられ、竟に聖徳の中に固ふせらるる也。而して神の其上に動作するや、微毫も自然の注則を停止するに非ると、吾人の行為に於けるに異ならず。蓋し自然界はその自己の法則に由て、彼れと吾人の使役に服順し、自由に支配せられ、變改せられ、且つ謂はゞ吾人の間に於る熟知の標識たるは、これ其本領なれば也。

奇跡を拒否したる者の退縮

奇跡に關する種種的論證人間の超自然的行為の爲た凡の疑問を答へるの體也

前陳したる是等四個の消極的解説に由て、吾人は概ね奇跡の信仰に關する、一切の煩累を一掃し、以て其首なる懸見を交除するを得たるが故に今より進んで、基督教奇跡、の若干の證據を列擧せんとす、否、寧ろ吾人が上來業已に論及したる證據を蒐集せんとす。

一、吾人は已に、人は彼れの自由にして且責任ある行為に於て、超自然的に動作する者なるを視たり、別言すれば、彼は何物にも衝動せらるゝとなく、自ら自然界に於る因果法の上に動作する者なるを賭たり。是れ決して奇跡にはあらず、然れども奇跡に關する一切の難問を解するの鍵鑰は正にこゝに在る也。抑々奇跡なる者は徹頭徹尾吾人の場合に於ると等しく、神及凡て超人的有力者が、自然界に於る諸原因の上に動作するに外ならず、惟其少しく異なる所のものは、彼等が吾人に超越するに隨ひ、其結果の程度に於て差別ある耳。吾人は唯自然界は、其自身の法則に由て、吾人に於るが如く、彼等に服従したりと假定すべきのみ、而して是れ實に萬種の困難を排くの捷徑なりとす。然るに吾人動もすれば、吾人自身の行為に就ては、毫も怪訝の念を挿むとなくして、獨り其發顯を視て驚異するとなきにあらず、然りと雖も、吾人が如何に驚異するに拘はらず、そこに何等の怪事あるなく、又一の自然界を擾亂するとあるなく、却て斯の如き事實數々するに至れば、竟に毫も驚異を感覺することなきに到らんとす。若夫れ基督の臨終に際して、日輪は光耀を亡ひ、大地は震動したるの事實を曰はん乎、此時に方て、斯の如

く自然界の彼に同情を表したるは、宛も吾人が罪科の念に醒められ、吾人の心胸爲に方に碎裂せんとするに當ては、吾人の顔色は忽ち赧然とし、吾人の眼中は涙を以て滿さるゝに發ると齊しく、彼に取ては寧ろ適當のとなりとす、夫れ赧顔し或は流涕するは、因果法的作用に非ず、是れたゞ因果法が、吾人の自由と密着の干渉ある、感情に感かざるゝとあるが爲めのみ。自然界の赧顔流涕するとあるは、究竟彼女が吾人の自由に服従し、かくて吾人の行爲と觸接するとあるが故也。若し夫れ、吾人が之を命令するとなからん乎、彼女は永遠に至るまでも、惟一點の赧顔、惟一滴の流涕すらも、呈露するともらざらんとす。

二、次に人間の超自然的能力の行爲たる、罪の事實が、いかに奇跡に類似せるかを思考せよ。夫れ罪は、吾人が前章已に説述したる如く、自由存在者が、行ふべからざる事を行ふとなり、何となれば、若し其行ふ所にして、神の創定したる因果法の下に在らば、是れ即ち罪とは曰ふべからざれば也。蓋し思ふに、神は罪の存在を容したると、當に凡ての偽異能の存在を容したるが如くなるべし、然れども彼は決して之を事實となしたるとなく、又決して之を彼れが經綸と調和せしめたるとある莫し。是故にこれが世界に入來りたるは全然神の施設したる萬事に背反せる被禁の事實として來りたるや昭かなり、而して其結果奈何を問へば、勿論萬造物本來の、樂圖的秩序の一般に壞類したるとなりとす。夫れ心靈は先づ其の怖るべき作用を感覺して、不

即ち幾ん
と奇跡に
似たるの
蓋あり

調子不都合の勢力となれり、組織整然たる靈性は、潰亂昏昧して生ながら醜狀を呈し其心は廢黜せられて其王位を失ひ、思想の諸系統は、愈々紛亂糾錯して復た如何ともすべからず、乃ち氣質は調子外となれり、情性は不法に燃上りて其勢猖獗當る可らず、想像力は痛苦の地獄、或は暗鬼の發窟となり、且身軀は百病の塊となり、醜惡の觀を呈するに至れり。將又社會は支離滅裂してまた收拾すべからず。加之、物界其物さへも、吾人の前示したる如く、處として紊亂せざるは無く、醜汚の見るべきあり、不調子の聆くべきあり、もはや造物者の完美を反射する能はざるに迄れり。嗚如何なる混亂の惡鬼か、この壯嚴なる生物界、及び秩序井然たる自然界の邦域を、斯くは大なる混亂の中に投入したる乎。嗟彼等が誇りがに、何物も擾亂せしむる能はずと颯言せる、美と秩序の大法は果して何處に在る乎。吾人は罪を奇跡とは曰はざるべし。吾人は第だ言はんと欲す、凡そ曾て吾人に報道せられ、且吾人が耳朵に達したる孰れの奇跡、否一切の奇跡と雖も、罪、即ち人間の罪に依て、實際に惹起せられたる、錯亂の千分一だも、成就したりと想像する能はずと。左れば都て自然界の因果法は、自ら進行して、理想的統一の方針を充さんとするを思想し、斯くて永遠にまで、奇跡の行はるべきを拒否せんとする、誤謬なる偏理論と、眞乎に信奉する者は、其隱見を匡正せられんが爲めに、別に他の論證に適くと要するとなかるべし。

全完なる
が故に神
の干渉妨
碍する所
となるべ
からずと
假定せら
れたる自
然界は實
は既に不
自然とな
れり云
ふと

三、されば次に進んで、吾人をして、所謂自然界なる者、即ち自然論者の大膽にも、如何なる奇跡に依ても、修補改良せらるゝを要せずと假定する者は、實は既に存在せざるに留意せしめよ。夫れ罪は神の創定したる本來の秩序は、殆んど壊亂したりと言も不可なき程、世界を毀損したり。蓋し法則は咸悉く初めの如く作用をなし、決して廢絶せず、又消滅したると莫し、然れども罪てふ非行錯爲は、諸々の關係を攪亂し、且百般の事物を顛倒して、最早自然界本來の姿を賭る能はざるに至らしめたり。今や自然界は、宛も旋輪の一部分が、その處を失て妄動を始めたる時計の如し。それこれは、何れの部分も缺くるとなしと雖も、全器械は爲めに錯亂して、已に時計にはあらず、但だ亂雜なる無用の長物に過ぎず。斯の如く罪の下に在るこの自然界は、既に自然界にあらず、却つて不自然の状態となれり。然るに現代の科學的論者は、之を以て秩序完全なるものとなし、神さへも、其正狀を破壊するとなしには、奇跡を行ふ能はずとなす、嗚呼何ぞその誤れるの甚しきや。彼等は謂へらく、是は自然界なり、而して自然界の神たる神は、暗々裡に其元來の不完全を承認する乎、否らざれば、その完全の組織を太く壊亂することなしには、之に觸着せざるべく、又然かする能はざるべしと。而して哀哉、其完全の状態已に久しき以前に過ぎ逝きたるを知らず。距んぞ料らん、之は一の有分者が、之を横領したる以來、別言すれば、人間が行ふべからざるを行ふて(即ち罪を犯して)より以來、必然の結

故に奇跡
の如きも
のありに
非んば人
間の恢復
は望むべ
からず

果として、紛擾混亂の有様となり、單に造物主意匠の美を反映する而已に非ず、又數々罪の効果たる羞耻、不調和、及醜狀を呈露するに迄れるならんとは、故に吾人は固く信せんと欲す、凡そ聊かたりとも、思惟一たび此に到るものは、倏ちにして、造物主に由て其中に行はれたる奇跡なる者は、之れたい其組織的正狀を挽回し得る、有望の徴効に外ならざるを、領會するならんを。若夫れ神は其創造したる儘の正當なる自然界には、決して奇跡を行はざるべきは、吾人の素より承認せんと欲する所也。然れども事實は之に反し、自然の状態は已に去り、人と偕に罪惡の中に墮落し、且つ之は人をして其墮落の中を通過して、鍊磨せられ、遂に其中より救濟せられしめんが爲めに、本來人間及神自身に依て使用せらるべく、創定せられたるが故に、吾人は奇跡に於て、一の信仰を阻碍するものあるを見ずして、却て其反對を證明すると多きを觀る也。

四、是に於て、吾人は尙ほ進んで、奇跡の如き、神の或大能力の現はるゝとあるに非んば、到底自然界本來の秩序を再造し、或は人間墮落の情況を、救濟する能はざるの事實を、説述せんとす。夫れ自然の法則は、今や彼れの内外に、罪と死の法則となりて逆行せり、而して此の心靈及世界の組織、一旦壞亂す、全能なる神にあらずんば、決して之を復舊せしむる能はざるは、一見して明白なりとす。蓋し法則に自正の勢力なきは、一たび錯亂したる器械の法則が、

其まゝいかに進行するも、其錯亂を療養する能はざるが如し。是故に人類が恢復せらるべきものなる以上は、別言すれば、世界及人間の存在に關する神の一切の大目的が、失敗すべきものにあらざる以上は、是非とも奇跡即ち神の超自然力の發現するは、存すべき善なり、否存せざる可からざる道理也とす。看よ全宇宙に於る萬造物は、この大救拯を俟望して、いかに呻吟懊惱しつゝあるを。蓋し想ふに、斯の靈性的品性、及秩序を、恢復せんとする神の大經綸は、吾人が既に開陳したる如く、元來二様の施設方案に依て成遂すべきものたる也。則ち創造と改造の二途にして、創造工は罪の爲めに錯亂せられ、改造工は恩恵と奇跡に依て提起せられ、且成就せられんとす。

自然界は決して神の全組織として創設せられたるに非ず

五、借今吾人をして、姑らく前述したる所に立返り、如何なる思想及事實を、そこより收拾し得べきかを觀察せしめよ。吾人は先づ首めに自然論者及び主として科學に依て其腦裡を支配せらるる者の、一般に看過する所なる、自然界は神の王國の全部に非ず、又爾が創意せられたるに非ざると、及び神の終局目的は、決して自然界の中に包含せざると、又是はた彼れの目的の爲めに、方法として指定せられ、唯彼れの見識を訓練するの廣野として、造られたるを發見したり。此見識に憑れば、唯自然生物なる靈性的存在者は、彼れが王國の眞箇主要の地位を占むる者にして、自然界は之に服従せんが爲め、且之が生涯の試煉の大戦争の戰場たらんが爲めに、

造られたる也。——然のみならず、是は彼等に依て錯亂せられ、神に依て恢復せらるる也。是故に神の組織系は、些少も彼れの奇跡の爲めに塗抹せられ、或は毀損せらるるの理由ある莫く、却つて彼が行ふ所の萬事は、愈々その大經綸を成就するものなり、そこに毫も變更あるなく、再考あるなく又一致の壞るゝともなく、第だ精密に初頭施設計畫したる所を實行したる而已。彼は實に其奇跡を行ふ時すらも、預定の法則に依て執行する也、而して之は勿論、夫の秩序整然たる完組織に合するものとす。

神若し曾て何事をも行ふの力ありしならば、又今日にても奇跡を行ひ得る筈也

又、神は曾て何事をも做したるとなく、また做す能はずとなすか、否らざれば今も尙ほ奇跡を行ふべしと假定し得べきの道理あると思へ。夫れ曾て存在せざりし或物を創造し、曾て基ひなかりし或設計を設定するは是れ其後に於る萬種の奇跡を解釋するの一大奇跡に非ずや、又彼は、所謂自然界なる一の繩索を創始して、其進行を傍觀せんが爲めに退隱するは、寧ろ一の奇跡にして若し之を假定するを得ば、吾人はまた彼は之を創始したる如く、之を繼續すべしと思考し得るに非ずや。彼は曾て何事も作爲せざりし乎、將た彼は今も尙ほ或事物を作爲し得る乎、二者必す其一に居らざるべからず。吾人は一方には奇跡の信仰を拒絶しながら、他方には有心的の神、及造物主の信仰を維持する能はず、夫の徹頭徹尾奇跡の存し得べきを拒否する者は、實は凡神論、否一層甚だしく、無神論を主張する者也、凡そ絶対に奇跡の信仰に反對するの宗教

はその神は決して何事をも做したると無きを教ふるの宗教にして、畢竟神無きを教ふるものなり。

然れども
其證據の
尤なるも
のは耶穌
彼れ自身
なりとす

六、於是、吾人は今更に進んで、再び前章の論旨に至らんとす。而して吾人はそこに、都て本論を論断するの大證據を得んとす。吾人は前章に於て、耶穌の品性に、充分なる批評的觀察を下して、彼は昭かに人間中の者に非ず、決して人間中の英才と、日を同ふして語るべからざると、又斯の如き品性は、想像工夫より出たるに非ず、却て實際に生存したる者ならざる可からざると、否らざれば彼れの如き人物を記述する能はざると、及び外觀上斯の如き者たる彼は、彼れ自ら要求する如く、無罪者たらざるべからざるとを顯示したりき、然らば吾人は、爰に世に入來りたりと雖も、世の屬に非ず、神より出來りて、吾人に、完全に神の盛徳を顯章したる者（——彼れ自らの主張する如く、彼れ若し眞乎に父の永遠の道の受身したる者ならば、然かあるべき善の如く——）あるを觀る。彼れ果して奇跡を行ひたる乎、是れ吾人が今論決せんと欲する處の問題也、余は再言せん、——彼れ果して奇跡を行ひたる乎。夫れ事實上及論理上自然の推定によれば、彼は人間以上の者也、されば又彼が世に存在すると、これ已に一の奇跡なるが如し而して若し自然界の法則が、彼に依て停止せらるゝなきと、宛も吾人の超自然的行爲に於るが如しとせば、なほ一步を進めて、是は吾人が通常人間以上の勢力として承認する所の、奇跡

休徴の存在を許容する程にまで、彼れの力に服従すべき乎、是れ一層直接の問題なりとす。而して彼は躬自ら人間以上の者たるが故に、自然界は、確然その自箇の法則の下に、又法則に依て、彼れが人間以上の性格に相應する如く、爾く彼に服従すべきは當然のとなりとす。果して然らば、若し彼にして人間以上の事物を行ふとあるに非んば、寧ろ甚だ奇異なりとす、否彼が之を行ふと莫しと曰ふは、哲理上信すべからざるとに屬す。それ風琴は諸部甚だ巧妙に組織整頓せられ、凡て壓板（風琴師手指の觸るゝ處）に觸るゝ勢力に従て、美音を發する一の器械也。今夫れ一動物あり壓板を横ぎりて、狼りに前後亂走するとあらん乎、これは直ちに、不整不合の亂調を生ぜん、是に於て彼は自ら推想して謂はんとす、此の如き音調を生じて別他の調子を生ぜざるは、これ此器械の性質なりと。然れども視よ、一たび超自的的情感と巧手とを有する、一層高尚なる風琴師の、この器械に來りて、壓板を按するや、圓曉たる天の音樂は、倏ち吾人の耳官を娛ましめんとす。然るに恐くは、夫の動物は方に論じて言はんとす、是れ器械の性質に戻り、且己れが經驗に反すと見ゆるが故に行はるべからず、又信すべからざるとなりと。然り如此ことあらんも知るべからず。而して人の言を作す、往々毫も之に異ならざるを見る也。然れども風琴師、及び彼が動物の行ふ能はざる所を行ふを得べしと思想する者は、奏樂はかの亂調を作したると、同一法則に依て、行はるゝを疑はざる可し。斯の如く、吾人に勝りて自然

界の上に大勢力を有する基督は、自然界自身の法則に由て、吾人には爲し能はざる効果を生ずるを得べし。否若し彼にして之を爲す能はずんば、これ却て渾ての秩序、及び關係に撞着するものなりとす。抑々人間以上の存在者にして、其行爲總て人間の區域中に制限せられたりと假定するは、道理に反するに於て、吾人の信する能はざる所也。然のみならず、自然界の法則其物さへも、彼が新有力者たり、至高の有権者たるに應じて、或新結果、及驚異すべき出来事を生じせんとを要求する所あらんとす。實に彼れ自身既に奇跡にして、彼れ若し奇跡を行ふとなくんば、是れぞ奇跡中の最大奇跡なれ。

彼は奇跡に適當なる高尙の使命を有す

今尙ほ進んで、本論に必要な一助として、基督の世に顯現したるは、其顯現すべき充分の使命あるに因り、毛頭神の事業を顛覆せんとする如き、嫌疑の入るべき所なきに注意せしめよ。彼は自ら罪の療醫者、萬物の改造者、及び世の道德的創造者として、神より出來れるとを宣言せり、乃ち彼は一に萬物の希望を成就し、且難事中之至難事を行はんが爲めに來れると、啗々として明なり。若夫れ彼にして、徒らに吾人の好奇心を盈さん爲めに、無益不用の怪異を做し、或は射利のために虚空無効の妖術を行ひ、或は迷惑眩昧の祭司の如く、幽界を洞觀するの明ありと曰ひ、或は塵ひて太陽を喚還すの力ありと曰ひ、其他概ね此種の無意義、笑ふに堪へたることを主張して、自ら善しとせる者ならば、吾人彼を信せざるも可也。然れども、彼は全然

之に反し、神の國を建設し、以て太初世界の創造其物の中に、已に含有せる、至高至善の目的を成就せんが爲めに、神より出來れりと宣言し、且つ彼れの事業は、其品性と倍に高尙に、彼此相呼應して、以て方に吾人をして、彼れが行へる奇跡の眞確なるを信せしめんとす。

而して吾人の推察し得る如く、人間の超自然的行爲は、概ね物体を經由して行はると雖ども、ラザロの復活に至ては、一の自然的媒介、或は器具を要したると莫しとす。然れども又一方より觀察するときは、吾人の身軀は自然界の一部分と雖も、吾人は恒に、この自然界なる身軀の上に、同一様に、之と吾人が意志の間に、何の媒介なくして動作しつゝある也。蓋し種々なる存在と自然界との間に存する關係は、また其種々なる階級に隨て異なれり、而して之に關しては、吾人何物をも知る能はざる也。吾人は惟言ふを得べし、神の受身なる基督の如き存在者に至ては、物界の全邦域が彼れの生命に依て活動せらるゝ、感受官として存するは、疑ふべからずと、此點に就ては、たゞ吾人の知る能はずといふことは、抗論を唱ふるの、充分なる理由とはならず也。縱ひ吾人は、如何にして基督は其奇跡を行ひし乎、或は彼れの意志を、その周圍の萬物に行けし乎を知る能はずとせんも、其事實たるに於ては、毫も輕重する所なき也。吾人の了解する能はざる所のもの、豈惟是れに耳限らんや。

吾人は彼れ、彼れの奇跡に於て、一の法則の紊亂したるを發見せざる也。何となれば、吾人は、彼

が、自然界、及び之より一層濶大なる眞乎の組織系（——宇宙鞏固の基礎にして、萬物の眞意義を包含せる——）の上に、統治しつゝあるを承認すれば也。斯の如く、彼は彼れ自身、永遠より此の至高の組織系の上に位し、之を己れの身に集中し、且總ての物事を指導し、服従し、斯くて萬物を包括せる至大至高の目的に服事せしめつゝあるを思へば、彼が父の使命を奉じて、父より出來りたるとき、彼が父より受けたる大權を執行するを、辯難批評するは、吾人の爲すべき限りに非ざるを、深く感覺せざんばならず。又吾人、彼が明白に吾人中の者にあらざして、吾人が接任せる、極めて繊小幽暗なる、五官帯の後面なる光明赫々たる靈の疆域より、出來れるを惟ふときは、吾人、痛病の彼れが面前より飛去り、暗黒の隣介、盲瞽の眼中より脱去し、剩さへ、死も亦退縮して、其猛威を揮ふを得ず、且つ罪の下に於る顯然たる懲罰的禍害が、上よりの恩寵矜恤に依て、解除せらるゝを見て、吾人は之を如何に思考すべき乎。若夫れ、人は五官の中のみ生葬せられ、而して五官は錯亂の原たる罪の爲めに昏迷せられたりとせば、彼れが其乖離したる諸官能の上に、手を按して、「爾痊愈べし」と曰はれたるは、果して驚異すべきとなる乎。若し又、吾人の罪なる惡王國、或は酸慘たる不自然界が、如何にか彼れの醫力に依て觸消せられたるとき、吾人は秩序の基ひ太く震動したるに、愕然たらざるを得ざる乎。將又、彼れの奇跡力に由て、或る毀損したる官能が、天の恩恵に沐浴したるとき、吾人は、科學

的法則は震撼し、科學的秩序は壊裂せんとを恐れて、戰慄せざるを得ざる乎。否々、寧ろ福音記者と俱に、「是の首めの奇跡は耶穌がカリヤに於て行へる所にして、その榮光顯はれたり、我等之を信ず」と曰ふの、勝れるに如かざる也。夫れ榮光は幽暗を驅逐せんが爲めに、彼れが受身の躬に由て世に未來り、平和と秩序は、聖者が天界に於て有する所のものを、下なる地の上に再建せんとして、彼に由て降臨せり。將又被罰的奇跡たり、また受造物の呻吟惱苦の原たる罪惡は、一層強大なる耶穌の奇跡、及び彼れの事業に屈服したり。而して現世界、及上なる世界の諸聖徒は、相倍に平康と安息が地の上に恢復せられ、且宇宙全體の平和の鞏固にせられたるを覩て、欣喜雀躍せんとす。それ不調和の中より調和起り、錯亂の中より美生れたり。ハルヤ、アーンメン、主たる全能の神は、今尙ほ支配し給へり。

然れども爰に一の抗論のあるあり、他なし、凡そ奇跡なる者は、假令他の點に於て悉く眞なりとせんも、之れ單だ勢力の證明に過ぎずして、一の道德的性質を含有せざるが故に世界改造の恩恵として、福音を観察するときは、之れは道理なく、價值なく、寧ろ無用の長物なりと曰ふこと也とす。吾人は之に答へて曰はんとす。否罪の羈轡の下に在り、その酸然たる苦役に屈從せる吾人々類には、神が大能力を以て世に未來りたるを發見するは、決して不用の事に非ずと。夫れ是等耶穌の大異能が、實行せられ、且適當に證明せられたるは、吾人に取ては、彼は吾人

奇跡は單
だ勢力の
證明に過
ぎずとの
抗論

の要求せる一切を成就し得べきとの、至當の證據たる也。蓋し一度失墜したる、人類社會を改造するは、酷だ至難の業たるは尙くも眞乎に己れの愍然なる罪奴たるを覺知したる者の、貪婪等しく承認する所なるべし。然れども彼等は智者に手を觸れて之を明かならしめ、癩病を叱咤して之を退去せしめたる者、又海の上を歩み、死者を甦らしめ、自ら死の關門を打破したる者は、復吾人が慾情を制御し、酸苦なる感情を緩和し、固有の疾病を掙蕩し、心靈一切の風を鎮靜し得るを惟ふて、大に安慰する所あらんとす。斯の如く彼れの奇跡は働きて、吾人の勇氣を鼓舞し、希望を奮勵するの、信任の輪環となり、又勢力の倉庫とならんとす。雖し吾人は悲哀の爲めに心壞亂し、罪科の爲めに心壓倒せられ、耻羞と荏弱との爲めに、方に絶望の深淵に沈まんせしむるにあらざらんも、吾人は猶ほ、吾人心靈中の大奇跡は、必ず成就せらるべく、若し吾人基督の袂の裾にたもつるを得ば、能力の彼れより出て、吾人を差すならんとの希望を有するを得る也。吾人が心中に疑懼暗黒の満るときも、外より、有らゆる痛苦患難の襲ひ來るときも、將た人生の狂風怒濤逆捲き來りて、天地晦冥ならんとする時も、吾人は遙かに、彼れが波上之路破し來り給ふを望見し、而して彼れが「我なり權る、勿れ」と曰ひ給ふを、聞くを得る也。而して許多の不信説の、常に吾人が信仰を震撼せんとて、潛入し來るあり、吾人が之を排斥する能はざる時、吾人が奇跡を信ずると、薄弱に陥らんとを恐るゝもの、如く、耶穌の品性は、常に

明確なる自證を以て之と俱に、且之を透して、耀きつゝあり、以て之は止だ勢力の顯著なる發現のみにあらず、榮光赫々として、天愛の徽章たり、且つ崇高偉大なる彼れ自身に適せる行爲たるを、闡明しつゝある也。

然れども吾人の熟知する如く、最近時勢の弊風に風靡せられ、今吾人が説述したる抗論を試むることをもなさず、第だ耶穌の精神を受けるを以て足れりとし、奇跡の如きは、敢て問究するを要せずとなして、自得する者鮮なからざるが如し。此種の福音を信ずる者は、基督信徒として、決して大成する能はざる也。彼等は眞箇に耶穌の精神を享る能はず、何となれば、之ありてこそ、彼は基督教中の最大奇跡たる者にして、諸他のものは、比較的たい之が火花たるに過ぎざれば也。加之ならず、彼等は又、耶穌は彼等の無力なる情況が、要求せる所を、悉皆充實し得るをも、信ずる能はざらんとす。若夫れ、彼等はたい、彼れの美を讚嘆し、或は格別の効なくして、彼れの行爲に模倣するを得ん、然れども、罪に依て錯亂紛雜したる、性來の潮流を回瀾し、之を高めて新生の聖域に抵たらしむるに至ては、彼等の信ずる能はざる所也。蓋し斯の如き、恩恵の力より離れたる、微弱なる模倣の福音は、決して彼等を改造して、神と一致せしむるの、活力あるものに非ず。夫れ——「神の彼に由て行ひ給へる奇跡と休戚とに依て、神に真納せられたる人なる、ナザレの耶穌、——といふの外、何物も、人心をして信仰に歸せしめ、

然れども
吾人は直
ちに最大
奇跡たる
耶穌に於
て満足す
るを得

之を啓導して、更新なる超自然的恩寵の力に與らしむると能はざる也。

於是、吾人は今畢りに臨んで、再び證據の最大なる者に復歸し、そこに満足せんとす。夫れ耶穌の品性と教義とは、啓示に於ける小遊星をして、各々其處を得せしめ、且つ一切宗教上の知識に、有力なる自證的光明を、注射する所の太陽也。吾人は今に至るまで、疑義及妄論なる幾多の妖怪を驅逐して、許多の議論を累ね、且廣く論及する所ありたり、然りと雖、實は吾人、且らく論議するを歇め、一たび之を沈思默想する時は、光明は吾人を距ると遠からざる也。蓋し吾人の要する所のものは、奇詭巧妙なる議論に非ず、又吾人の疑義を融解せんが爲めに、古代の記録中より拾集採擇せられたる、外部の證據にも非ず、却つて、彼れの生涯其れ自身、已に一の宏壯なる奇跡たる、耶穌に依て、吾人の中に煥發せられたる、——新感覺——言語の與ふる者より一層深く證據の與ふる者よりは一層直接なる——なりとす。又彼れの奇跡其物は、吾人の感覺に憑て、吾人の裏に證明せられ、且其内部的證據の爲めに、一層信仰を鞏ふせらるるが如き、彼れの事業と、彼れの爲人との間に、光榮ある一致の在るあるを、覺得する也とす。然り斯の内部的證據に依てこそ、吾人は彼の爲めに、萬事——今あり、及び後あらん生命までも——を賭するを得る也。若夫れ奇跡にあれ、啓示にあれ、耶穌の人間以上たる品性の止に立つ能はざるものは、是れ愈々失墜するも可也。若し彼れの品性にして、總ての真理を包

斯の如き
人物の實
てを不實

有し、其うちに、之を集中すると莫からん乎、一の真理なしとするも可也。若し又、信仰すべき價值ある者、彼れの中に發見せらるゝとなからん乎、吾人は甘んじて、彼れ無くして生死せんとす。夫れ然り、然りと雖も、斯の神より流出し來れる、至高至大の光明の前には、闇夜をして益々悲愁慘憺たらしめたる、幽玄なな問題、暗黒なる妄想、及び難解の疑義は倏然消滅して跡なからんとす。夫れ光に命じて暗中より照り出さしめたる神は、吾人をして耶穌基督の面に在る神の榮光を知るの光を顯はさしめんが爲めに、吾人の心を照し給へり。是れ實に基督敎が過去の時代に於て幾多の懷疑及偽學の侵襲に打勝ちたる所以なり、又來らんとする時代に於ても、亦然らんとす所以のもの也。夫れ如何に太陽に向て抗論するも、天界より之を驅逐する能はず、いかなる管見の懷疑論者も、其仰視するを嫌忌せる光明を、除去する能はず、反つて自ら其光輝に依て、眩暈するとあらん耳。然れども眞乎神を慕望する所の者は、恒に其眼眸を其處に聚注し、道理の解し得ると否とに係はらず、將たいかなる難明のとありと雖も方に之を凝視して、而して信仰せんとす。

然れども吾人が今斯の如き大問題を去らんとするに方り、尙ほ更に此の榮光ある降生の、重大影響なるに留意し、且つ之が爲めに懽欣祝慶の意を致さしめよ。夫れ斯一大完全なる人物は世に來れり、而して其中に生活したり、かくて彼れの神の如き様態と、事業と善行とを以て、渾

て善行の儀型を示し、都て義務及愛徳の誠命を實踐したり、斯くて吾人生涯の状況は彼が吾人の中に陰伏したる眞價を發揮したると、彼が新に吾人の上に加へたる恩寵とに憑て、一段高尙になれり。實に世界其物は一變したり、是れ已に從來の者に非ず、又耶穌の世を去りし以來も、亦従前のものに非ず。大氣は天の馨香を以て香づけられ、天界の意識と他界の感覺とは、颯々乎として吾人の上に磅礴せり、暗黒時代をして來らしめよ、社會をして、後退し、教會をして全地より滅絶せしめよ、不信の徒をして拒否せしめよ、豈嘗其れ耳ならんや。似而非的敬虔をして眞理を掩蔽せしめよ、而も仍は曾て存せざりし一物、自ら不朽の生命を保てる一物は、倏然として爰に存する也。尙ほ吾人の信仰は憾憾せざる也。基督と彼れの萬物を活しつゝある大生命は、物界に於る一定の諸原素の如く、終古渝らざして存在し、竟に世の終りに抵らんす。蓋し基督教特殊の榮光は、眞善なる教義の呈供に非ずして、完全なる品性(人物)の呈供に在り、而して完全の品性一たび世界に入て事實となり、歴史となる、何を以て之を離隔し、之を驅除し、之を擲蕩するを得んや。耶穌の品性(是れ眞平の福音たる)を世界より除去せんよりは、寧ろ蒼天悉皆の光線を解珍し之を割て其色彩の一を排除するを易しとす。嗟呼汝等人類中の昏瞶失墜したる者よ起て汝の首を翹げよ、善性を有する者は汝と偕に在り、純潔なる上界より出來れる心清き者は、汝の囹圄を訪ひ、汝と俱に歩まんす。汝誰たるを識り、明確に彼が爲人を解

脱せんと吾人に要する乎、吾人恐くは之を爲す能はざるべし、然れども第だ彼は吾人の中のものに非ざる者——自然界以外、且以上より來れる、或る神妙不思議なるその名は絶奇と云へる者——たるを知ると、既に足りぬべし、又罪は未だ曾て彼が神聖なる性徳に觸感したることなく、而も彼は吾人の友たりと云ふと又以て充分なるべし。實に彼に由て世界は新なる希望の曙光を得たり、——夫れ聖者の世に來れるは世を潔めんが爲めより外ならず、おと人よ、目を擧げて世の罪を負ふ神の羔を觀よ。觀よ、光明は已に來れり、平和は已に地の上に成れり、而して中間の間隔は今や排除せられたり。——率吾人をして起て進み入らしめよ。

第十一章

基督教々義の高潮標

尤も有力なる證據は、知らずして己に保有したる者な、發見するに在り

如斯證據の主もな

夫れ如何なる論證と雖も、曾て久しく討索したる後、忽然、之が實は問題其物の中に含有し居りたる（先には心附かざりしが）を發見したる程、有力にして、且吾人に満足と與ふる者莫し。噲へば、爰に一の證書を呈出して、久しき間、我共和政府の一政廳に、請求する所有りたる者ありとせよ。而して政廳は、未だ曾て如斯證書を與へたと無く、是れ全く偽造ならざる可からざるの理由を以て、其支辨を抗拒したりとせよ。此時に於て、被告唯一の困難は、確實なる證據を呈出して、敵手を屈伏せしむるに在り。然るに、其畫策到底成功するの見込なく、竟に其訴訟敗北に歸せんとするに當り、偶然にも、彼れが該證書を捧持して、之を眺視するに際し、一片の光線其上に注射し來り、彼れは紙上に在る一特徴の微映を見出したりとせよ。而して彼れ若惶、一層光明の中に、之を取り出して、熟視したるに、看よ、政廳の記標にはあらで、他の製紙場の名、そこに銘刻しありたるを、發見したりとせよ。是れ充分の證據也、最早何物をも求むるに及ばず、——此一證、直ちに原告を犯人となし、犯人相應の刑に附するに足る。斯の如く、基督教々義には、吾人が之を認認すると否とに拘はらず、凡そ之を俟望する者には、

るものは
舊文と豐
なる二經
論の元來
必要とし
て提出せ
られたる
に在り

恒に其神より出たる、超自然的宗教たるの、不可駁的證據たる、或る神性的の高潮標の在るあるを以て、吾人は今茲に之を論せんと欲す。而して吾人は先づ其一例、否主なる例證として、基督教組織の、一大包括的區別を舉んとす。是れ即ち、夫の心靈教育に於て、必然の需要として假定せられたる、二大經論也とす。此假定、即ち假定せられたる必要は、大抵新約書の毎頁に見現し、また再規する所也。而して其二大經論なる者は、他なし、「二個の契約」也。「罪を定むる法」と、「義とする法」の二法也。又た「律法」と、「奴隸と自由」。「殺す所の儀文」と、「活す所の靈」也。將又「何事をも完ふせざる律法」と、「完全の結紐たる愛」と也。

吾人は已に、心靈教育に關する、新二大經論に就て論ずる所あり(第四章)、且つ之が第一段(經論)を經過して、第二段に到達するまでは、到底死れ難き缺乏的狀態あるを、顯示したりき。然れども吾人が爰に本旨を再論するは、之に異り、一に基督教、即ち基督教福音が、其一旦明瞭に開陳せらるゝや、之は儼ち自明の眞理として享受せられ、且凡そ思慮ある者には、半乎たる確信とならんとする程、爾く較明なる眞理を、有力に且慎重に認論するの、著しき効益を顯明せんと欲する也。此點に於ては、基督教は全く獨特の榮譽を有す、則ち徳性の修練に關して、尤も深遠に、且尤も根本的なる方法を發揮するに於て、又預めその模法方の必要なる所以を洞

察し、一大重積的經驗を施設して、慎重に之が必要に應當したるに於て、獨特の光榮を荷ふ。この事實に關しては、總て人なる哲學者は、遙か後方に置若たらずんばならず、何となれば、基督教の聖書は、この二契約を主張するに於て、爾く明白に、完全に進取的に、且つ其關係的作用、及効力をも啓彰し、是等の教義を呈出するに、自ら其真理たるを確保して、最も大膽なるに拘はらず、世の哲學者輩は、未だ斯問題に、一顧の注意さへも、拂はざるが如く見ゆれば也。否、基督教の下に教育せられたる者すらも、儀文と雖、律法と恩恵、罪を定むる法と義とせらるゝ法等の、種々なる言ひ顯はしを以て、意味なき暗音、若くは單だ天啓中の敬虔なる奮闘に過ぎずと、思惟したるが如し。

一たび其
必要なる
所以を思
考する時
は、其必
要は作ら
ずなり

然れども、一度前者の必要を感得するときは、又後者の必要なるとも、如何に賭易きとなるぞや。夫れ哲學者は、未だ曾て一人も、如此思想を抱持したる者あらずと雖も、一度前者の關鍵を得たる以上は、幾許か後者の真理を認認するは、唯恐しく思慮ある者の、容易に能くし得べき所也とす。試に思へ、若し(一)心靈中に、一の道徳的條規なる者あるを要すとせば、之は内なる良心に依て告知せらるゝと、將た外なる天啓に由るとを問はず、先づ責任を負はしむる、律法なるものなかる可からず。又(二)純乎たる律法は、何物をも全ふする者に非るとも、亦等しく明瞭なりとす、何となれば、不順の經驗は必ず來るべく、又道徳に聯伴せる賞罰の念は、卒

に人をして道徳を倦厭して、之を投棄せんと欲する、重荷の如く、感ぜしむれば也、且之は自由を生出するの動力にはあらず、却て之は利害に訴ふるを以て、自由を拘束するの傾向あれば也。然れども(三)律法なる者は、心靈修養の工夫に於て、必要缺くべからざる初歩たるは、又均しく明白なりとす。蓋し之は、人をして平安の存する所を感得せしめ、又之は、罪を知るの知識(——其何物たるか、如何なる結果を生ずるか、如何なる應報を受くべき平等の知識——)と與へ、且つ其發作する所の驅動力、無力と、死とを曉らしめて、救主の必要を感得せしむれば也。而して此見に依れば、抽象的律法の條規なる者は、(四)假令致命其物は完全なりと雖も、本來不充分の者なるが如し、是故に或る人物崇敬、即ち神性的人物(——其品性と生涯は愛に充滿して、悉皆の律法を包有すと假定せられたる——)を信仰するに非んば、竟に人をして、眞の大精神(愛神愛人の)に達せしめ、永遠なる天愛の自由に、確立せしむると能はざる也。

諸今吾人をして、是等及び一層勝れたる者が、いかに明晰に、基督教經典の中に、表白せられたるかを考察せしめよ。之を光明の中に掲げ出して、神性的高潮標、即ち神の銘刻したる印證をして、顯明ならしめよ。抑、是等の福音書及書簡、——哲學に依て裝飾せられず、又文學に依て粉粧せらるゝとなく、而も古今の諸哲學に超越し、人生の大問題に關して、曾て人の思想

に上りたる、一切のものに勝れる、舊典の眞理を開發したる、福音書及書簡は、何處より來りし乎。夫れ是等のものは、毫も發見の誇氣を帶るとなく、最も簡明の樣態を以て、神は吾人の爲めに、儀文と靈、律法と恩恵なる、二道を備へ給ひしとを誦れり。而して其第一の者に關しては、是は神の經綸に在て、初頭に於る根本的事實にして、其一點一畫も決して消滅せず、完全の律法にして、渾て完全の基礎、即ち正式的理想なるを言へり。然れども、是は素と抽象的にして、權威に由て命令し、勢力に由て強壓するが故に、何事をも完ふせず。是は第だ條練の初歩を倣し、唯その大段を就すの師傅に過ぎざるなり、否是れは不幸にして、諸他の師傅に、遠く及ばざるなり、何となれば、其成就する所のものは、只損失と敗勢にして、得益にあらざれば也。——是は生命に至らん爲めに與へられたりと雖も、却て死に至らしめられたれば也。且夫れ、是は罰を致す者となり、殺す儀文となり、犯罪をして滋々多からしむる機會となれり。加之、是は肉に由て弱きが故に、偶々羈鞫となるの外、何事をも全ふしたるとなく、反つて應報的作用の淵壘したるに依て、全造物をして、相償に懊惱呻吟するに抵らしめたり。而して吾人は、是愈々元始より領會せられたるを見る、何となれば、若し始めより人を活し得る律法を賜はりしならんには、然らば義とせらるゝとは、必ず律法に由るべければ也、然れども是れ到底不可能の事たり、而して其不可能たるは、太初より承認せられたる也。蓋し律法的治政は、終

局の功を收めんために立てられたるに非ず、但だ人類條練の初段として、罪科及心靈の欠乏を感得せしめ、罪と、其著しき惡逆たると、及び之が結果たる、不可避的羈鞫の狀態を、確認せしめんが爲めに、設けられたる也。於是手、受身したる救主の躬に於て、世の首めより他者(律法)を補充し、之に代らんが爲みに指定せられたる、新にして且一層高尚なる治政は、顯はれたり。されば今、彼はより善き約束の上に立てられたる、より善き契約の仲保者たるが故に、更に、愈れる職を得たり。蓋し、若し初めの契約にして、虧くる所なからんには、別に後の契約を要するの理由なかるべし。然れば今、吾人の義とせらるゝは、行に由るに非ず、何となれば、吾人は到底斯方法に基きて、完全に達するの望なければ也、是れ唯信仰に由るとなり。夫れいま律法より外に、神の人を義とし給ふと、昭かになれり、則ち神の凡て耶穌基督を信する者に賜ふ所の信仰の義也。如今、吾人の呼んで徳といふ者は、意志の動作、若くは律法に由れる或行爲に非ず、神の間斷なき活潑々たる鼓吹にして、吾人の中に神的動力となりて、吾人を活しつゝある、吾人生命中の生命たる也。是に於て、吾人は今自由となれり、吾人は基督其物を懷抱し、崇敬以て吾人の心を彼に致すに由て、直ちに律法を恢復し、其羈鞫より濟はるゝを得たり。吾人が彼れの賦命を守るは、不得已に非ず、衷心彼れの人物に敬服するが故也。斯くて吾人は、渾ての律法を全ふせんとする自由、——即ち愛の自由に入れり。是故に、今や耶

耶穌基督に在る者は、罰せらるゝと莫し、何となれば、活す靈の法は、耶穌基督に由て、罪と死の法より、吾人を釋せばなり、蓋し律法は肉に由て荏弱、その能はざる所を、神は爲し給へり、即ち己れの子を罪の肉の狀となして、罪のために遣はし、其肉に於て罪を罰したる、是れ律法（即ち賦命）の義は、肉に従はで、靈に従ひて行ふ、吾人に成就せんが爲めなり。夫れ稱觀は已に去り、自由の時代は已に來れり。是れ生命を興ふる靈に憑り、是れ義とするの法に倚る。然り而して、若し罪を定むるの法にして、尙ほ榮あらば、况して義とするの法は、更に優りて榮あらざらん耶。

吾人は斯二法を説述するに方り、力めて聖經の語調を用ひたり。而して之は、若し大思想の吾人を打つものあるに非んか、たゞ吾人をして昏睡せしむるに足らん耳、然れども、茲には、人生の道徳的經驗に關する、所有哲理推論をして、殆んど緘小微弱、視るに堪へざらしむる者ある也。

是に於てか、一の奇異なる問題は、起り來らざるを得ず、曰く、抑々此教義は、何處より來りし乎、如何なる學者、いかなる基督教學派が、之を想起したる乎、何故に之は獨り新約書にのみ見はれて、他には見はれざる乎。夫れ、之は首めには、宗教家常套の訛言の如く、奇異なる特殊の形狀を有し、半ば神秘難解の語として、吾人に來れり、——曰く「儀文と靈」、曰く「律

此點に於て、聖經は凡て人智の荏弱なるを露知したる由て吾人新約書の人間より非ざるを知る

法と恩恵、曰く二個の「契約」、二個の「約束」、二個の「法」と——、然れども彌々之を考究察するに從て、彌々其道理の絶大なるを覺へ、竟に唯一の十全眞確なる、實際的哲學たるを、承認せざるを得ざるに至れり。之は粗鬆なる推察に非ず、又第だ僅かに其半ばを發見し得たる、新思想に非ず、之は充分に精鍊せられ、諸要素成く備はり、萬物全完全の作用を做す如く、設計せられたる者也。而も科學若くは定義の力に藉りて、辛ふじて組織せられたるの跡なく、又其超越せる優處を覺知するとなきもの、如し。吾人は再び言はんを、抑々之は何處より來りし乎、是れ實に問題也。而して之に答ふるの道は、唯一ある而已、若夫れ吾人、聖經開示する所の、斯弘大皎明なる教義を、人智の工夫より出たりと信するを得ん乎、吾人は幾倍の容易を以て、プラトンの論語が、（蓋海近傍ノ）の或る蠻民の手に成りたるを、信するを得んとす。然り、賦に之は神の永遠的高潮標を有す、而して是れぞ眞箇の解答也とす。

吾人は今尙ほ進んで、基督教の他の最も昭著なる特點を觀察せんとす、即ち思想の總合と云ふ所の者、殊に諸々の思想が、咸悉く神子受身なる超自然の事實の周圍に、優美なる一致調和を保てるの事實也とす。蓋し受身は、其外形上に於て、已に超自然の事實たるは、否むべからず、而して是れ實に、論者の福音に抵抗する所以の、一大理由なりとす。且夫れ斯の如き神の事業、眞乎に世に設立せられたりとせば、凡て思想及教義の全組織も亦、其周圍に序を成して、

福音の他の有力なる證據は、通例人の看過する所なる、受身の超自然的事實の爾く完全

に、且組織の内に呈出するに在り
迷信的超自然説に
は、如此事實と教義との一致適合あるなし

集注總合すべき善なりといふは、真也とす。否らざれば、吾人は如此大事實を把握して、吾人の利益の爲めに、吾人各個に適用せしむるに、由莫からんとす、——之に關する至當の仲煤的思想、全く無からんとす。

されば、吾人は復、爰に、福音の超越せるとに關して、隱然たる、併しながら有力なる證據を發見するなり。蓋し人間自然の睿智、及道理の推究に由て、斯の如き、思想及教義の適合を形成するは、(吾人は斷じて曰はんとす)、到底爲し得べきとに非ず。夫れ「メラミン」教徒の言ふ所に依れば、彼等の信ずる神「ビシヤー」には、九個の化身(即ち受身)ありといひ、又種々なる異教鬼神説は、幾多の受身に就て、傳説したり。然れども是等自稱超自然的事實の周圍に、之と内裡より一致し、而してそこに生命の根原を有する如き、さる思想教義の、組織發達したると、果して何處に在るや。思ふに、單に一の超自然的事實(例へば受身の如き)を想像するは、甚だ易々たるとなりとす(吾人は爾か承諾するを得べし)、然れども、之を人間の經驗に結合し、之をして實際的のものたらしむる如く、爾く教義及び思想を聯繫して、之に適合せしむるに至ては、人智の決して能はざる所也。是故に、繼し茲に、耶穌基督の受身、即ち「マリヤの子として、彼れの奇跡的生誕ありとせんも、其中心的事實の周圍に、その疎鬆過大なると、その之に整合密着せざるに依て、其虛妄たるを露出せざる如き、思想と教義の組織を發明する

然るに爰に於ては、諸種の點に於て是あるを見る

先づ福音といふ名稱に於て

に至ては、是れ人なる哲學者の業に非ず。况んや之に一の教義を被歸し、該中心的事實をして、實際生活上の一大勢力となし、之を人類の經驗中に編入するに於てや。

然るに是れ愈々基督教を義に於て、尤も容易に且尤も自然の状態に於て、成就したるを見る、而して是れ吾人の今より論及せんと欲する所なり。即ち吾人は一方に於ては、基督教の凡ての要點(即ち思想)は、毫も強て計畫若くは推論したるの迹なくして、反て壯麗なる一致調和を以て、超自然的事實の中に組織せられ、他方に於ては、聊かも理性の品位を傷くことなく、而も罪の無力不能に適する如く、人類の經驗に合するは、是れ明かに聖經の上に在る神の印證の、確然動かす可からざるを、表顯するものなるを論せんと欲す。而して其舉示せんとする所の例證頗る夥多なるを以て、吾人は一々數字を掲げ、項を追て續述せんとす。

一、斯新宗教、即ち神子降生の宗教は、古來福音と稱せられたるが、之は何故に智慧、若くは哲學、或は教説とは謂はれずして、寧ろ福音と謂はれたる乎。夫れ大凡世の教師に由て採用せられたる名稱は、大抵是等のものにして、何人も其説述する所の何たるに拘はらず、喜の音、即ち福音と名けたる者なし。是れ畢竟彼等は單に自然界なる前提、即ち自然の道理の中に已に包含せる所の者を、推度抽出したるに過ぎざれば也。反之基督は世界以外、且其れ以上より世界に入來り、彼れと偕に曾て前存せざりし新前提を挈帶し來りたるが故に、彼は福音、即ち喜の

音として宣傳せられたり。——曰く、「視よ、我れ萬民に關はりたる大なる喜の音を爾等に告ぐ」と。基督も亦自らの事業を爾か思惟したり、——曰く、「爾等徧く世界を廻りて、凡の人に福音を宣傳へよ」と。彼れの使徒等も、亦皆伴しく新なる音信として、此事實を證明したるが如し、——曰く、「神基督に在て世を己れと和がしめ給へり」と。若夫れ基督の事實は、是が別他の世界より、此世界に新に交通を開きたるが故に、單に自然の推斷に由て、福音と呼ばれたりとなすも、吾人の敢て抗論する所にあらず、何となれば、此解釋や、已に是は超自然的使命たりとの事實を暗示すれば也。而して是れは、假令其使命は事實なりとせんも、人間の智慮能く、この特殊の事實に適する如き名稱を附與し得たるの疑なきに非ずとせんも、本論に何の影響を及ぼさざる也。然りとすも、恐くは是れは福音てう名稱よりは、寧ろ或る他の名に由て呼ばれしならん、而して若し人間の中に、殊別の榮光の記標ある、或榮譽ある他の名稱の存するあらば、是は儼ち其名に由て呼ばれしならん。加之、試にそこに全然超自然的事實あるなく、其事業に於る總ての物は、悉く迷信に過ぎずして、皆偏理的解釋に由て解説し得べしと假定せよ、福音なる名稱は、何處より來りたりとする乎。若し果して完く超自然的事實なる者あるなく、又其要求する所の者、眞平に實在するに非んば、誰か福音てう如き特異の名稱を附して、其迷説を歓迎するをせんや。

又救といふ名に於て

二、吾人は又、斯福音の眞意が、救なる語中に表示せられたるを視る。夫れ此事業や、救と稱へられ、受身したる道は、豫め耶穌と命名せられたり、蓋し彼は衆人を罪より救はんとする也。彼は自ら與はれたる者を尋ねて救はん爲めに來れりと宣言し、彼れの世を辭するや、彼れの事業は、救を與ふる神の恩恵として宣傳へられたり。然れども古來人なる教師は、未だ曾て一人も如斯名に依て世に現はれたる者なし。蓋し人なる教師は、常に推究、臆説、哲學、訓蒙、革新策、理想的共和國、及び結社共同等の名に依て世に出で、何人も救と曰ひたる者あるを聞かず。而して是れ一に、彼等は斯世を罪の下に在り、眞箇に墮敗して、之を恢復せんには、神の超自然的干渉を要する程、不自然的狀態なりと思惟せざるに因る。是は獨り基督教の殊に關示する所の點なりとす、而して此を以て、是は救と稱へられたる也。若夫れ「トラト」は、明かに人性の頹廢を認識したり、而して彼れが道德の救護は、之は第だ神の靈通に由てのみ、各箇の心盤中に形成せらるべしと曰ふに在りき。而して吾人は此兩者を相對照して、基督教の是等二要素(墮落と救拯の教理)を完備するに比して、彼は道德の一に救に頼るを思想せざりしを看るに於ては、益々吾人を感動せしむるに足るものある也。畢竟するに、彼は罪の狀態を以て、實際望なきものと思惟せず、却て道德は生來の性情をして、進歩發達せしむるに在りとし、自然以上の勢力に由て、本來の性情より救出するにありとせざりしなり、而して是を以てこれは

救とは謂はれざりし也。

信仰に由
れる救に
於て

三、斯教の教義は又、其教は信仰に由るとなす、而して吾人は此に於て、この經驗の超自然的事實、及人物に基ひするを、愈々深く感得する也。蓋し基督教は、衆徳の原は、信仰に在りとすの點に於て、總ての哲學、及人爲の倫理學と、大逕庭ありとす。而して是は自然界以外より、其うちに、新たに輸入せられたる恩恵たり、又た上なる者の、斯世に降臨したるなるを思惟する時は、寧ろ當然のとなりとす。それ如斯教拯は、自然的事實、及び道理なる、前提の中に存在せず、故に是は科學、若くは論理の産出したる者に非ず。されば是はたゞ信仰せんとを要めて、論議せんとを要めざる也。若夫れ是は道理に依て論證せらるゝものならんには、道理は是が適當の審判官たるべし、然れども是は固と道理に由てのみ、論證すべき者に非ず。是はたゞ罪に壓迫せられ、且其鎖鎖に繋かれたる者の、墨き信任を以て受くべき者たる也。蓋しこれは、心意の直接なる經驗に由てのみ、之を直覺し、以て此新前提の眞なるを發見し、且之を證明するを得るなり。それ斯教拯は信仰に由る、何となれば、是は素と超自然的救拯なれば也。されば斯經驗の効益を受るものは、一に信依者の信仰、即ち此の如き教主及救拯に、眞乎に信任する所の精神ならざる可からず。

然れども此理由の爲めに古來新約書に就て、反て論争の起りたるこそ奇怪なれ。それはは信仰を要求するの故を以て、彼等の礎石となれり。彼等以謂へらく、單に信ずるとに於て、如何なる功績あればこそ、之は救の爲めに必須の要態とはなされしぞと。吾人は答へて曰はんとす、或見に由れば、之は何の功もある無し、而して之は功あるが故に、要求せらるゝに非ずと。それ人醫師に信任するとに於て、何の功あらん、然れども之は彼れの藥を服用するに於て、些少の効なくんばあらず、何となれば、幾何か彼を信任するに非んば、彼等は之を服用すると莫ければ也。基督教の恩恵を受る信仰の効も、亦斯の如く、衷心眞實に、其約束と施恩者に信任するに非んば、何の効果をも生ぜざる也。抑々吾人、心靈の療癒、即ち生命及聖徳の、新たに其中に樹植せられんとを望まば、是は一に、超自然的醫療の効力に、依頼せざる可からず。而して該醫力を信ずるは、則ち其勢力を感得する所以にして、此信仰に由て、首めて福音は救拯を全ふするを得る也。此外別に救の法ある無し。若夫れ基督教は、假令超自然的宗教たりと雖も、信仰に由らず、他の條件に由て、救を呈供するとあらん乎、是れ悖理のとなして、約束の恩恵に何の關する所なき也。蓋し之がこの要態の下に救を約束したるは、其全然完備せるを、自ら證明するものにして、人間の淺薄なる智慮が、之は理性を輕視侮蔑するの酷だしき者として、之を難詰せんとするだけ、之が人間より非ず、一層超絶せる、人間以上の本源より出たると、顯然たりとす。

四、信仰に由て義とせらるゝとは、復基督教福音の他の昭著なる點なりとす。而して是は、二個の要素を結合して包含する者とす、則ち罪人が、信ずるとに由て、彼れ自身の行爲に依て、律法の下に造立したるものに非る義を、彼れの中に與へらるゝと。及び彼れが過去の罪科に依て干犯したる律法を、假令彼れの罪の赦さるゝとわらんも、毫も其威儀を傷ふとなくして賠償する或事物の做されたる是也。

前者、即ち義の與へらるゝとに關しては、其様態は、之が、凡て信ずる者に賜はる、信仰に由れる神の義と言はれたるを想へば、充分明瞭なるべしとす。抑々之は、但だ信ずる者ののみ、與へらるゝ者とす、何となれば、吾人が已に救の條下に説示したる如く、心靈が彼れの義を以て被歸せられ、或は彼れに一致する如く、爾く神の超自然的恩恵に信任し、倚頼するは、一に信仰に由るものなれば也。加之、これ一には、恒に應報的正義を以て刑罰的に罪人を懲戒し、不可避的錯亂及び災禍の中に、彼れを拘繋せる自然の法則は、只だ神の超自然的勢力に由て耳、迴避せらるゝが故に、然か稱道せられたるを、觀察せざる可からず。

而して其後者、即ち價なしに義とせらるゝとの中にも、律法の賠償を含有すといふとは、之はある皮想學者の憶想する如く、痛苦及刑罰の律法的辨償を清濟せんが爲めに、或事物の成されたるが故に非ず、是れ惟だ神は世界の人類を訓練するに、二個の治政（——即ち儀文と靈、律

法と恩恵——）を要するが故に、赦罪即ち一般に價なくして罪の赦を予ふるに方て、先づ前きなる律法治政を廢するとなく、反つて兩者をして相償に並立して世に行はれしめんが爲めに、爾く準備せられざる可からざるに由る也。而して是れたる、基督の從順、剩さへ死に至るまでの從順に由て、成就せられたり。夫れ受身したる道が、身に愛の結紐として之（律法、即ち吾人々類の罪が破壊したる所と同一のもの）を有し、且つ其要求を成就せんが爲めに、彼れの生命を之に致し、十字架の懼るべき痛苦に服したるを視る者は、神が人の罪を赦すを見て、誰か、彼はその律法を棄却したりと言做し、或は思想する者わらんや。吾人已に如斯尊敬に由て、之が大ひにせられ、且崇められたるを看る、さらば、罪は假令價無しに赦さるゝとあり、吾人に逆ふて作用したる刑罰は、縦し等なくして、除去せらるゝとわらんも、曷ぞ其權威の失墜せんとを、是れ恐れん即。

この義とせらるゝといふとに關しては、基督教は、哲學及所有宗教とは、根底より異なれりとは、明白にして、別に究察を要すると莫しとす。彼等は、罪と其懲罰的錯亂の中に、確かに超自然的療醫を要する者あるを認めず、單だ自然の基の上に、或物を加ふること由て、人間を改頁せんと思惟し、別に他に要する所なしとせり。彼等は神の二大經綸の如き思想を有するとなく、又之は、もし神が人の罪を赦すことわらんも律法は世に樹立して、確然動くことなく、

依然として修練懲治の要具として存し得べきの効あるをも、思念すると莫し。若し彼等、罪の赦しに就て曰はん乎、是れ審判的性質を帯る赦罪にあらす。若し又彼等、恐くは罪の赦を買はんが爲めに其愛兒を奉獻するが如き贖罪に就て曰はん乎、これ惟彼等は、神の歡心を獲んと力むる耳に過ぎずして、彼れの裏潰せられたる權威を神聖にせんとするに非る也。彼等は毫も律法てうと思惟せず、殆んど彼等の信ずる神は、之を有することなきが如く思考するが如し。又彼等は、彼等の罪を赦されんには、困難を感ずるが如き、しかく嚴肅なる關係の、彼等の罪と、世の永遠的統治の間に、存するを認識せざる也、彼等の困難を感ずる所の者は、只神の惡感のみ、他に一もあるなし。左れば、彼等は唯彼を満足せしめんが爲めに、充分なる痛苦を彼れに呈し、或は無罪者の流血淋漓たる軀軀を捧げて、彼れが意氣を緩和せんと努むるとある而已。然れども、基督教の眞理は、其道理實かに深遠に、其品性實かに優美なり。是は至聖なる道德的經綸の、第二治政を成遂せんが爲めに、神の降臨と俱に世に入り來り、宛も律法の自然を以て牽めたる如く、是は超自然的恩恵を以て完成したり。一は束縛し、他は自由にし。一は殺し、他は活かしむ。然れども此兩つの者は、終始相提掣して作用せる如く、然く調諧せられたり。嗚呼哲學者、及び人なる教師にして、果して人生の斯大問題に關し、之れと神との關係に就て、其廣袤に於て爾く濶大に、其道理に於て爾く深遠なる、思想を呈出したる者ある乎。

地上に神の國を建設するに於て

五、且夫れ、地上に神の國を建立せんとするとは、基督教の他の大特點なりとす。是は「神の國」或は「天國」と稱せられたり。蓋し衆多の意思を蒐め、意に全人類を擧て、一に合せしむる大活力は、自然界のものにあらずして、王なる基督の身に於て、天より降臨したれば也。而して之を表顯せんが爲めに、世の別種なる政治的組織が（たとひこれは政治上のみに非ずと雖も）、形容辭として使用せられたるは、太だ適當のとなりとす。是れ宛も、吾人は屢々、假設的共和政治、或は、理想上の民政國と云ふが如し。眞理は伴しく一大帝國として思想せられたる也。夫れ吾人は、自然科学に於て、動物的、植物的、金屬的なる三王國あるを知る、然れども、吾人は爰に、未だ曾て他に思料せられざりし、神の國と呼ばれたる、心靈上の超自然的王國、——眞乎の王に依て組織せられ、而して彼れの神性的人物の中に集中したる、眞理と愛の力に依て統轄せられ、且擴張せらるゝ、眞乎の活る政度を有す。且つそれ、受身したる神の道として、世に來れる耶穌は、新なる神力の降臨として、新勢力を以て、人心中に入來れり。是故に、新組織、即ち人心中に於る神の國は、——（義と和と聖靈に於る喜樂なる）——、勿論彼を以て素まれり。然らば、斯神の國を建設し、興はれたる人間の中に、神の統治を布き、遂に地上の萬民萬族を擧て、受膏の王なる基督の下に、平和と眞理と、普及濶大なる組織の中に集合せしむるは、是れ基督教の大主眼なりとす。

而して此事實や、實に神子受身よりして發す、是故に耶穌の將に顯はれんとするや、天國は寔
 とに近づきたる也。蓋し諸他の宗教、祭司及預言者、或は神の化身者は、決して如此觀念を提
 供したる者なし。是れ獨り基督教特殊の思想、及事實たる也。然り而して、其提供や甚だ大膽
 に、狂漢に非れば、人の到底主張する能はざる程、誇大なるに拘はらず、基督——而もナザレ
 の工人なる基督は、之を企畫したり。加之ならず、之を統率し、其國をして善良ならしめんと
 宣言したり。然り、彼れ若し之を善良ならしむること能はずんば、彼れが受身の事實も、亦容
 易に承認すべからざる也。それ受身的顯現と、神の王國と、斯の兩つの者は、爾く緊密の關係
 を有する也。

聖靈と其
 事業が、
 基督と彼
 れの事業
 に關係す
 る點に於て

六、聖靈の教理は又、福音の超自然的事實と、深き一致を有する、基督教の思想なりとす。蓋
 し受身したる基督が、超自然的具體、即ち一地方に於る顯現なる如く、聖靈は、由て以て基督
 が世に永續せられ、全地に普及せられ、且つ各處に於て各人に密邇せらるゝ、超自然の内住的
 勢力たる也。而して、彼れの勢力の超自然的性質を有するに關して、誤謬なからん爲めに、
 彼は凡そ人力に超越せる外見的休徵、及び發言、或は醫療の力に由て、證明せられたり。此點
 に關して、吾人は、夫の外貌に於ては殆んど同一なりと雖も、然れども其精神に於て、神は單
 だ自然界の上に壓く統治すといふの外、毫も神力の作用を假定せざる東洋諸聖賢の思想と、混

同すべからざる也。「彼等思惟すらく、神は萬物を通して貫申せりと」。而して彼等は、此見に依
 て、彼を呼んで、「神の靈」と曰へり。斯くてアフリカス(紀元第二世紀の人に於て、亞弗利
 加に生れ、聖典に教育を受く)は曰へ
 り、「何人も全然神の佑助、即ち感化を要せずして、單り自己の性質を以て満足し得る程、爾く
 勢力の超越し、且偉大なる者あらず」と。フロポナスは、吾人に必要なる所の者を感覺して、
 實は神靈といふべき所を、單に攝理と言へり、曰く「吾人の心靈は、異常即ち不自然の狀態に
 陥りたりと雖も、然れども、攝理は仍ほ之を遺れず、反つて之を恢復せんが爲めに、絶へず之
 に留意す」と。セチカに至ては、神靈の吾人の中に動作せるを確認したるが如し、然れども斯
 靈や、第だ僅かに、自然的應報に従事するもののみ、彼れの言に曰く、「聖き神靈は、吾人が惡
 行の觀察者、又吾人が善行の擁護者として、吾人の中に住めり、而して吾人が彼を遇する如く、
 彼は吾人を遇す」と。是等の思想中、一も眞平に超自然的宗教の本義に適したる者ある無し。
 抑々是は、墮落したる者の上に動作して、自然の劣狀より援出さんとし、又援出すに充分の勢
 力あり、又自然法則の應報的作用より彼を救解し、斯くて彼と偕に住み、彼を支障し、彼を嚮
 導し、彼を釋て自由を獲せしめ、且つ彼れの意識の中に神の啓示として保證する所ある、神靈
 を要求する也。

斯の如く考察し來れば、聖靈は、基督彼れ自身の、奇跡的降臨に關して、深切の必要あるなり、

夫れ基督と聖靈とは、相対的勢力にして、兩者相須て、始めて完備なる全軀を成すなり。而して如斯種類の組織は、未だいかなる人も、如何なる小説も、いかなる出来事も、決して發明する能はざる所也。蓋し人間更生の如き超自然的作用の企圖せらるゝ時は、道德的及び有効的勢力なる二者を兼有するば、固より必要缺くべからざるとに屬す。一は錯亂したる心理に於る、理會力の前に働き、他は其裏面に働き。一は心靈が形成せられんとするの塑像となり、模倣せられんとする敬虔の儀型たらんが爲め、義と、愛と、義を以て裝はれたる神性的物轉たり。他は心靈の中に働き、之を導ひて善事を志望し、且實行せしめ、而して其中なる應報的作用の潮流を捲き回へし、之を啓發して、夫の榮光ある模範の勢力を感覺せしめ、且つ恒に之を引誘して、彼れに向はしめ、また彼れより出る生命を享受せしむる有効的恩恵たり。若し夫れ先なる者、吾人が心意の前に存在するとなからん乎、有効的勢力に依て、吾人の中に做されたる者は、たゞ一の修繕の工に過ぎず、別言すれば、宛も吾人の健康が、或る不可議の原因に由て、回復せられたる時の如く、其方法の少しも知る能はざる或事物の行はれたるに過ぎず。然らば、變化は惟だ物質的にして、毫も品性の變化に非ると、恰も身軀中の分泌が變化したるに異ならず。將又後なる者、(一)即ち有効的作用——、存在するとなからん乎、基督、及彼れの死なる、神性的優美の模範は、吾人の前に顯然たりと雖も、吾人が彼を理會するの能は顯然とし、彼を曉

覺するの力は漠然とし、且つ吾人は罪の羈絆の下に緊縛せらるゝが故に、その吾人の目前に呈供せられたる善を嘉納するの力に至て微弱に、之を愛好するの情は至て冷淡に、假令驅勉以て之に模倣せんとを努むるも、宛も鳥の一旦其兩翼を失ふや、最早升騰する能はざるが如く、到底無効ならんとす。

基督と聖靈との深密なる關係、概ね斯の如く、一なくんば他は無効なる者なり。然らば受身、即ち基督の人となりて顯現したるの事實、存在したりとせんも、その顯現をして有効ならしむる、此の昭著なる對契は、是れ誰が發明に懸る乎。別言すれば誰が「ヘマテユステ」の日を設計したる乎。是れ果して人なりし乎。たゞ通常信仰の數人に由て作されし乎。將た迷信時代の無智なる空談者に由て、案出せられし乎。否々歴史は明かに言へり、基督は自ら直接の約束に依て、聖靈を與へたりと。又聖靈降臨して、全世界到る處に、彼れの模範を携へ來て、そこに之を各人の胸裡に顯彰せんが爲めに、人目より避隱するは、彼れに取て却て利益たるを告白したりと。然り、神と神の永遠の子なる基督に非ずして、誰か此思想を生出すを得ん耶。

七、福音に説示せられたる心靈更生の教義は、又是れ、能く吾人々類の状態に適し、之が超自然的經綸たるの事業を、説明する者なり。夫れ心靈更生の斯真理は、先づ人性中より、聖善なる生涯を營むべき、原種的生命の喪はれたるを假定し、隨て人間は、其性質中に、眞乎に善を

有するをなく、決して自ら善の精神を發生し、或は植樹する能はざるを假想す。若夫れ、彼は倫理學の基礎、若くは世間普通の意義（世の通例道德の則となす所のもの）に従て、人の善と呼做す如き、許多の善事を行ふを得ん、而して彼れが動作の渾て温雅なるに由て、充分に稱讃せらるゝを得ん。然れども是等温雅なるものは、素と瓊末の徳を累積したるものにして、單だ故意の作用より出で、善の原種生命より出たる者に非ず。時としては基督教の教師すらも、稍々俗心に流れたる者は、斯種の徳を喜び、諸方より蒐集し來りたる微分子に由て、彼等の品性を形造せんとする者無きに非ず。彼等は謂へらく、某の行爲は善也、某の行爲は惡也、——善行は増長すべく、惡行は減縮すべしと。畢竟彼等は、其列舉せる特殊行爲の後面に、根本的缺乏あるを看破する能はず、隨て精神の根本的變化の必要をも、感覺せざる也。彼等以爲へらく、品性を形成するものは、遂行したる行爲にして精神に非ず、又品性が行爲に影響するは、之が闕如したる故に非ずと。彼等の福音は、寧ろ異教の哲學よりも淺薄なりと言ふべし。夫の眼藏克く人性の根基にまで徹底せるセチカは曰へり、「總ての罪は、總ての人の中に在り、唯各人に見現せざる耳、又一罪を有する者は、總ての罪を有す、吾人は言ふ、總ての人は構節ならず、貪慾にして、奢侈を好み、且惡意ありと、——然れども是等の罪が、總ての人に見現せりといふに非ず、第だ總ての人は、是等の事を行ふとあるべく、否已に潜伏せりと曰ふ也」と。

是れ實に道理に合ふの言といふべし、何となれば、何物も正當なる精神より行はるゝに非んば、其行はるゝ所の者は、何物も正當ならずといふは、理の當然なればなり。蓋し是れ、正當なる行爲の種子、吾人の中に存する莫ければ也。若夫れ操行は、一の原種生命なしと雖も、吾人の意志に由て、保續するを得ん、——之が一の趣味を感覺するに至るまで、爾く感歎に、且嚴肅に、保續するとも得ん。然れども記せよ、趣味は決して鼓吹にあらず、而して人の唯一眞平の道德なる者は、一に上より、神の自由の鼓吹を受けて、行ふ所のものたる也。それ神より離れたる者は、假令其外觀は美なりと雖も、是唯怪物にして、眞箇の人非ず、而して是は罪の結果たる也。且つ夫れ、罪は人をして、神の生命より離脱せしめたり、而して彼れ已に罪の下に在り、是を以て彼れ最早神を知覺する（——彼れ若し正當の状態に在らんには、然りし如く、又然かあらざるべからざる如く——）能はざる也。是故に彼れ此意識を亡ひ、心核は既に死し、永遠の生命と、秩序の原種生命は已に去り、彼は今や、自己を中心とし、自己に向て下降し、沈淪するに到れり。而して彼れ若し、自らを眞の自由と、聖徳の原種生命の中に、恢復するを得ば、彼れ又容易く、「マルストロム」（路西の西北海中に在りと思惟せ）の中より離脱するを得ん。是故に吾人の更生すると、——血脈に由るに非ず、情慾に由るに非ず、人の意に由るに非ず、唯神に由て更生するとは、吾人が救拯に必須なる要態として宣示せられたり。而して斯大變化

は、是れ則ち、渾て眞箇天徳の發端たり、また泉源たり、蓋しこれは、心靈中に於る、神の啓示なれば也。夫れ今や、心靈は再び神を知覺するに至れり、今や、これは聖靈に導かれて、滾々たる自由の中に、神と偕に歩むに到れり。而して勿論是等總てのものは、當該者の同意を要す、否恐くは神の啓示を享んが爲めに、自ら奮勵苦闘する所無かる可からざるべく、又彼は、可及丈、神愛に密通せんがために、己れを棄て、神意に服従すると莫かるべからず。然り而して、是は數個の要件を含有する也、——即ち、萬障は除却せざる可からず、私心は捨てざる可からず、且つ衷心より萬事を基督に委託し、柔順、一意、謙遜、以て彼れに信頼せざるべからず。然りと雖も、是等のもの其れ自身は、決して更生に非ず、是は密だ神より出づ、別言すれば、是實に心靈が神に歸る——否寧ろ復歸するに由る也。若夫れ言を換へて、心靈の愛の變化と曰ふも可也、何となれば、心靈の愛なるものは、神と彼れの愛の、其信仰に入來るに由て、變化するものなればなり、且愛は神より出で、凡そ愛ある者は、神に由て生れ、又神を禱るものなれば也。今や舊きは滅く去て、萬物は新たになれり。是れ蓋し、神は心裡に顯現して、百行の生命、及び一切經驗の意識を、一變したるに憑る。而して斯の新啓示が、超自然的にして、神子受身なる中心的重大事實と、並立して發生し來るや、言を俟たずして昭かなり、且夫れ是れが罪人の神の國に入るの、唯一の門戸たるは炳乎として疑ふ可からず。然り——人若し新に生

攝理に關する教義に於て

れずば、神の國を見るに能はず。

八、攝理に關する基督教の教義は、復た、人間救拯に於る超自然的動作の事實と符合す。是は毛頭疑惑する所なく、大膽に超自然的攝理あると、殊に世界其物さへも、之に由て基督教の利益の爲めに、統宰せらるゝことを主張す。而して此思想や、余が次第及後章に於て、論述せんとする所なるを以て、此所には詳論するを要せざるべし。但だ吾人は、今吾人が呼んで基督教と曰へる斯小説、斯怪異なる迷信、斯奇跡の空談が、敢て世界の統治は、是れが利益の爲めなると(宛も全然是と一致合夥するもの、如く)を要求すると、加之、歴史も亦、吾人の發見する如く、其要求を檢覈し、之を擔保するの、顯著なる事實に、注意を惹くを以て、足れりと思ふし。

九、吾人は基督教々義の他の特點として、基督の受身的顯現に依て輸入せられたる經綸の超自然的觀念と、不思議にも、驚くべく符合せる尙一つを舉示せんと欲す、則ち神の三位一體たると是也。余は特に、不思議にも、驚くべく符合したりといふ、何となれば、人間は如何に其自然の智慧を發揮すと雖も、其智や、福音の新事實に適應せしめんが爲めに、爾く神を思惟する能はざれば也。然れども、是れ眞箇に、吾人が福音の中に於て發見する所也。然耳ならず、吾人熱々斯の事實を考察するに、容易く之が實際の通理を曉り、之が福音に須要なる用務を致す

三位一體の神聖なる秘義に於て

を見るなり、別言すれば、神が吾人の爲めに創設したる、自然的及恩惠的な二様の要態の下に、吾人と神との實際的關係を整理するに於て、必要缺くべからざるを視る也。

吾人は今ここに、此大問題を評論するの追なし、第だ舊約全書は、三一教理の原形を含有する者にして、「フラトール」の「アレキサンドリア」及び基督教の三一教理は、是等原形に由て推考したるか、或は之より開發したる者なりと云ふを以て、足れりとすべし。夫れ舊約全書は、フラトールの著書より前に、——數百年の前に存在したるは、何人も拒否する能はざる所也。蓋し東洋諸國は、是等の舊紀（舊約全書を指す）より傳説を受けたるを、疑なからず、而して彼れも、曾て其れ等の地方に旅行したるとあり、且自ら、「異教人の傳説より、引用したると多しと、告白したり。是故に、基督が「マテスマ」の式に於て命定したる如き、基督教三一の教理は、元と自然的理性の産物にして、フラトールの接神論より藉來りたる者なりとは、全く無根の妄説也とす。三一教理は、曾て純乎たる人間の思想に依て、推考せられたるとなく、又自然的理性より、生出せられたると莫し。夫れ理性は、反て恒に致一を要求す、三一の思想は若し存すとせば、是れ超自然的啓示の進歩より來りたるものならざるべからず。果然、基督教三一の教理は、歴史的開發の事實として來れり、則ち首めには、舊約に於て、父なる全能の造物主、エホバの使即ち神の道、及び聖靈として。次に新約に於る、父、子、聖靈として顯はれた

り、而して是は、超自然的救拯の用務を充さんが爲めに必要として、超自然的作用に由て、啓示せられたる思想也とす。

若夫れ吾人に知られたる經綸、即ち神の方法、唯一個にてあらん乎、——即ち自然界而已にてあらん乎、吾人は、全能者、或は造物主、其他神の獨一なるとに合致して、名けられたるもの外、神に就て何の觀念を要すると無かるべし。然れども、吾人は一旦懲罰的錯亂の状態に陥り、只超自然的救拯に由て耳、濟はるゝを得るの有様に在るが故に、吾人が神に對するは、二個の經綸に由らざる可からず、而して又、思想の新機關あるを要す。試に思へ、吾人若し唯神てう一名辭の外、何も有するとなからん乎、吾人は、神が神に交渉したり、或は、神の恩惠の力は、神の自然の力より、吾人を援へりと言はざるべからず。若夫れ吾人が確然豫期する如く、其事業や、受身の事實を包含せんとせん乎、然らば是れ、神が神を世に遣はしたりとせざる可からず。若又、これは、心理なる革新的、啓示能力をも包含せんとせん乎、是れ則ち、吾人は、神を吾人に與へ、又吾人の上に懲罰的羈絆を自荷したる、神の應報的作用を撤回せんことを、神に哀請せんが爲めに、神に詣る者也とせざる可からず。斯の如きは、吾人々類の救拯の爲めに、供へられたる實際的方法としては、餘り拙劣に、且混雜したる者なりと曰はざるを得ず。約言すれば、極端なる偏理的一神論は、恩惠の事業、即ち超自然的救拯のために、一の適當なる機關をも呈

出せざる也。而して此缺乏や、基督教三一の教義に於て、美はしく補充されたり。視よ、吾人は第一に、萬物及萬法則の創造者、及び大原として現はされたる、父なる神を有し。次に、神は自然界に於る諸原因の上に動作して、何を爲し得る乎を、吾人に顯示するの、子と聖靈とを有す。而して一は、其中に受身せんが爲めに、外部より自然界に入來りて之を傲し、他は、子が客觀的に人間の思想に告示したる所のものを、各箇の心靈中に顯彰し、之をして信仰に由て其模範を懷抱することに依て、彼に肖似するに到らしめんが爲めに、主觀的に働きて之を成す也。左れば吾人、子は神より出來り、神の前に彼れ自身を献げ、彼れの許に墜り、彼れの前に仲保し、彼れと偕に統率し、且彼れに受けられ、崇められ、榮へしめられたりとして、子に信任し。又た聖靈を遣らんことを、神と基督に懇願し、彼をして吾人の中に住みて、吾人心靈の健康を恢復し、吾人の罪を除かんが爲めに、正義なる懲罰的潮流を潮洩するの、新生命力たるらしめば、吾人は新なる救拯を全ふし、且其充分なる効果を收むるを得べし。夫れ吾人は、神に對して、思想感情、及信仰の、是等機關を有す、而も吾人が徒らに、詭言空論を逞ふし、心を擾亂して、神は幾許あるや、或は如何にして、一は他を遣はし、他の前に働き、他に吾人を和らがしむることを得るやを、問ふを容さるる也、反つて、神は永遠に獨一無二なるは、確として滅くこと莫し。然れども、吾人の彼れが動作に關する思想は、いかに多様に、又是等數

個の生る「ヘルソナ」——有限なる吾人々間の要用に爾く服従し、罪人たる吾人が救拯の二個の經綸に、爾く美はしく適當したる——に由て、吾人が得る所の交通は、如何に快活に、いかに充分に、奈何に幸福なるぞや。是れが人に由て、彼れが自然の水平の上に、設立せられたる思想なる乎。そこに果して哲學的、接神術的、或は鬼神說的兆候ある乎。以上吾人は、基督教の重要なる事實、及び卓越せる信條を歴闡すること、九箇條の多きに至れり。而して是等のものは、基督の受身的顯現てう、超自然的宗教の、一大中心事實の周圍に、完全なる一致と、秩序ある組織を以て、壯絶美絶に、凝聚結合するを見る。夫れ彼れの事業は、此理由を以て、至當に——然れども是れ決して人間の推考する能はざる所也——福音と呼ばれたり。又是は、總ての接神術、及鬼神論に異り、超自然的回復力たるの事實に憑り、此見に於て、眞箇に、唯一の救済法たるの故を以て、救ひと稱へられたり。而して又是は、獨り信する者のみ救を約束し、信仰を以て須要缺くべからざる要能とし、此外別に救はるゝの道無しとなせり。是は復た、信する者を義とし、斯くて假なしに、神の義を與ふると雖も、而も律法をして自然的方面に於て、人間修練に必須なる要素として、毫も傷害せらるゝとなくして確立し得る如くに、罪の赦しを供へたり。かくて神の國即ち天國は、地の上に建立せられたり、而して吾人其名に由て了知し得る如く、該新王國の統率權は、自然界よりに非ず、自然以外、

且つ以上より來るを觀る。且夫れ聖靈は、自然の法則中に含有したる者と異り、反つて、其法則の懲罰的作用より拯はんとする、神の動作なりとして奉立せられたり、而して斯教拯は、心靈中生命の革新に在りとせらるゝが故に、これは更生と呼ばれ、且つ奇異にも、再生或は新生命の賦與として、かく名けられたる、此變化あるに非んば、決して天徳の原種生命あるなく、又有る能はずと思惟せられたり。是に於て復た世に索めて眞箇の超自然的真理、即ち人類の救拯、別言すれば、更生したる聖徳を、弘布増進せんが爲めに、世界を支配する所の真理は實現したり。左ればまた、神に就ての如斯思想は、是れ則ち、神は律法及恩恵、自然及超自然なる、二様の方法を以て主宰する者とすが故に、唯一の神は、復た三一の神として認識せられたり。而して諸他の三一思想の如何なるに拘はらず、基督教は少くとも、三一教義を以て、神の施政に於る二様經綸に、徹頭徹尾、實際有効なる者と思惟したる、唯一教義たるの榮光を有す。斯の如く、基督教諸種の名稱、事實、思想、及教義が、咸な一致協合するは、豈欺くべきとに非ずや、而してこれが若し、吾人自身、及び吾人思想の自然行歩に一任せられんには、尤も至難とすべき事物にまで現はるゝは、愈々驚嘆すべき事實にあらざや。然り而して、吾人は仍ほ一層布延して、之を觀察するを得る也。例へば、宣教は斯福音を擴張する方法也、また靈に由て預言せらるゝは、是れ則ち超自然的發言也。且又宣教職は、古來聖靈に由て聖別せられたる

是等の牢
固完全な
る組織的
一致はナ
ホレオン
驚嘆した
る所なり

者として思料せられたり、將又靈の賜物は、獨り超自然的經綸にのみ屬するものにして、聖典は、恩恵及勢力の潔められたる記標たり。或は又た、異象と默示とは、上より來るものにして、而して死者の復活するは、これ自然界より出るに非ず。且夫れ初代の基督教傳播史は、大抵、實に一の奇跡的動作に外ならず。約言すれば、吾人は基督教組織の全經緯——其思想、名稱、職制、事實、及教義等——は、是は世界に於る超自然的運動なりとの、一大思想の上に、集中するを發見する也。そこに一物の、斯經綸の大目的に趨向し、之に合致せざるものあるなく、又倘し、是が唯だ、人智に由て設計せられ、且調訂せられたらんには必然免れざるべき、一の迷想の、之を擾亂したるとある無し。洵と此は夫のナポレオンの矚目して、驚異の念に勝へざりしが如く、「一物は宛も天軍の隊伍の如く、整然として他の一に離げり」。蓋し彼は軍隊の何たるを、能く訓練したる秩序の何たるを熟知せり、然れども、彼は彼れの隊伍さへも、之を形容するに足らざるを感したるもの、如く、一層高尚なる天の秩序を以て、天より出たる斯超自然的信仰の、榮光ある組織的眞理を言顯はしたり。

諸今吾人の前に横はれる問題は是也。——完全なる睿智の、爾く許多なる微標を以て、吾人の中に建設せられたる、斯の世に超越せる超自然的制度は、何處より來りし乎。この論理の達する能はざる、この爾く隔絶せるものに至るまで、組織的一致を有せる、而して總乎たる人間思

斯の本來
奇跡的事
物に於る
諸部の密
着なる内
部的適合

は何處より來りし乎

想には、到底發明する能はざる斯者は、果して何處より來りし乎。蓋し人間の思想は、爾く絶大なる小説に、失墜することさへあらんには、いかで之を組織完成し、而して人類救拯の真理として、之を世に呈供するを能く做し得ん耶。

抑々斯問題に關して、提出し得る假説は、唯三個ある耳。即ち此事業は、全然人より出たる乎。或は一部分人より出たる乎。若くは全然神より出たる者なりと云ふこと也。而して其第一のもの、吾人の已に論述したる所なり、何となれば、若し如斯事業は、人に由て發明せらるゝとあらざれば、况んや之が迷信及卑野なる傳説の、偶然行歩に由て完ふせらるゝの理無ければ也。第二の者、即ち超自然的經綸の、或る要點は事實にして、(——例へば受身の事の如き——)、この事實は、實際的開發の順路を經由して、人智の工夫に依て、大成せられたりと云ふに至ては、吾人の特に論ずるを要せず、何となれば、是れ超自然的根本、及起首の事實、即ち本問題に於る、最要の事件を容認する者なれば也。

唯一の合理的假説は、其主張する如く、總ての組織は、神より出たり

然らば第三假説、——即ち新たに神より出で、福音と呼ばれたる斯の大經綸は、實に超自然的にして、之は斯設計を生ずるに足るべき濶大なる心意に由て予へられたるが故に。知識上完全なる組織ある一致に於て成立するなりとのことのみ、獨り道理上維持するを得る也。之は敢て凡て記録中の者、即ち新約の經典中に顯示せられたる者は、咸盡く歴史的事實、或は無量の

さいふに在り

真理なりと云ふに非ず、(吾人の今假定する所は、然か詳細に亘ることなく、反て他種の議論を容るゝの餘地を遺す者なり——)、之は但だ吾人が已に指示したる如き、昭著なる思想、標章、事實、及教義(——即ち新經綸を構成するの要素たる一切の者——)は、超自然的に世に呈出せられ、且宣傳せられたりと云ふ而已。而して其證據は、已に明示したる所なり、乃ち爾く數多の諸部、及諸標章が、一の中心的事實、及び目的に、一致協合するの事實は、他に之を解釋するの法なく、又他に之を成遂するの道なきに在り。夫れ經驗に由て呈供せられたる命題、或は現象より、理論を構造するは、人智の或は做し得る所ならん、之はその譲り得たる事物に關して、之に密着し、且つ通理上充分の一致ある組織若くは憶説を案出するを得ん、然れども、事實、教義、思想等の、超自然的宇宙を、互に相聯絡せしめ、其百物をして、心靈の革新なる一點に向て湊合せしむるに至ては、自ら別事件なりとす、是故に、吾人は十分の確信を以て主張するを得、是れは人力の企及し得べき所に非ずと。然り神に非ずして誰か、吾人が呼んで福音といへる、此天來的宇宙を組織するを得んや。

第十三章

世界は基督教の利益の爲めに超自然的に支配せらる

夫れ基督教は、基教に由て樹植せられたる、世に於る唯一神性的の制度にして、其特殊の目的は、罪に由て輸入せられ、自然界の應報的法則に縁て瀕死せられたる害悪に對して、療醫的に働くに在り、而して聖靈は復た、假定する所に據れば、來らんとする永々年代に於て、斯の同一革新的事業を繼紹せんが爲めに、世に奉立せられたる神性的の勢力、即ち神の代理者也。然り而して、爾く感動すべき許多の休徴を以て、爾く宏大なる事業に従事したる神は、唯一にして二無きを以て、吾人は直ちに、恒に己れと合致して世界を支配せんとする唯一の神は、又必然基督教の利益の爲めに、之を支配するなるべきを、容易く推度（若し推度するを要すとせば）するを得る也。しかり、基督教は體かに、彼に取て無何有なるか、否らざれば最大重要な者（——彼れの經綸を發表し、彼れの愛を傳達し、且つ萬物を包括せる、廣大無窮の彼れの目的を含有せる——）ならざる可からず。若し果して然らんか、彼が世界を支配するに於て、基督教を遺忘し、或は看過せず、却つて寧ろ基督教の爲めに支配すべきは、別言すれば、基督教其物の超自然的制度たる如く、超自然的規範に従て支配すべきは、固とに明瞭なりとす。

唯一の神は、世界を支配するに於て、其行ふ所、又彼が基督に於て行ひたる所と一致する可からず。

是れ基督自らの大膽に主張したる所也

果然、是は基督自らの要求したる所なり、彼は公然、世界の統治は、彼れの利益の爲め、即ち彼れの事業、及び王國の便益の爲めなるべきを主張して曰く、——「天のうち地の上の凡ての權を我に賜れり」と。彼は又其使徒に由て、彼は天の賜物の施與者たらんが爲めに、「據にする者を據にし、上に昇れり」と宣言せられ、また「神は彼を諸の政治と權威の上に置き、天の處にて己れの右に坐せしめ、又一切のものを彼れの足下に置き、また彼と一切のものの上に首とし、是を教會に賜ひて其首となせり」と宣示せられたり。彼は復た、所賜の教義を教示するに當て、同一の事を假定したり、曰く、若し人誰にても、我名に由て求めば、（別言すれば、若し人我に居り、我が意を行はば）其求むる所、——（即ち嚮導、光明、救援、疾病の平癒、敵に對する捍護、傳道するの勢力、艱難を忍ぶの力、其他彼れが基督教事業超自然的攝理の業たるの進歩に必要な者）——、凡て與へらるべしと。

然り、吾人は神の二様の施政を思惟するに非んば、到底充分に、基督教の攝理の觀念を、領會する能はざる也。即ち第一に、自然界は、自然界として、之が成就し能ふ限りに於て、將來の需要に應答し得る如く、整備せられたるの點に於ては、一の攝理たるに相違なし。然れどもこれ自然より教はんとするの必要に至ては、其需要に應ずる能はざるは、一見して瞭然たりとす。しかり、自然界は、自家法則の懲罰的作用に由て生じたる錯亂を、匡救する能はざる也。

攝理に自然及自然的の二種あり

然り而して、若し神の一切の行爲にして、單に自然界の動作中に含有する者のみにて過んか、神は人間のために、彼が罪ある状態に應へ、彼が悔改の哀叫を聞き、或は彼が信仰上の苦闘に力を添ふる能はざるや、歌として火を賭るが如し。蓋し自然界は、たゞ其懲罰的法制に由て彼を投出し、彼を蹂躪するを得ん、然れども其舊舊殃厄より、彼を救済するに至ては、決して能はざる所也。

斯の攝理なる主意に關しては、古來叩りに、妄愚を逞ふし、淺薄なる空論を作したる者鮮しとせず。斯くて、果して特殊の攝理なるものある乎、將た唯一一般の攝理のみなる乎とは、大に論争せられたる問題也とす。或種の論者は思へらく、神はたゞ彼等が經驗し得たる、僅々の事物にのみ、特殊の意義、即ち意匠を有し、他の事物に於ては然らずと。是は明白に輕浮の信仰にして、神を以て人間の無知に較するものなり。之に反して、他の論者は、自ら一層哲學的なりと誇稱して、たゞ一般の攝理を承認して、特殊のものは、之を拒否したり、然りと雖も、是れ曾迷信に代ふるに、悖理を以てしたる而已。何となれば、特殊の攝理を包含せざる一般の攝理ありといふは、是れ則ち、何れの特殊よりも成立せざる、換言すれば、無一物にて成立せる、一般なる者ありといふに外ならざれば也。左れば、此問題に關する、唯一の明智なる思想は是也。即ち、何れの出來事も、愈々特殊のものなり、何となれば、一物も或特別なる意義、即ち

意匠なくして、神の世界に起り來ると無ければ也、而して一般の攝理の完全なるは、必竟特殊のもの箇々に、完全なるに因るといふと也。

夫れ然り然りと雖も、これさへも、未だ充分に攝理の思想を闡示するに足らず、別に特殊てり見解に聯關して、其中に隱伏せる眞確なる一の眞理ある也。乃ち神は他界に於る事物よりは、吾人及吾人が信仰の苦闘に、一層温情を以て相干涉す、——別言すれば、彼は自然界に於るよりは、超自然的攝理を以て、一層吾人が要求に近逼し、吾人の感覺に同情を表すといふと也。而して是が基督教の攝理、即ち世界に於る攝理的統治に就て有する所の思想なりとす。——是は超自然的なり、是は基督的なり、而して地に於て基督教の爲めに働ける勢力として、恒に依頼し得る所の者也。此思想は果して眞なる乎、これは充分なる證據に依て擔保せらるる乎、是れ余の今より開陳せんと企つる所也。

一、吾人が第一に指摘せんとする所のものは、若し萬事が、純乎たる自然の法制にのみ放任せられ、毫も神の統治なる超自然法に依て、別言すれば、人事の理處に關して、眞乎基督教的攝理に依て支配せらるるとあるに非んば、人類社會、及世の統治、及教會は、決して今日の如き状態を呈すると莫しといふと也とす。

夫れ罪の事實たるや、顯明にして、何人も拒否する能はざる所、而して之が人類世界に、いか

其第一の證據は、若し罪の結果に於て、無限に增長する如く放逐せられたらんに

は、諸物
決して今
日の如き
状況を呈
せざるべ
しと云ふ
と也

なる錯亂を惹起したるかは、吾人の已に前述したる所也、今夫れ假りに、自然界の外、何物も存在するとなく、而して自然界は、遍通的因果法の一經綸、換言すれば、その自箇の有機的法則に由て、其作用を弘張せんとする一の器械なりとせよ。吾人は必然、些の進歩改良を見る能はずして、却て寧ろ、層一層に劣悪に陥り、竟に全く混亂紛錯の修羅場となり了るを見ん耳。將又、人類社會、及人間能力は、一般に蠻野の状態に沈淪し、自然界其物さへも益々衰耗し、益々荒敗し、倍々壞類擾亂を極むるとあらん而已。然り、科學的秩序及法則の状態より推考して、論理上より究察すれば、爾かあるべくして、他に何物も生ずる能はざる筈なりとす。然るに實際は之に反し、吾人は却つて、人類歴史の進歩に關し、これは自然界に於る、劈頭第一の法則なるかの如く想像する程、深く之を確信しつゝあるなり、然り而して、吾人が斯く一般に進歩の事實を信ずるは、正當にして誤謬なきは、疑ふべからず、(何となれば、人類一般に蠻野の状況に下降しつゝありといふは、事實に非ればなり)、然れども、吾人は概ね、其進歩の含示する所なる、一層高尚なる事實、——即ち純乎たる自然界の沈淪下降するの傾向あるに拘はらず、恒にその墮落の状況中より新天地を創建せんとし、又靈性的及社會行歩の、邪惡なる情態を匡救せんとしつゝある、超自然力の羣新的作用あるを、遠觀するの明なきは、太だ異しむべしとす。夫れ超自然的原因、之が動機となるに非んば、斯の如き進歩の存すべからず、又成

るべからざるは、甚だ明瞭なりとす。

然れども、爰に、更に細密に、斯論點を檢證し、更に深遠に、斯問題を查究する方法あるなり。吾人は今眼睛を一轉して、人類歴史の行歩、及び大事實を觀て、そこに、凡て世界の攝理的歴史に含有せるもの(——戦争、條約、移住、革命、迫害、發見及科學的進歩等——)を考察するときは、吾人は直ちに、基督教と世界の攝理的行歩の間に、或る顯著なる一致默契の存するあるを觀て、愕然たらざるを得ず。それ基督教は、其外觀に於て、已に一の超自然國、即ち世に於る神の事業也。これは神の超自然的降臨降生を以て素より、神の超自然的出行昇天を以て關る。又斯くして世に入來り、且つ世より出去りたる神性的過客基督は、躬自ら神性的奇跡たりし也。左れば、彼れの行爲も奇跡にして、彼れが救護も亦眞に然りし也。而して世界に於る(其中に在りと雖も、之に屬せざる)一の運動として、大跡より之を視れば、斯の全動作は、實に神自身に由て創定せられたる、嶄新にして、且つ優越せる、一の施設たる也。然り而して、神は自ら斯の如き事業に従事し、其中に、萬物存在の最大最終の目的を包含すといふを以て、果して眞なりとせば、彼は、吾人が前説したる如く、之を以て主要の眼目として、之を前進せしめんとて、之が爲めに世界を支配し給ふは、甚だ信すべきとならず耶。

派の已に消滅したるに、獨り基督教のみ生存するは何ぞや

を以て萬人に驚嘆せられ、加之、その眞理に基くに非ざれば、到底解釋する能はずとして、容認せらるゝ一の事實あり。則ち基督教は、古來決して滅絶したるとなく、反つて今猶ほ依然として活き、其れのみならず、總ての文學、技藝、通商、社交及、政治上の首位に立て、大勢力を揮ひつゝある事實なりとす。視よヒサゴテス、ソクラテス、プラトーン、ゼノー、アリストートル、セネカ、大凡是等哲學界に於ける大宗師、及大立法家は已に逝けり。「アカデミー」(亞典近の名にしてアカデマス以下プラトーン等の哲學を講究したる所、後變遷して中學の普通名辭なる)及び「ボルチ」(譯して廊といふ、ゼノの共、門弟に教授したる所なり)、暨び大凡世の秀逸なる智者、及雄麗なる大思想家の淵藪たる、是等の學派は已に分散したり。然るに、不學なる一閥人耶穌は、今尙ほ生き、又毫も文學的華美の勝れたる所あるに非ず、たゞ之を傳承したる數人の無學者に由て、尤も簡短に、尤も難駁なる有様に記録せられたる、彼れの單純なる言語も、亦なほ生き、加之ならず、これは最も深き崇敬を以て討究せられ、渾て世の最も豊富優雅なる文學に由て解説せられ、且つ信仰篤き者の祈禱の心靈の爲めに、人生行歩の食となり、かくて斷へず新たなる門徒を蒐めて、一層宏大なる學派を爲らんとし、而して其名稱は「アカデミー」若くは「ボルチ」中に退隱せる者は、到底之を憶想すると能はざらんとす。さて何故に、時間と世界の統治とは、爾く有力に耶穌に協同して、プラトーンの如き大に修養したる思想家には然らざる乎。何故に基督教には爾くして、人間論說の尤も誇耀せる學派には然らざる乎。

新制度が獨り急流の中に屹立するは何ぞや

實に總ての人間教師は、耶穌よりは却つて自然界に密通したり、而して若し世界の統治が、全然自然的ならば、別言すれば自然界の利益の爲めならずば、自然界に附着する者、是れぞ尤も容易く永續し得べき道理に非ずや。自然界の利益の爲めの統治にして、何故に爾く相協同して、眞乎超自然的なる者を奉立し、且つ榮光を冠せしむるをなすや。然耳ならず、吾人の前示したる如く、自然界は、一の應報的に動作せる勢力にして、常に自ら懲罰的作用をなし、其頹敗をして、殆んど無窮ならしめんとし、而して基督教は、此の急流の上に、或は中に確立して、平和の言葉を以て、その狂妄なる暴力を擧げ、之を逆退し、且つその擾亂を、叱咤屏息せしめんとす。果して然らば、斯の新たなる超自然的施政なる者が、自ら總ての點に於て、自然界及其懲罰的錯亂と戦ひ、以て爾く動搖擾亂せる水面の上に、過る千八百年の間、獨り永續の榮譽を擅にせる、唯一制度を建設し得たるは、抑々何ぞや。もしそれ、自然界の外に、一の勢力あるなく、自然界以上の利益を圖る一の統治なるものなくんば、是は然るべからざる筈にして、却て超自然的たるを主張する者は、乍ち消滅して、その甚だ底弱なるを露はすに相違なき也。——恰もナイアガラの大水、絶へず急奔激流して、千丈の瀑布となり、瞬時も底止するにあらず、かくて千々萬年に至り、縱令輕微脆弱の一小舟、いかにその急湍を溯らんとして、帆かくるとあらんも、寸毫も之に逆航する能はざる如く、如何にして、代

々の急流に逆抗して、こゝに一制度を創立するを得んや。然りと雖も、若し爰に一層高大なる攝理ありて、自然が瀑布の爲めに小舟を支配する如くならず、小舟の爲めに瀑布其物を支配するとあらば、然らばその一小舟が、確然固立して、一の制度となるとあらんも、(一) 將に瀑布に陥らんとする中流に在りと雖も——敢て悖理不思議の事といふべからず。

若夫れ諸他の宗教、例へば佛教及回教の如きは、其形状に於て、伴しく超自然的たり、且其一是基督教よりは三分一永く、他の者は其三分二繼續したるは如何と曰ふものあらば、余はただ應へて、後なる者に關しては、一切の勢力は、實は基督教より竊偷せるものにして、然るにも拘はらず、是は既に死の状態に在り。前なる者に關しては、其外見は超自然的たりと雖も、實は一も自然的の墮落無力に抗抵して做したるとなく、却つて是と俱に、その錯亂の中に地歩を占め、而してたゞ流勢に従て下り、漸くにして永續の觀を存する耳にして、これたゞ等しく、無力の別名に過ぎずといふを以て足れりとすべし。而して是れ亦總ての偽宗教に就て眞なりとす、彼等は皆自然界に屬し、自然界が罪に由て造り出せる、夫の無能てふ地獄中の一成分となり。然れども基督教は否らず、これは脱然として其上に卓立し、且つ之に信賴する者を、之と共に提起せんとす。是故に、吾人、基督教が直ちに自然界と争端を開き、之を死の状態と呼び、而して其更生力に依て死と戦はんとし、百千年の後、なほ依然として勝利の榮光を失はざ

第二の證
據は、世
界の諸の
出來事
は、神の
御手、即
ち基督統
治の迹を
示すと云
ふ也

るを視るに於ては、吾人は益々、世界の統治は之と偕に在り、之が利益を圖り、之が成功を扶接しつゝあるを、斷定せざるを得ざる也。若し夫れ、此事實なからん乎、これは決して其地歩を維持すると(一)——何ぞ千八百年といはん、單だ一年すらも——能はざるや明けし。然れども基督教の神は、又世界の神たるが故に、これは今に至るまで、確然樹立し、又永遠にまでも、然からんとす。夫れ基督の王國は搖くことなく、又搖くべからず、(若し純乎たる自然的攝理の外、存するものなしとせば、然るべき如く)而して是れ明白に、天のうち地の上の凡ての權力が、王なる彼れの手に興へられたるが故なりとす。

二、是に於て吾人は、一層廣潤なる、一層有力なる、論證に入らんと欲す、則ち、吾人若し、萬國の歴史を、完全に、且聰明に究察して、其重要なる出來事の、いかに運行せしかを熟知するを得ば、吾人は必然同一事、——則ち世界其物は、基督教、即ち超自然的恩恵、及び耶穌基督の王國の利益の爲めに、支配せらるゝと、一層豁大なる區域に於て、發見せんとすと云ふと是也。蓋し吾人の眼識は、恐くは斯の如き大事に任へざるが故に、到底充分にその究察を盡す能はざるべしと雖も、然れども吾人若し、唯この歴史の總目錄を瞥見し、章を追つて其題旨を閱覽し、爾く許多なる事物が、その中心的大立物なる基督と、彼れの王國に、いかに關係するかを熟視するときは、吾人は爰に、彼れの榮光ある人物に於て、首めて一切の秘義及意味を解

猶太人の
分散

説し、その實際的一致を曉得するの、鍵鑰を獲んとす。

斯くて吾人は基督以前、猶太人が世界の通邑大都に散在して、そこに會堂の禮拜を行ふたるを見る、而して之が爲めに、使徒等の出で、其使命を傳へんとするや、彼等は其講説せんとする場所の用意せられ、聽者の群集し、加之ならず、其心意さへも猶太的標章、及思想に由て、律法なる第一治政を全ふせんとて來りたる、新福音を受けるの、準備せられたるを視る。而して之なくんば、神の經綸に於る、これが眞乎の位地は發見せらるゝとなく、之なくんば、これは凡て歴史上の關係より、又これが爲めに古代より禮典形式の中に合示せられたる、證憑より隔離したる、孤立難解の事件たるは、吾人が上文已に開陳したるが如し。

次に吾人は、今や哲學は、希臘及羅馬人の中に、已にその盡頭にまで達し、漸く其無力の兆候を示しつゝあるを見る。夫れ詭辯家は、其勢力已に地に失墜し、其信仰は雲霧と共に消滅し、其諸宗教に於る信仰さへも、亦同一の非運を免かれざりき。斯くて稍々思想深き人々は、皆太く飢渴を覺へて、將に基督の呈供せんとする食物を、盲索しつゝありし也。

此時に當て、希臘語——是より益々世界民衆の間に、思想及通商の共通的導子たらんとする——は、大に各國民の通語となり、かくて異邦語は、異邦人の爲めに備へられたる恩恵を、授受するの、便利なる媒介となれり。

殆んど消滅せんとする希臘哲學

各地に普通なる希臘語

天下を一統せる羅馬帝國

又視よ、今や羅馬人は天下の主にして、之が其最要分子たる羅馬帝國は、幾んど世界を一統せり。故に基督の十字架に釘せらるゝや、羅馬の代理者が、世界の名を以て宣言したる、世界の公事たりし也（其然かるべかりし筈の如く）。爾のみならず、今や人類の各人種、及各國民の社會は、前古來曾有の狀態に開通せられ、宛然一大帝國を成せり。是故に使徒等が遺命を守りて、遍く全世界に出行くや、全世界到る處に周匝せる、羅馬市民の善良なる大路は、彼等を扶くるに於て、與て力ありし也。

而してなほ愈りて昭著なる事實は、受身したる道の顯現したるは、時方に全地を通じて、平和なりしといふとなりとす。而して殊にその較著なるは、之が詩歌的、或は美妙學的適合に非ずして、一層深淵なる、一層緊切なる、實際的必要の適合たるとなりとす。今夫れ試に思へ、基督をして、若し騒動變亂の時に來らしめば如何、眞理と愛なる、彼れの榮光ある柔和の宣教は、是れ管段々轟々たる瀑布に向て睡ると、毫も異なるなからんとす。夫れ爾く喧鬧躁暴の間に於て、誰か救拯の必要を感覺するを得んや、誰か品性の美に由て吸引せらるゝものあらんや。將た誰か受身したる道を諦視せんが爲めに、十字架に降り行き、そこに彼れの慈悲愴然たる證言を、傾聽する者あらん哉。

諸今是れ等の知れ渡りたる事實を一括して思考せよ、是れ皆顯然人類の歴史が、基督の爲めに

以上諸の

其一般平和の狀態

出來事は
皆な基督
の爲めに
準備せら
れたるを
明示す

準備せられたるものにして、世界は如何に遠大に、基督と彼れの超自然的降生の爲めに、指導せられたるかを顯彰するものに非ずや。然らずんば、是等は各々數百年を隔で、起り來り得べきに、何を以て斯くは一時に湊合し來りたる乎。夫れ人類の歴史は、爾く多年の間、爾く大ひなる製造工に従事し、而して是等一切の大準備已に成るや、爾て彼等は異口同音に、王に向て願ひて言へり、曰く「期は満てり」と。嗚呼是れ何處より來れる乎。而してこれが福音に先ち、之が豫備したる出來事に於て然りし如く、之が宣傳せられたる後に於ても、亦然りとす。而して歴史が基督紀元なる新紀元を奉立したる事實は、まさしく其眞意義と、眞勢力とを明示するもの也。然り、吾人が常に、單に紀元何年と幾月を表記するは、是れ則ち、或る道理に由て、彼れの奇跡的降生の時以來、大ひなる世界の歴史は、耶穌なる謙卑の人物に服従したるを現示するものにあらずして何ぞや。左れば基督紀元なる者は、地質學的に曰へば、人生及社會の邦域に、一の新地層を加へたるもの也。あゝ基督——衆人に不可能的、又不可信的人物、或は幽秘なる神人と崇められたる、福音的大工と呼ばれたる彼れに、大なる世界は、爾く服従し、彼が生誕の年を以て、其歴史を算する乎。實に世界の統治が、基督に待つあり、其利益の爲めに働き、而してこれが十分なる意味に於て、超自然的王國たるは、爾く顯明なるものありとす。

其後の出
來事も亦
然り

新紀元の出來事は、亦同一の事物を示すものと云ふ可し。視よ、吾人は先づ、ポリーマリー（紀元三世紀の人に於て新）及其他福音の反對者が、不思議にも、彼等の神々が順に沈黙し、最早、神託或は醫療を與へざるを、憂慮せるを聞き。次に不信なる猶太教徒は、彼等の聖市が、殘忍暴烈に、或は圍繞せられ、或は殄滅せられたるに由て、失望落膽の淵に投ぜられ、斯くて可及的強力を以て、神は古代に於る特殊の神政的統治、及び區別を廢除して、今や預言者の預言したる如く、普及的宗教の奉立せられたるを教へられたるを見る。且夫れ長久深酷なる迫害の後、コンスタンチンは、竟に改信者の中に數へられ、基督教は從來の神々の上に凱歌を奏するに至り。又北部蠻野の民は、洪水の如くアルプスより傾瀉し來り、萎靡紛錯したる羅馬の開化を蹂躪して、實際其宗教にも打勝ちたるに、彼等は却つて、之が爲めに馴致せられ、且社會的に更新せられ。偽預言者は起て、兵器なる暴威を藉りて、彼れの新福音を擴張せんとしたるに、世は斯の三一の神、及恩恵の缺乏したる宗教の經驗に由て、三一神の恩恵、及福音の價値を教へられ。十字架は幾回となく、失敗と困難とを繰り返して、宛も神の目的は、彼等に印して、基督教は本來平和に由れる勝利の外、何物をも誇るべからずてう基督教的觀念を銘せしめんとするもの、如く。將又航海用羅針盤の發明は、バスコ、ダ、ガマ、及コロンブスの發明を誘起し。印刷術の發明は、文學復興の導火線となり。而してこれは宗教大改革の準備となり、之が爲めにルイテル

出で、而してルーテルの爲めに、神は諸勢力を鍾りて、彼をして法律上の保護を得せしめ、彼を堡壘の中に守り、諸王及諸王國の暴力を併はするも、施す所無からしめたり。且又諸教徒の英國より驅逐せられたるは、新世界の濱に、彼等の自由と光明の福音を移植せしが爲め也。クロムエルが、英國に於て、宗教自由を奉立せしが爲めに、王權を破壊したるは、英國民の法律上、及政治上の自由を、更新せしめんが爲め也。將又米國の革命は、合衆政治に由て完結せられ、爰に諸教徒の基督教的目的を成就し、斯くて一切の要求と權利を、人類の自由と進歩の許に求めしめ。ナポレオンの大戰は、偶々歐洲の壓虐なる王權を挫摧して、進歩改良の曙光を誘致するの原となれり。豈啻此耳ならんや、基督教學の發現は、倏ちにして世界を開拓し、且改造して、僅々一世紀の間に、其勢力と、實益と、一切の價值をして、十倍ならしめ。蒸氣及電信なる貿易上の大使徒は、世界四極の距離を短縮して、交通を敏捷ならしめ、以て基督教國民の優所を、全地に發表して、方に大に、基督教思想の進歩擴張を幫助せんとす。而して是等の事實は、吾人が今說述せる真理、即ち世界の統治は、基督教の利益の爲めにして、これは眞箇に一の驚嘆すべき繼續的超自然のものなりてふとの、尤も顯著なる、世界大の證據に非ずして何ぞや。蓋し是等の出來事は、吾人の見に依れば、竟に耶穌基督をして、全地に崇められしめんと、一大目的を成就せんとて、進行しつゝある、一の攝理的行列の如き者也。

視よ、彼等はいかに時機に應じて起ち、整然たる秩序を保ちつゝ進行し、早からず遅からず、宛も其必要なる機會に、各々顯はれ出たるを。あ、古來如何なる純乎たる人、——及び彼れが教説と、設計と、事業の爲めに、爾く遠隔せる時代を通じて、爾く廣汎なる歴史的に、世界の統治が、之に協力したるとある乎。吾人之を考ふるに、餘事は姑く措き、此一事のみは誠に明白なるべし。即ち徹頭徹尾、超自然的組織にして、超自然的事業を成すの外、他意なき基督教と、純乎たる自然界にして、自然以上の物は、一切許容せざる世界との間には、斯の如き一致協力の存すべくして、而も存する能はざる是也。加之、是等事業の示す所なる、進歩なるものは、自然界の下には、決して不可能のとなりとす。何となれば、罪の下にある自然界なる者は、吾人の前説したる如く、自箇の器械的法則に由て運行せる、一大破壊的勢力となり果たるが故に、自ら恢復の功を收むる能はざるは、論を俟たず、却て愈々倍々、壞頽衰耗するを免かれざれば也。

然りと雖も、世界の統治は、之を大觀すれば、人心の内部的歴史をも包含するが故に、吾人が基督教の真理を確定せんとするに先だち、吾人はまた所謂靈の邦域、即ち心靈上の經驗より、攝理的歴史を考察せざるべからず、是に於て吾人は進んで、

三、特殊の議論として、人の中に行はれたる心靈上の變化、及び此の如き變化を受けたる者の、

證は、人
の中に行
はれたる
心腹上の
變化はな
り、
品性を變
化するの
困難なる

「証明に至らざるを得ず。夫れ吾人の中或者が、基督教の感化に因ると、或は毫も其真理を承認せざるに拘はらず、時としては、基督教が聖靈の教理に於て主張せる如き、超自然力ありと假定するに非んば、解釋する能はざる、品性と行實の變化を受るとあるは、言ひ消すべからざる事實也。而して其變化なるものは、自然開發の法則、或は彼等自身の性質に従て發動に得る意志の勢力、若くは彼等が前日の道德的習慣に超越せる、神の能力を假定するに非んば、當該者自らも、其理由を解説する能はざる所也とす。

夫れ品性を變化すると、殊に或る時日より、顯然別異となる如き（——其別異なるや、竊盜が俄然篤實となり、淫佚なる者が本然純潔となり、殘暴なる者が柔和となり、怯懦なる者が勇敢となるより大だしき——）有様に之を就すは、難事中之至難事たるは、何人も承認する所なるべし。然り、衆人概ね、これは到底不可能のとなりと言はん。蓋し人間能力の及ぶ所は、自ら性行を改革せんと決心するに過ぎず、これは彼等の何時にても做し得る所也、然れども之を做したればとて、彼等が善品性を距ると幾干ぞや、視よ、彼等は力めて本來の頑硬なる習癖に抗抵せんとし、微力ながらも、積日腐敗の重荷の下に、善徳を進めんとす、然れどもいかに容易に、彼等は日頃絶へず奮闘苦闘したりし罪性に、再び墜落せんとし、且其品性は依然たるぞや。若夫れ條件にして、竟に其幾分を變化するとに於て、成功するともらんも、その變化は如何に

緩慢なるぞや。然り其進歩の遅々たるや、修徳上久しき營々辛苦の末、一罪漸く去て、一善漸く加はるが如くならん而已。吾人は承認す、都て純平たる本來の性質の變化、及び本來の性情に於る改善は、みな斯の如き方法に由るものなるを。若夫れ純平たる意志の外に、吾人の上に働きて、吾人を變化せしめんとする或勢力あるに非んば、品性の俄然的變化なる者あるべからず。而して其變化なる者のあるべからざるは、吾人が腦力を使用するに方て、腦理學者が、頭蓋骨の下に本表を供へられたる腦葉を、増減する能はざるより甚しきものありとす。蓋し凡て己れの意力に倚頼して、猥りに自ら、其品性を改良せんと企圖するものは、反つて偶々退歩後却するともらんのみ。若夫れ、悪人の彼れが特殊の罪を壓抑したるときは、「是れ彼れの力に由る」といふを得べし、然れども吾人は、其裏面には、彼れの中に隠伏する者は、早晚必ず出來りて、己前よりは却つて猛烈の勢力を以て、再顯するともらんを、含示するなるを忘るべからず。蓋し殺し超自然力の信仰、及び感化なる者あるに非んば、吾人は斯く論ぜざるを得ず、而して吾人は苟か此論の正當なるを信ず。

果然、セルサスの論述したる所、斯の如し、彼は基督教徒の言説せるが如き、性質の惡より善に、俄然的變化をなすとあるを、全然拒否したりき、これ蓋し彼は、基督を信するの信仰なきが故に、彼が救拯の經驗中に合著せる、超自然的効力を、否認せざるに因る。彼れの言に曰く、

「凡そ性來邪惡の中に生れ、其中に慣習を得たる者は、懲罰に依ると雖も、之を改化する能はず、况んや恩恵に依てをや、何となれば、性質を改化するは、尤も至難の事なれば也」と。噫彼は恩恵の果して何を意味するやを了解せざりし也。然れどもオリゼンは、之を了解したり。彼はその聖き経験に由て、深く覺悟する所あり、奈何に雄麗に之に答へたるよ、曰く、「吾人はセルサスが愚と呼做したる教義を熟察するに、是は反つて一の魔力を以て動作せるを見る、視よ、いかに放縱淫佚なる群衆は、忽ち端正謹直なる者となり、不義なる者は善人となり、怯懦なる者は宗教の爲めには、死もなほ辭せざるの勇氣を生じたるぞや、是れ猶ほ未だ斯教義の有力なるを、證明するに足らざる乎」と。

ヂヤステン、マターの描き出したる所、亦之と符合し、其美に由て直ちに、之は神靈の致したる所なるを證明しつゝあるなり。曰く「嚮には怨の奴隷たりし吾人、今は道德の清美を樂むに至り。嚮には萬物に勝りて財貨を奪びたる吾人、今は吾人の有する所を以て、人の用に供するに至り。嚮には互に相憎惡し、互に相殘害し、吾人の殊惡の爲めに、同胞と伍を爲す能はざりし吾人、今は彼等と偕に住み、吾人の敵の爲めに祈り、且つ故なくして吾人を憎む者に向て、彼等若し基督の聖訓に従て生活せば、萬人の主たる神より、吾人と同一の恩恵を享るの、幸福を獲べきを、勸説するに至れり」と。

基督の福音に依て、斯の如き變化が、時としては、個人及或る社會中に行はるゝとあるは、吾人の體かに講る所也、然り、早晚此の如き實例を目撃せざる者は、蓋し甚だ稀なるべし。然りと雖も、團體として之を見るときは、其結果時としては、僞信仰、僞善、墮落、背教等の混同するとありて、爲めに其證據を濯滅せらるゝと莫きに非ず、是故に心靈革新の最善最良の實例は、却て個人的經驗の中に發見し得べしとす。

使徒保羅の事跡は、吾人の親しく講る所、而して其昭著なるは、古人の事跡中、如此充分の證據を有するもの、曾て無き程なりとす。若夫れ學識ある批評家、福音書に關しては、辯難する所蓋し紛なからざるべし、然れども書簡に至ては、決して一の迷謬を發見する能はざる也。彼等が此に來るや、彼等の憶説は破れ、彼等の地位は保持するに由なからんとす。夫れアリニの如き人、及びシセロの如き人が、曾て生存したりといふとも、其證據、決して使徒保羅の曾て生存し、彼が名を記入せられたる書簡を著はし、而して首めには十字架の迫害者、及劇烈なる敵手たり、後には彼れの中に顯示せられたる神の恩恵に依て、十字架の宣傳者となり、彼が主たる基督の名のために、一切のものを犠牲にし、有らゆる痛苦酷虐を忍びたる、三様の生涯をなしたりといふの事實より、多からざる也。而して彼れの言ふ所に據れば、此變化は、超自然的に就されたるものにして、彼は明かに、その悪生涯の停止したる時日を示し、然耳ならず、

爾後彼れの生活は、全く彼れが別人たるを、吾人と世界の前に公然表證す。實に彼は、尤も劇甚殘酷なる迫害者より、基督に於る信者——然も彼れが福音の最も有力にして、且つ首なる擁護者となれり。而して彼れが深嚴なる自證は、彼が人物と、其變化の眞確なるを證明し、彼れが信仰的生涯も、亦頗る顯然たるものありとす。然り而して、彼れが自らその變化を解説して、何處に於ても、憚からず証言したるものは是也、曰く、我が斯の如くなるを得たるは、「神の恩恵に頼る」又た「善き行を將はんが爲めに、耶穌基督の中に新に造られたり」と。

夫れ基督教會は、古來斯の如き實例を以て滿されたり。されば吾人は、縱令聖靈に關する基督敎の秘義を承認せざるも、心靈に於る、或る驚異すべき攝理に依て、神の新創的勢力は、絶えず人心中に注ぎ來り、以て彼等の生涯を改造せんとし、而して縱し基督敎は、一の迷信、或は小説に過ぎずとせんも、此の始終同一なる結果は、彼等友朋及門徒等をして、益々神に密通接近せしむるに足るものある也。

アーガスタンの改心

例へばアーガスタンは、彼れの未だ悔改せざるや、其殘暴酷烈なると保羅の如くならずと雖も、徳性を具ふると、彼が如くならず、主義に確立すると、彼の如く鞏固ならず、而して彼れが善き人物となり得るの希望に就ても、彼の如く有望ならずりし也。然れども或る瞬間——即ち彼れの「懺悔」の中に、精密に特示したる瞬間——より爾來、彼は全く別人物となれり。人

其他の例

或は、彼れある一陣の迷信に由て、斯く卒然變化したりと曰はん乎、彼は決して迷信的人物にはあらず、却つて放逸なる、肉慾的、自由思想家にして、其心意の傾向は、事毎に靈性的に反對したり。彼れ自らの解説に憑れば、彼れの改心は、一に彼れの敬虔深き母が、祈禱に依て、絶えず彼を追躓し、彼れの上に、上より神靈の感化と、恩恵を喚下したるに因れり、之に依て、彼の生涯は、漸く著しく變化したる也。嗚呼吾人は、彼れが爾後の全生涯、——彼れの行爲、彼れの性情、彼れの裕大豊富なる思想、及彼れの炎々たる熱心を視て、彼は、彼れの自然力の上に揚げられ、彼れ自身の上なる一人物となるを回想する時は、吾人亦大に裨益する所無くんばあらず。夫れ彼は最早や**敬禱家**にはあらずして、**今や聖き使徒**となれり。

登留其れのみならずや、**レイモンド、チル**（西班牙の一人一千二百三十四年生れ）、**コロチル、ガイブナー**（蘇國の一人千七百四十四年生れ）、**サヨシ、ニエートン**（英人千七百二十五年生れ）、**ドクトル、ナルソン**（米人千七百九十三年生れ）、及び現に教會の中に生存して、吾人の熟知する數百人の故心始末、亦尙な之と符合す。その證明者の夥多なる、その實例の吾人に慣熟せる、一々其名を擧んは、却て繁冗に堪へざる程なりとす。若夫れ幾多の之に類似せる變化が、一の眞確なる事實を含有せず、隨て一の實際的變化の之に伴はざるものあるは、吾人の承認する所也。是れ毫も怪むべきにあらず、何とされば、世には假偽の正直、美名、及勇氣なるもの鮮なからざれば也。然れども假偽なる者あるを以て、

眞確なる者を疑ふべからず。要は唯、厥人果して、その改心なるものにて、多少卒然に、一種別箇の生涯に入りたるや、否やといふに在りとす。縦へば、殘暴なる者は順良となり、狡猾なる者は正直となり、貪慾なる者は高潔寛容となり、卑吝なる者は慈仁克己の人となり、不虔なる者は敬虔に、亂醉者は清醒に、懷怨者は寛忍に、慘酷なる者は愛矜憐恤の心に變化し、斯くて厥人、爾來眞實に、彼れが渾ての習行關係に於て、顯然新人となりしや否やと言ふに在る也。而して吾人は、誠に如此例證に富むなり。加之、是れ咸な人類各箇の全部的歴史に於る、尤も較著確的なる事實にてあるなり。而して其證憑の饒多なる、其事蹟の顯然たる、其眞確なるを拒否し、或は心靈的迷墜に過ぎずと云ふとす。不信徒をして、却つて其識見の偏僻なると、其能力の薄弱なるとを、赧然たらしむるものある也。

諸て所謂改心なる、是等心靈上經驗の變化に於て、基督教の教義、即耶穌の中に在る眞理が、常に至要の有効原因と假定せられたるは、須く注意すべき所也。是れ當該者の、其證明告白に於て、等しく言顯はしたる所なりとす。彼等はみな一様に、神は基督に在て現はれ、斯くて内部的交通に由て、各自の意識の中に、己れを顯はし給へりと主張せり。然れども若し基督は、單だ純乎たる自然の人にして、彼れに關して福音書中に報ぜられたる超人的性質は、一の浮夸荒唐の張大言に過ぎずとせば、是等内部的變化の原因を以て、基督に歸するの解説は、豈眞な

りと云ふを得んや。將た果して、一の純乎たる迷想、之が因となり、而して代々斯の如き驚異すべき皎然確實の變化を生じ、以て人心をして、顯然神に通つかしむるを得たる乎、是れ吾人の想像せんと欲して、想像する能はざる所也、何となれば是れ則ち人類歴史の至深至確の事實を解釋せんとして、之を全然空想的原因、及び非理なる教義に索むるものなればなり。

斯く吾人は、彼等自箇の意識より、聖靈の働、及び聖靈に頼て彼等の心意に啓示せられたる、耶穌の改造的勢力を證明する證據人の、代々に雲の如く簇立するを見る、而も彼等が内部的變化の、神工（——聖靈に由て、彼等が意識の中に、神の新に顯示せられたると——）なるを證する證明の、一致符合すると、音樂の調和と管ならざる也。而して彼等は愈な、諸他の事物に於ても、社會より信任を受けるに足るの人々たる也。爾のみならず、何人も彼等の證明に對して、唯一箇の反證をさへも提出する能はず。たゞ尤も頑硬なる不信家が、彼等に對して辯駁し得る所のものは、彼れは自身に、斯の如き意識を有せず、或は彼れが特殊の經驗の中に、此の如き確たる發見を覺ふると無しといふに過ぎず。嗟乎實に一方に於ては、彼等は萬口一音、斯の積極的眞理を證明するに拘はらず、他方に於ては、彼等は唯だ自家の中に、斯の如き經驗を有せずとの、一の消極的事實の外、曾て彼等の證明に對して、一物をも提供する能はず、何ぞ其軒輕の太甚だしき耶。

然耳ならず、彼等の言語其物すらも、等しく真理を示し、且つ神の示現を、吾人に必要なるものとなし、斯くて榮光を神に歸し、凡そ聰慧明敏なる思想家を促して、直ちに之を信仰せしめんとす。それ吾人は彼等の中一人すらも、その愈れる生涯を以て、開發即ち純平たる自然法に依て、彼れの中に開展し來れる、結果に歸したる者あるを聞かざる也。又いかなる説教師、奈何なる殉教者も、斯の如き教理の爲めに説教し、或は火焰の中に赴かざる也。彼等は威な其信仰、及其信仰に應へ給へる神の恩恵を請り。又己れ自身と闘ふの酷だ無力なるを曉り、反之、神に由て獲らるゝ勝利の、太だ容易なるを誇り、且つ彼等は、憐れには宛る鷲鳥に攫奪せられたる如く、彼等の光明と平和を失ひ、又敵に對するの愛を有する能はざりしが、今や心裡に警告せられたる基督に依て、阻碍なく、自由に之を實行し得るに到れると告白する也。誠ニ彼等は自然の平面の中に生活せず、彼等は、自然にては、死者の復活するよりも、難き事物を執行し、或は忍受するなり。視よ、彼等はその信仰に憑れる神の力に頼て、彼等の恐懼に打勝ち、又同一法に依て、彼等は倨傲、情慾、習慣を伏せたり。復た宗教の僻見、人種の仇怨、文學の驕慢、及び學派の迷誤は、威く彼等の中に融へ去り、獨り顯然たる新人の特性をのみ貽さんとす。加之ならず、その心意昏迷して、ほとんど何物をも信する能はざらんとする、危殆の懷疑家たるも、一旦眞實の心を以て教へを乞ふや、基督と聖靈に在る神の光明は、乍ち彼れの中に輝

し、且つ充溢したり。夫れ吾人は、斯の如く、渾て彼等が事業の根本的勢力たり、又彼等が言ひ盡し能はざる喜樂の神秘的動機たる、超自然的恩恵の眞確なるを證明する者、代々に、雲の如く無數なるを賭る也。勿論彼等は、自ら深く其然るを識る、何となれば、彼等は躬親しく其衝力を、全く自己以外の勢力、或は自然界以外の原因より、得來りたるを知覺すれば也。若夫れ彼等に於て、其靈き經驗の、神より出ざるを信するを得ば、彼等はまた能く、其水槽中より、雨を起し得るをも信するを得んとす。夫れ彼等——即ち保羅、クレメント、オリゼン、セント、ベルナルド(佛人、一千九十一年生、ハス、ガルソン(佛人、一千三百六十二年)、ルーテル、フェテラ(佛人、一千六百五十二年)、フランドル(英人、一千六百九十二年)、バックスター(英人、一千六百九十五年)、ドンドリック(英人、一千七百二十年生)、ウエスレー、エドワルド(米人、一千七百二十三年生)、フレナルド(米人、一千七百四十七年生)、テール(英人、一千六百六十七年生)、其他初代に於て、迫害の中に、鮮血の天興に乗じて、家郷に昇りたる聖徒を首めとし、昨、優なる彼れが家族の臂腕に凭りて眠りたる、聖徒に至るまで、己に安息に入りたる信者の無數の大軍は、皆一齊に之を證明する也。而して彼等は、借に超自然的勢力の意識を以て生活して言へり、「最早や我れ生くるに非ず、基督我れに在て生くる也」と。約言すれば、是等の事實を以て、純平たる自然的開發の界限中に下降せしむる程、基督教の歴史を攪亂し、或は抹殺するものあらざ也。是れ實に劈頭より、總て

神の聖徒、及び彼等が言説、行實、品性を擧て、其中より刪除せんとするに異ならざる也。然らば、吾人が討究の結果として、發見したる所の者は他なし、世界の統治はまた、耶穌の品性及事業の中に現はれたると、同一の手跡を顯彰すといふ也とす。夫れ吾人は、初めに、殷し、世界の統治と、至上の法則が、純乎たる自然界及其行歩の中に限られたりとせば、須く起り來るべき一物も、起り來らざるべく、また必然如何なるとか、起り來るがを發見し。次に、吾人は、諸の戦争及發明、移住及條約、或は人種及國民の歴史上の大時期、文學の盛衰興亡、及び凡て世界の出來事は、愈々神の世界に於る基督的統治に由て、基督の福音を永續せしめ、加之、吾人の洞察する所に依れば、その終局の凱歌を保險すべく、整理按排せられたるを發見し。最後に、地上に於る神の統治の要地たる人心の内部的歴史に進入し、そこに吾人は、彼等が心裡なる永生の證據に由て、神を禱ると告白し、且つ許多の皎明なる標章に依て、都て彼等が品性に於て、彼等自身の上に擧げられたるを表示せる無數の證言、世々に興起せるを觀たり。之を簡短に約言すれば、吾人は世界に於る神の統治に於て、一の新約全書を發見したり。蓋し是れは萬物の深底に透入し、洋海の波濤を制馭し、王位の後面に統宰し、歴史の進行を指導し、懲罰の超過及殘餘を限制し、斯くて人生の大要件の中に、内外より、顛覆し、保護し、恢復し、痊癒し、再造しつゝ、的然道なる基督が、榮光に入らんとするとき、宣言せる所、——天のう

ち地の上の凡の權を我れに賜はれりとの言を、成就する也。果して然らば、吾人は、實に四福音の經綸は、又、世界の普及的統治の經綸なるを確認せずして、豈歎むを得ん耶。

第十四章

奇跡及び靈の賜物は廢絶したるに非ず

若し世界は、前章論述したる如く、超自然的に、別言すれば、基督教の利益の爲めに、司配せらるゝとせば、或者には尙かに劣等の者と見へんも、實は猶ほ更に愈りて緊要なる問題の残りある也、即ち福音時代の奇跡、及び超自然的賜物は、如何になりし乎と云ふと是也。蓋し是等のものは、歳史上基督教の創業と、密着の關係ある者也。基督は此の此き標章に依て、其使命を證明し、使徒等にも其證明として、同一の微標を予へたり。果して然らば、是等の奇跡、方言、病を醫するの能力、及び預言は如何になりし乎、(是れ吾人の必然解答せざるべからざる所なり)、又幻夢、豫告、及天使の來援は如何になりし乎。傲頑褻瀆の罪科の上に、顯然墜落し來れる、天罰は奈何になりし乎、將た惡鬼の憑依、及び魔法、妖術の類は如何になりし乎。若し是等のもの、古に在て一度ひ事實なりしならば、何故に今も尙ほ然らざる乎。若し又是等のもの、今に於て信すべからざるものならば、何故古に於ても然らざる乎。抑々事實は、單に之を古へに溯らしむる而已にて、合理的且可能的となる乎。言を換ふれば、基督教は公々然として、大膽に是等の事物を主張する乎、或は或者の假定する如く、探究の到達し能はざる歴史の荒唐時期

若し奇跡は本來不可信的のものならんば之を古へに溯らしめ、其時日を短縮したりさて何の益あらんや

に起りたる、僅々數箇の奇跡、及び半ば鬼神說的怪談を、狐疑躊躇しつゝ提出し、且つ經典已に完成して、最早其必要なきが故に、是等のものは既に廢絶したるを唱道して、現證に於る凡ての要求を拒絶せんとする乎を見定するは、是れ果して吾人の責任に非る歟。

此の如き問題は、多少吾人をして疑義を挿ましむるものなきに非ず。若夫れ奇跡なる者は、現代不信説の根本的思想の如く、本來信すべからざるものならば、徒に之を古代遼遠の時期に溯らしめたりとて、何の益あらんや。之に反して、これ本來信すべきものならば、何ぞ其事實に非るを解説せんとて、巧慧なる、併し乍ら想拗的憶説を設けて、これが實在せざり如く論斷せんとするや。蓋し基督教は、或意義に於ては、完全の組織、即ち之を成就せんために、何物をも加ふるを要せざる成業たるは、眞なりとす。然れども之れ決して、經典たる聖經の終局したりといふと合示せざる也、——これ聖經の何れの語に由ても支へられず、又福音の完組織たりといふよりも、推度する能はざる、赤裸躁暴の假定たるに過ぎず。何となれば、基督自身の思想に由てさへも、これたゞ芥子種^{カウシダ}完全なるに外ならず、左ればこれは、種子としては完全にして、何物をも之に附加する能はずと雖も、然れども未だ充分に生長の餘地を有し、而して之が爲めに聖經の他の書冊が、將來に於て必要なると無るべしとは、何人も保證する能はざる所也とす。吾人は斯の種子を開發し、之をして十分の成長を遂げしめんが爲めに、ある新治政、或

は幾多の此の如き考が、必要に非るや否やを知らざる也。蓋し恐くは必要に非るべし。予は今
毫も斯の如き新附加物、即ち別種の方法の、須要なるを憶せざる也。然れども吾人は首めよ
り、如此者の存し得べからざるを、假定せざるを可とす、否、時として、其假定にして、顯然
一の目的の爲めに立てられ、之なくんば、却つて眞箇緊要なる真理の價値を、減少するの疑わ
るを免かれざる場合に於ては、吾人は反て之を爲すべきものとす。

若夫れ、縦ひ聖經の經典たるとは、既に終局したりとせんも、奇跡及靈の賜物は、最早や必要
に非ず、又存立すべき理由なしとは、未だ必ずしも言ふべからざる也。是れ實は、人間は爾く
深奥幽艱なる問題を解釋し、神の宇宙に於る大經綸の秘義を洞察し、之を把握するの明有らざる
に、叨りに之を憶断したる結論たる而已。然り、眞し一步を譲りて、聖經中新書冊の擔保なし
とせんも、別に奇跡及靈の賜物の、繼續すべき理由ある也。乃ちこれは、若し新啓示の廢絶し、
聖經の語の永遠に終結するときは、將に起らんとするの單調を破らんが爲めに要せられ、又教
會をして、可憐なる死枯昏睡の状態に陥るとなく、恒に之を活潑ならしめ、神の現實を直覺せ
しめんが爲めに、必要なりとす。

然るに怪哉、却つて是等の事柄を理由として、奇跡、及總て神力を外見的顯現の廢絶したるを
假定したる者、クリンストムの時以來、蓋し夥しとせず。而して彼等は時日其物の、明白に其

經典の終
局したる
とは之が
廢絶の理
由はな
らざる

洵に此
理由の爲
めに、こ

れはクリ
ンストム
の時代に
も廢絶せ
ざりき

理由とする所に齟齬するを曉らざる也、何となれば、聖經の編著せざると、已に二百五十年
なるに（クリンストムは第三世紀の人、故に云爾）、奇跡の行はるゝとは、事實上其時に至るま
で、未だ曾て消滅せざれば也。然れども彼等の所謂其理由の歎みたる後も、尙ほ奇跡の二百五
十年間繼續したりといふは、一度び之を承認したる後は、事實及道理を解釋するに於て、些の
困難をも感ぜざる也。是故に、此の奇跡及靈の賜物の廢絶したりとの假定は、之より一層の勢
力と權威を以て主張するを得べき、聖經其物の中より、何物をも引證すると能はざる也。然る
に或者は動もすれば思惟すらく、夫の假定説を以て誤謬なりとするの見は、異端にして、真理
を侮蔑するの甚しき者なりと。否、基督教々師の中に（さへも、今日この科學の旺盛なる、萬物
齊整せる時代に於て、奇跡論を主張するは、則ち神の施政を擾亂する所以にして、これ則ち理
論の全軀を顛覆するものなりと、思想する者尠なきにあらざる。

之と同時に、時としては、奇跡は再び回復せられざる乎、或は回復せらるゝの時あらざる乎と
の問題を提起するの論者なきにあらざる。大監督チロツトソン（英人、千六百三十二年生、
千六百九十四年死）と（さへも、異教
人の中に福音を傳へんとする場合に於ては、斯の如きと、恐くは存し得べきを主張したり。然
れども此の如き場合に於ては、先づ奇跡は一旦廢絶したるを讓許せざるべからざる。別言すれば、
一層直截適切なる問題は、是等の事は、果して使徒時代と齊しく、恒に存立せざりしや否やと

其處此處
にこれが
停止した
るとはあ
らん、然
れども廢
絶したる
に非ず

いふことなりとす。蓋し是等の事の、時々息止したると、恰も信仰反聖徳の一時衰耗したるとあり、或は聖靈の働の一時其感化力の歇止したるとあると、一般なるは、固より論を俟たず。然れども奇跡的治政の、一旦全く廢絶して、再び回復せらるゝを要すとは、實らしからざるなりとす。然りと雖も、或る事情の爲めに、時々其働きを停止し、而して時としては、此處彼處に再び其作用を顯はすとあらんといふは、この治政は永續的のものにして、決して廢絶せず、又廢絶せらるべからずとの信仰と、全然一致するものたる也。

吾人は深思熟考するに従て、益々此説の眞確なるを覺ふ、而して吾人は又、許多の事實に依て、此説を證明するを得る也。勿論吾人が古今を通じて、是等の超自然的證憑ありと主張するは、是等のものは、現代に於ても、單に使徒時代と同一事跡の繰返し、若くは形式的繼續なりと云ふを合示するに非ず。是等の作用は、固より進歩せる吾人今代の事情に適應せる形狀に於て、顯はれざる可からず。然るに人動もすれば、基督教は、今尙其初代に於て倣したる所と、精密に同一事物を爲すならんと想像し、而して同一事物の再び繰返さずして、別種の事物の行はるゝは、却て大に道理あるとにして、道理の原則たる適應の大法は、常に吾人の程度、若くは事情の異なるに従て、其施政の變化を要するを、心附かざるものゝ如し。夫れ神は古來各山岳より恒に十誠を興へざるの故を以て、十誠の超自然的賜物なるの證憑不十分なりと難詰する者、未だ

然れども
これに於て
世に於て
も、古へ
さ同一の
方法を以
て起るべ
しと云ふ
に非ず

一人も有らざる也。反つて基督の顯現して、或意義に於て、更に愈れる者を創建せんが爲めに、前の契約を廢したるを見るに依て、そこに其經過の間に於て、大に進歩の觀あるの明證を、認するを得る也。蓋し思ふに、超自然的事物に於て、状態及種類に、この進歩なかるべからざるは、猶ほ自然的事物に於るが如き歟、何となれば、神若し永遠に其舊式に於て、その舊事業を繰返し、其間毫も進歩なるもの無からん乎、萬物は將に昏睡し、腐敗せんとすれば也。果して然らんには、夫の古昔に於る、或は預言し、或は方言を譯し、或は病を痊すの諸能力、及び此の如き諸他の勢力が、今や其形狀を變じて、時としては容易に認する能はざる状態を取りたるは、抑も何を意味する乎。これ基督教の反證には非ずして、却て之が道理に合するの宗教たるを、確證するものに非ずして何ぞや。兎に角、天賜の形狀は、唯僅かの變化を以て、依然として今尙は繼續せるの一事は、洵とに顯然たりとす。

然れども是等の奇異なる事が基督にあらざるは、固より論ずるを要せず、眞實はこゝに在らず、是れたい眞實の現象、徴標たる而已。此故に、甚だ之が弘布増長するは、基督教の要旨に非ず、基督教の活力は決して是等を繰返さるゝと、或は其作用の有力なるとに倚て、證明せられざる也。蓋し是等の事物は、太だ稀少なるが如くして、實は甚だ夥多なりとす。而して一旦之が基督教中の要旨、若くは眞實として誤了せらるゝや、これは儼然一の偶像となりて、反て信仰を

妨碍するに至らんとす。夫れ世は之を目撃して、悔改すべき善也、然るに心技に止まらずして、徒らにその大能を驚嘆す、これ眞摯切實なる信仰は墮落して、浮薄輕信に陥りたりと云はざる可からず。而して事若し此の如くんば、是等のものは、基督教の利益の爲めに世界を支配せる、牢固恒久の攝理的統治を示すものに非ずして、これたゞ何物をも支配せず、又人心を革新するの力なく、又毫も基督の王國を鞏固するの効力なき、一閃の花火たるに過ぎず。果然、吾人は斯の如き愚弊の、蚤く己に人心に萌芽して、使徒等は之が爲めに太く辯難したるを發見する也。然り、衆人、信仰に由て生き、基督と偕に歩み、且つ悔改に合ふ果を結ぶに愈りて、奇跡休徴の類を、基督稱讚するに至るは、一大通患也とす。

率直に言へば、吾人は念ふ、夫の癡絶論者も、或は回復論者も、或は是等の奇跡は既に過ぎ去り、今は信すべからざる者たりと主張せる拒絶論者も、多少神の經綸に於る其地位と、其關係的要務を、誤解するに於ては、皆等しく一なりと。それ眞乎に其用務を判明せんとせば、吾人は勢ひ其關係せる二個の反對なる要素を、考究するを要す。且夫れ吾人は、神の手段其れ自身を觀察するに方り、叨りに之が完否を論ずべからず。抑々之は、唯だ紛糾糾錯したる人性の爲めに、醫藥として有効なるのみ、其毀損潰裂したる性情の、偶爾に彼方此方の極端に震搖するに從て、増減せらるゝを要すべきは、素より言を俟たざとす。

必竟奇跡の必要なる所以は、人間は神の狀態に居れば也

始めに吾人は道理と秩序と均一の方に傾き、次に狂妄の方に反る

今吾人が、是等の賜物はいかに働く乎、或はいかなる用務を成就する乎を考ふるに方り、吾人をして先づ、神は常に秩序ある一大超自然的經綸に由て統宰し、又外界に於ても、心靈界に於ても、基督教の爲めに世界を支配し給ふを、己に承認せらるれたる事實として假定せしめよ。又神は超自然的物に於てさへ、一定の永遠的法則に由て、統治し給ふを領會せしめよ。左れば人類の荏弱なる、基督信徒をしてさへも、其靈能をして、竟に萎靡昏酪せしむるに至るとあるは、蓋し免るべからざるの數なりとす。且夫れ、若し萬物は創世と毫も變るとなくして繼續せん乎、祈禱は正に啞鈴鉢線アムニオンの如くならんとす、鉢線としては可ならんも、然も決して聽上げらるゝと無るべく。聖語は註釋的に理會せんには可ならんも、然も一層直接なる教示の光明、其心中に來るなく、總ての眞現は、陳腐の眞理にして、決して神自身より、直發し來れる、靈活なる光明に非るべし。將又單に僧侶の手工に過ぎざる聖禮式は、益々其効力を亡ぶべく、更に一層の希望を屬せられたる繰返しレピテチオンの修行は、恩恵に依て其心を和らげられんよりは、寧ろ其心を頑ふるに過ぎざるべく。會堂の禮拜は、倍々其敬虔を喪ふべし。別言すれば、縱令宗教の外形に於ては、一の變化を生ずると無からんも、その下降沈淪して勢力を失ふと、宛も一層下卑陋劣なる形跡を取りたるに異ならざらんとす。渾ての能力は爲めに失墜し、渾ての希望は爲めに消滅し、神は、吾人が彼を頼求めんには、餘り幽遠に、餘り法則の中に拘束せられたり

と云ふべし。噫基督教會は、古來幾世記を通じて、顯然この信仰滅却の方向に對て、益々下降しつつあるぞや。殊に科學が、單に科學的方法に由て、人の思想を鑄造し築めたる近世紀以來、更に著しとす。今や宗教は、單に智識のとなりたり、而も餘り熱心すべからざる、一種の智慧の如きものとなり、隨て何の効力もなきものと成り果てたり。

偕て聖靈の妙力、及び休徵の必要なるは、正に世の此の如く偏理説に下降したる時に在りとす。夫れ人心の未だ全く不信迷妄を脱せざるや、動もすれば秩序を不動に易へ、法則を昏睡に變じ、又神は大能たるの故を以て、須らく心を強ふすべき敬虔をして、却つて怯懦脆弱ならしめんとす。此時に於て、彼(神)をして奇跡及休徵に由て發現し、彼は今尙ほ殆んど死に垂んとする彼の人民中に在て、獨り活潑々なるを講らしめよ、彼等は將に之を睹て、驚喜復活せんとす。今や彼等は、彼は仍ほ或る事物を行ひ得るの自由を有し、彼等が祈るときに彼等に聽き、困りるときに之に勝たしめ、又た彼等を助けて、その胸中の罪汚を服從せしめ、且つ聖經中に於る彼が總ての約束を成就し能ふを曉り、大希望を以て彼に適かんとす。彼等は又、是等の賜物に由て聖經は確立し、且つ使徒時代の恩恵、事業、及び聖果は、また彼等に屬するを發見せんとす。加之ならず、彼等は、現然基督教經綸中に合著せる勢力の、實驗的證據を把握せんとす。夫れ今や、活る神は目前に顯はれたり、而して宗教は、實に歴史的の者たるのみならず、又現に生命

及び活力たるの感を生じたり。さればこれは、最早や、傳説若くは陳腐の知識に非ずして、現に活動しつつある、人類救拯の、神の恩恵たらんとす。

然りと雖も、吾人はまた容易に曉り得んとす、人間は兎角反對の側面に於て在弱にして、忽ち反對の極端に走らんとするを。彼等は曾て智識、自然、及び一般の不信に陥りたる如く、今や彼等は狂妄の中に闖入し、剩へ眞箇に信すべからざるものを信じて、以て誇る所あらんとす。夫れ人は病を醫し、或は方言を語るの能力あるが故に、彼は復た、人類普通の道德上の弱點を免れ得べしとは、未だ必ずすべからざる也。反つて彼は、やゝもすれば人衆の驚嘆に眩眩し、衷心いつか功名の念に襲はれ、爲めに彼が特殊の賜物を過大に言ひ做し、猥りに外觀を飾り人目を欺罔せんとし、且つ心中の矛盾衝突に堪へずして、卒に恣まゝに情慾の猛威を逞ふるに至り、かくて彼は思想行實、兩ながら躁暴の極端に陥り、其極彼は、終に自家の烈火に燦焼せらるゝに到らんとす。斯くて、曾て奇跡休徵なきが爲めに、宗教は慣行常例の態となりて消沈せんとしたる如く、今や奇跡休徵は、駭々として増長し、方に使徒の全力を傾注するも、なほ之を警醒するを難しとしたる、夫の輕躁浮薄なるコリント人の弊に陥らんとす。於是乎、凡て超自然的の證據を輕視せられ、搖錘は反撥して、復た常規平調に返り、茲に再び偏理不信、及び無能無力の狀態に沈淪せんとす。

緒て教會は、或る道徳上必然の理ありて、常にこの兩極端の間に震揺しつゝある也。是れ神の施政の、不規則にして且任意なるが故に非ず、却つて吾人在弱なる人性の、不完不安なるに因り。而して震揺の、秩序及道理に傾向するは、常に其行歩漸次にして、且其時長く、奇跡及休徴に至る時は、急速にして且短少なり、何となれば、其行歩恒に激烈にして且つ迅速に、其盡頭に達するに於て、時日を要すると極めて甚なれば也。

若夫れ。孰れの奇跡。及超自然的證據の發現も、斯の如き進路を取りたるは。別に注意を喚起するを要せざる程なりとす。これは最も熱切に神に祈求し、且つ一心己れを基督に献ぐる時に始まるを常とす。且つ神の異能は、概ね神力の啓示として顯はるゝものにして、殆んど當該者自身の希望に超ゆる所の考なり、而してこれは時として、教會に於る慮外の思想及行爲が、此の如き場合に嘲笑せらるゝの外、別に弊害あらざる也。然れども固と人間道徳性の在弱なる、情欲を箝制し、虚偽迷想に陥るを防遏するの充分なる能力なきが故に、當該者は、その神より出る者ど、己より出る者どを區別する能はず、己れの思想を以て神託とし、或は己れの想像を以て幻示とし、斯くて彼等の中に於る神の眞工は、條ちにして失墜せんとす。古往此の如く、今來又恐くは此の如く、以て或る將來の時期に於て、人類が眞理に由て充分に教訓せられ、且警覺せられ、天來の惠賜を天上の秩序の中に保ち、毫も將來の腐敗せる心情及身軀を鼓煽する

となく、全然愛を以て感化せらるゝまでに抵らんとす。斯くて吾人の所謂震揺は歇止し、平調なる常規的生活は、非常法外的を匡正せんとて起り來り、以て神に屬する智識及經驗は、方に直接的の狀態とならんとす。是に於て乎、奇跡休徴なる非常的行爲は、その急劇的躁暴を息めて、鞏固明理の、眞箇敬神の生涯とならんとす。而して是れ眞に神の國、——即ち神の幕屋人と偕に在りとの理想の、成就したるものとす。今や人生は神を直覺し、神に滿つるの狀態にして、正に過誤なくして、幼者は異象を視、老者は夢を見んとす。そこに感情と理性は接吻し、そこに至貴至重なる愛の謙徳は、渾て信仰及祈禱の烈火を調訂せんとす。

今夫れ奇跡及超自然的賜物に就て、此の概括的觀念を有せん乎、吾人が斯の如き例證の、古今各所に散見するを視出すも、何の異しむべきとあらんや。いま僅かに其一班を曰はん乎、試に少しく教會歴史を繙開せよ、吾人はそこに、弟子等の一團が、彼等各箇の郷閭より驅逐追放せられ、或は窘迫殘害せらるゝに於てや、彼等は幾んど、預言者たり、異能の執行者たらんとするが如く、神に密通し、且つ神靈に接近したるを看る也。蓋し世の何れの時代に於ても、いかなる種類の超自然的異能も、決して發現せざる程、斯の如き賜物の絶對的に廢絶せりとは、恐くは眞理にあらざる可し。若夫れ此の如き異能は、其形狀を變化するとはあらん、然れども、これが聖經的か或は攝理的か、古代的か或は近世的か、社會的か或は個人的か、兎に角、或る

形状に於て存在するとは、恐くは渾て事實を充分熟知する者の、齊しく承認する所なるべし。是故に、今本論を鞏固にせんが爲めに、要する所のものは、世の超自然的事實、即ち現象の、充分にして且つ連續せる目錄なりとす。而して若し人一人たび之を歴閱すれば、方に大に其例證の豊富なるに一驚を喫するや疑ふべからず。又設し是等のものが、其群に從て蒐集せられ、且つ年別せらるゝときは、今奇異なりと感覺する所のものも、全く雲散霧消して、是等のものは、古代に於るが如く、今代に於ても再起すべきを、信するを得んとす。然れども、斯の如き歴史の其儘繰返さるゝは、決して能くし得べきにあらざるは、素より論を竣たず。而して其材料は、唯纔かに其一部分を搜索し得るに過ぎず。若夫れ幸にして其全部を知り明むるを得んも、本書の如き限りある畧論に於ては、之を説述する、否撮要するとすら、到底望むべからざるとなりとす。

探討者の
第一に懸
念する所
の者は、
奇跡は決
して或る
一定の時
日を以て
終りたる

夫れ凡そ一切先入の見、及び傳説の古跡に拘泥せずして、此種の問題を探討する者の、必ず先づ到達する所のものは、世間普通に唱道する所なる、古代の使徒的賜物は、或る歲月より廢絶したりとの妄想は、全く打破せらるゝとなりとす。何となれば、實際上是等のものは、決して或る一定の時日に由て中止せられ、或は結局せらるゝとなきが故に、歴史上に於ても、是等のものは絶へず繼續し、終に探檢者は、是等のもの、消滅したる時日を定むる能はず、反て此の

と無しと
いふと也

泉流は、萬世を通じて、断へず流溢し、且つ恒に流溢せんとするものなるを發見せんとすれば也。彼はインナシアス、ポリカーン、ヂヤスチン、マーター、アセナゴラス、アイレニヤス、ターチユリアン、オリゼンの異能を吾人に示して、息止の點こゝに在りと言ふ能はず。彼は又シプリアン、或はオーガスチンに降り來て、そこに之を定むる能はず。或は隱者ポールにまで降り來て、そこに之を定むる能はず、夫れハスの夢、ルーテル及びフホックス、及び大監督アシャーの預言、及びサビエーの異象は渾て中間の時代に於る教會聖徒の、他の無數の異能及神力發現と偕に、吾人と古人との間の大灣に架橋して、奇跡及休徴の問題をして、吾人現代の活問題たらしむ。若し夫れ此の如き論證は、萬物と俱に、幾んど輕浮に陥り、教會の墮落と俱に、著しく迷信に感染したることあるは、更に疑ふべからず。然れども假令いかに超自然的の事實、之と共に減少すと雖も、是等のものは全然逝去し、竟に廢絶したりと論結するの理由、決して存せざる也。

若夫れ、吾人が所謂近世、即ち宗教改革後の時代に迄降り來らん乎、全く普通の感覺に反して、異能の同一種類が、教會の初頭三世紀に於るが如く、斯の最後の三世紀に於ても、敢て珍らし敷からざるを顯彰するより、容易なるもの無しとす。試に基督教論集なる「セ、スコットス、ウオルターズ」(The Scots Worthies) を一讀せよ、そこに凡ての點に於て、使徒時代の奇跡異能

「スコツ
ト、ウオ
ルターズ」
中の
奇跡

と、全然符合せる預言、醫療、及顯然たる審判、祈禱特殊の應驗、及び諸靈の識別等の事實、歴々として顯現せるを視ん。而して是等の奇跡異能に與りたる人々は、凡庸者流に非ず、却て愈々當代の宗教界に於る明星なりとす、——即ちウイシャルド(宗教改革時代の蘇國の殉教者、千五百四十六年殉教せらる)、ノックス(自千五百七十二年)、アースキン(自千六百八十年)、クレイク(自千五百十二年至千六百零年、蘇國の改革者にしてノックスと共に働きたる人)、ダビッドソン(千八百七年に生れ現にエヂンボロー大學の教授たり)、シムフソン(自千七百四十六年)、ウエルチ(自千七百九十五年)、ガスリー(自千六百五十五年)、フレリア(自千七百十八年)、ウエルウード(詳未)、カメロン(自千六百八十五年)、カーギル(自千六百八十一年)、及びベアデン(詳未)等の如き人々なりとす。而して此大問題に關して或者の置かに之を信じて、太だ之を疑ひ、加之幾多の反對説を抱持するに拘はらず、都てアービングの著書よりは、一層美麗簡短に、奇跡異能を記載せる、ハウエイの此著書は、我邦に於る基督教徒の最大にして、尤も保守主義なる團體の一に由て發刊せられ、且つ老幼の別なく、熱心の嗜好を以て、數千の人衆に愛讀せらるゝは、亦甚だ奇異なる事實なりとす。是れ抑も或者が之を要せざるに反して、却つて本來奇跡及超自然的異能を愛尙するに因る乎、然らざるは彼等何を以て爾く之を信ずるを得ん耶。

セピンスの震動者、即佛

其後ナンツの布告を徹廢したるが爲めに、迫害の腫で起りたるや、「ヒューゲノット」と呼ばる新教徒、即ち改革派の一團體は、逐はれてセピンスの山中に遁れ其或る者は英國及他の新教

蘭西の預言者

國に逃れたり。然るに是等不幸なる人民の間に、奇跡的能力は發現し、而して其異能は彼等より多少四方に廣布したり。彼等は方言を語り、又方言を譯するの力を受けたり。彼等は醫療の能、及び靈を識別するの能を得たり。而して又彼等は聖靈に由て預言したり。左れば有識の人士も、之を聽き、之を觀察し、之を査究せんとて、パリより出で行きたり。而して是等の人々は、當時「セピンスの震動者」として、大に世に論議せられたり。加之ならず英國に於ては、又「佛蘭西の預言者」として論議せられ、英國に於て彼等の點火したる火焰は、英人の中にも蔓延し、其餘勢曳て永年間に亘りたり。

セント、メダルドの被擧者

「ヒューゲノット」徒中に、此の異能の顯はれたるより後、凡そ四十年にして、殆んど同一の現象、「カソリック」教徒、即ちパリの「ジャンセンスト」徒の中に顯はれたり。醫療はセント、メダルドの墓上に於て行はれたり、而して殊に癩癩病に罹りたる者の、痊されたるもの多かりき。而して「ジャンセンスト」徒は、當時「セズイト」徒の迫害に遇ひ、彼等の信ずる如く、基督の眞理の爲めに證據立てたる者なるを思へば、彼等がセピンスの「ヒューゲノット」徒の如く、異能を行ふに至りしも。亦異しむに足らざる也。彼等は方言を語り、靈を辨へ、且預言するの能力を有し、而して彼等が時としては、幻境の中に上げらるゝの故を以て、「セント、メダルドの被擧者」と呼稱せられたり。

フホ
ツクス
及び「フ
レンド」
派の奇跡

且夫れ「フレンド」派に於ては、其祖ヨルマ、フホックス以來、賜物、默示、靈の識別力、及渾て全異能力の發現を望むを以て、其主旨としたり。斯くてフホックスは、許多の異能のうち、就中衆人の信ずる如く、醫療の奇跡を行へり。例へば、試に吾人をして、彼れの日記の目錄中より、縦へ尤も簡後なる形狀とは雖も、人も彼れ自身も、之を行へりと假定せる異能の如何なるものなるかを舉示せしめよ、——曰く、「神の大能に由て行はれたる奇跡、——跛者痊さる、——病者回復せらる、狂婦人平癒す、醫師の見捨たる一名士本復す、——メリーランドに於る一病人に命じければ、其人直ちに主の大能に由て起ち上れり、ゼー、シー氏の病痼を退けんことを主に祈りければ、主はその大能に由て、直ちに彼に平安を與へ給へり」と。此の如きの類枚舉に違わらず。

然れども
吾人は何
故に、如
此事物を
古へのこ
ととして
耳聞する
のみにし
て、今之
を自撃す
る能はざ

然れども人或は曰はん、吾人は何故に、此の如き事物を耳聞するのみにして、之を目撃すること能はざる乎、何故に、吾人は但だ時代を隔て、之を知る而已にして、親しく之を識る能はざる乎と。然れども實際は全く之に反し、吾人は豫想したるよりも、大に之に密邇するを得る也。余は永年超自然的事實なる、此大問題を胸臆に收め、力めて習俗の見拘束せらるることなく、公平に之を觀察し、査究し、傾聴し、且之を判断せんとしたるに、余は衆人の一般に奇跡及使從的異能の時代、即ち教會の初頭三世紀に於るの外は、全然信すべからずと承認せる所の

る乎
否、各人
は之を目
撃するを
得、
而も頗る
其例證に
富めり
カピテ
ン、コン
トの夢

もの、余が視聽に入來るの實に夥たしきを發見して、一驚を喫したりき。然り、一度び注意をこゝに向くる時は、僅々數年にして、而も格別之を問究すると無きも、之は最早や珍怪奇異の觀を失はんとする程、吾人に親炙し、加之ならず、これは古今を通して、多少教會及び聖靈の施政に屬するものなるを覺らんとす。

余は先づ其例證として、純粹に宗教的には非すと雖も、然れども單に自然の原因のみにては、説明すべからざる一例を舉んとす。余曾て或る風暴き十一月の夕、カリフォルニアのナバ、ハルレーの、一旅館の爐邊に坐したるに、恰も其時、最も尊敬すべく、且温情の容を具へたる紳士、その夫人と偕に入來て、余が傍に坐を占めたり、後聞く所によれば、斯人はカピテン、コントとて、四十餘年前、捕獸を業とせんとて、カリフォルニアに移住したる人なり。此處に彼は、世と世の露々より離れて閑居し、廣大なる土地を得て、儼然其地方の首長となれり。彼が丈高く、威儀あり、且慈腸ある相貌は、哲學上の疑問及問題は、未だ曾て彼が腦裏に入りしをなきもの、如き、單純高潔を形はし、余をして古代の族長も、斯くやありなんと思はしめたり。話柄は轉じて、當今の「スピリチズム」及び妖術に入れり。而して余は、彼が眞實に如斯秘義を信する傾向あるを發見したり。旁らなる、氏よりは若年にして、且つ明かに基督信徒たる、彼れの夫人は、語るに、彼れに彼れ自身の甚だ奇異特殊なる經驗に由て、此種の信仰を保持す

ツヨル
ツ、フホ
ツク、ス
及び「フ
レンド」
派の奇跡

然れども
吾人は何
故に、如
此事物を
古へのこ
ととして
耳聞する
のみにし
て、今之
を目撃す
る能はざ

且夫れ「フレンド」派に於ては、其祖ヨルマ、フホックス以來、賜物、默示、靈の識別力、及渾て全異能力の發現を望むを以て、其主旨としたり。斯くてフホックスは、許多の異能のうち、就中衆人の信する如く、醫療の奇跡を行へり。例へば、試に吾人をして、彼れの日誌の目錄中より、縦へ尤も簡後なる形状とは雖も、人も彼れ自身も、之を行へりと假定せる異能の如何なるものなるかを舉示せしめよ、——曰く、「神の大能に由て行はれたる奇跡、——跛者痊さる、——病者回復せらる、狂婦人平癒す、醫師の見捨たる一名士本復す、——メリーランドに於る一病人に命じければ、其人直ちに主の大能に由て起ち上れり、ゼー、シー氏の病痼を退けんことを主に祈りければ、主はその大能に由て、直ちに彼に平安を與へ給へり」と。此の如きの類枚舉に遑あらず。

然れども人或は曰はん、吾人は何故に、此の如き事物を耳聞するのみにして、之を目撃すること能はざる乎、何故に、吾人は但だ時代を隔て、之を知る而已にして、親しく之を識る能はざる乎と。然れども實際は全く之に反し、吾人は豫想したるよりも、大に之に密通するを得る也。余は永年間超自然的事實なる、此大問題を胸臆に收め、力めて習俗の見拘束せらるることなく、公平に之を觀察し、査究し、傾聴し、且之を判断せんとしたるに、余は衆人の一般に奇跡及使從的異能の時代、即ち教會の初頭三世紀に於るの外は、全然信すべからずと承認せる所の

る乎
否、各人
は之を目
撃するを
得、
而も頗る
其例證に
富めり
カピテ
ン、ヨ
トの夢

もの、余が視聽に入來るの實に夥たしきを發見して、一驚を喫したりき。然り、一度び注意をこゝに向くる時は、僅々數年にして、而も格別之を問究すると無きも、之は最早や珍怪奇異の觀を失はんとする程、吾人に親炙し、加之ならず、これは古今を通して、多少教會及び聖靈の施政に屬するものなるを覺らんとす。

余は先づ其例證として、純粹に宗教的には非すと雖も、然れども單に自然の原因のみにては、説明すべからざる一例を舉んとす。余曾て或る風暴き十一月の夕、カリフォルニアのナバ、パルレーの、一旅館の爐邊に坐したるに、恰も其時、最も尊敬すべく、且温情の容を具へたる紳士、その夫人と偕に入來て、余が傍に坐を占めたり、後聞く所によれば、斯人はカピテン、ヨントとて、四十餘年前、捕獸を業とせんとて、カリフォルニアに移住したる人なり。此處に彼は、世と世の驚々より離れて閑居し、廣大なる土地を得て、儼然其地方の首長となれり。彼が丈高く、威儀あり、且慈腸ある相貌は、哲學上の疑問及問題は、未だ曾て彼が腦裏に入りしとなきもの、如き、單純高潔を形はし、余をして古代の族長も、斯くやありなんと思はしめたり。話柄は轉じて、當今の「スピリチズム」及び妖術に入れり。而して余は、彼が眞實に如斯秘教を信する傾向あるを發見したり。旁らなる、氏よりは若年にして、且つ明かに基督信徒たる、彼れの夫人は、語るに、彼れは彼れ自身の甚だ奇異特殊なる經驗に由て、此種の信仰を保持す

るに到れる由を以てし、且つ適當の疑問を以てせば、彼は喜んで其事由を語り出るならんを以てしたり。

彼は余が要求に應じて、其物語りを始めたり、その大要は次の如し。六七年前、或る仲冬の夜、彼は夢に、移住民の一隊が、山間、雪の爲めに埋没せられ、殆んど凍餓、死に瀕せんとするを見たり。彼は其土地の景状は、白雪斷巖の、嶄然として高く聳ゆるを認めたり。又彼は、人が雪の深溪中より突出せる、木梢コサエの如く見ゆるものを折りつゝあるを視、又其人々の容貌と、彼等が困憊せる状況をも明かに認めたり。彼は醒めて深く其夢の明瞭確實なるに驚きけるが、卒に彼は再び睡に就けり。而して再び精密に同一の夢を夢みたり。翌朝に至てなほ之を忘るゝ能はず、間もなく彼は一群の獵者に邂逅したるを以て、語るに實を以てせるに、彼は乍ち夢中の光景あるを認識して、轉々驚動したり。抑もこの一群は、カイン、ベルレー、バンスを経て、シエラより來れる者なるが、告るに途中の光景、宛も彼れの述る所に合するを以てしたり。是に於て、この純朴なる首長は、心中已に決し、直ちに人の一隊を集め、且つ驢馬、毛布、其他一切の必需品を準備したり。隣朋は忽ちその輕信を笑へり。然れども彼は毫も動くことなく、決然として曰く、「關する勿れ、余は之を成就するを得べく、又成就せんと欲す、何となれば、余は深く余か夢に符合するの事實あるを信ずれば也」と。一隊は直ちに百五十哩マイル隔りたる、

カイン、ベルレー、バンスに遣はされたり。而して其處に果して夢みたる所と、精密に同一の一隊を見出し、而して生殘れる者をば連れ歸りたり。

其處に居合はせたる一紳士、余に語て曰く、「君は之を疑ふを要せず、何となれば吾人カリフォルニヤ人は、みな此事實を知り、又その連れ歸りたる家族の名をも知り、且其人々は、吾人の崇敬する此友人を、教主の如く尊仰するを識れば也」と。斯くて彼は其人々の姓名と、住所とを余に示したり。而して余は其後、カリフォルニヤ人は、何處の人も此事實を證明するを見たり。

其時この善良なる首長は、語を襲で、我生涯中の尤も榮光あるとにして、且最大の喜樂を余に與へたるものは、余は卓純なる信仰を以て、此夢を信じたるに在りと曰はれたるが、實に當然の次第といふべし。其時又、余は此喜樂の中に、現に眞箇基督教の愛と生命の微光を目撃したる如く感覺して、禁ずる能はざりき。蓋し彼は自ら識らざるの間に、その信仰に由て、この佳境に入りたる也。夫れ人誰か、純乎たる自然的原因に由て、この夢と事實の符合を解明せんと試むるものある乎、彼は超自然的擬理を承認するまでは、到底其勞苦を休むる能はざるや必せり。

余は又、此新世界(米國)に於て、尙ほ直接に基督教的例證に遭遇したり、而して其れは、余が

二十年間熟知せる知己の事に關す。彼は教育あり、且成功せる醫師にして、毫も信仰を修飾せず、又虔徳を誇耀せず、常に快活の氣象を有し、且つ克く人に事ふるの仁人也。彼は平素祈禱に關せる、現代普通の不信説を嘲笑しけるが、曾て己れの經驗の中より、人若し誠實に祈らば、神は必然各人の祈禱を聽上げ給ふとを顯はさんとして、數多の實例を語りたり（是れ彼が信奉せる教義なればなり）。其中に左の如き事を擧げたり、——彼は曾て一年前開創せられたる新市街に、一ヶ月十弗の約を以て、僅かに一室の小家屋を借受けたり。然るに或時、家賃を拂ふべき前日に至るも、拂ふべきの金なく、又何處より金の人來るの見當もあらずりき。是に於て彼は妻に語りて、遂に神に祈願するの外なしと心を定め、偕に祈て、神は憐かに其必要を充たし給ふを確信し、之に依て辛ふじて其心を安んじ、漸やく思ひ煩ひを免したり。然るに翌朝に至るも、未だ金員は與へられず、剩へ折悪しく、家主は平常よりは早刻に來れり。彼が戸内に入來るや、彼等の心は憂慮に沈み、將に失望して、祈禱の驗なきを愁歎せんとしたり。然れども談判の未だ始まらざるに先だち、一隣人來て、この不時の債主を喚び出し、戸前に彼を用談すると數分間なりき。時なる哉、其間に二の來訪者あり、入來て言て曰く、「ドクトルハ——、余は斯く々々の時、熱病を患ひたるとき、君に十弗を負へり、請ふ之を受け玉へ」と。彼は之を回想すれども、其人も或は其事實をも想起する能はず、然れども遂に聽隨して之を受け、以て

其危急の要求に應ずるを得たり。余は推想す、凡そ許多の祈禱特殊の應驗の報道せらるるや、衆人は單に其奇異なるの故を以て、直ちに之を撥斥するならんぞ。然れども、余は親しく、今こゝに敘述したる如き、幾多の實例を聞きたるを以て、余に取ては是等のものは、方に世間普通の事柄たらんとする也。

余は又親しく、超自然的に病の平癒したる、三個の實例を聞きたり。一は父の祈禱に依て、激烈なる腦炎の爲めに、幾んど死に瀕したる年若き婦人が、大抵瞬刻に起き上り、而して翌日は全く平癒して歩行したると。一は悪性にして危険なる水腫病が、直ちに痊されたとにして、他の一は、家族の悉く絶望したる病者の、恢復したると是也。

余は今、余自身の終始親しく觀察したる、一の例證を語るべきや否やに就て、幾度か躊躇したり、而して余は、之は異能に由て痊されたるに非ずと雖も、これは反つて明白に、療癒の超自然的恩恵が、當該者彼女自身の信仰に入りたるの好適例なるを以て、之を語らんと決定したり。彼女は明敏にして教育あり、且つ常人に勝りたる健氣チヤクの氣象と、稍々頑硬執拗の性質を具へたる婦人にして、困苦窮乏の生活をなしたりと雖も、その品性の爲めに、深く尊敬せられたる、或基督信徒の娘なり。此娘曾て脊髓の著しき痛苦の爲めに、疾病の兆候を顯はしたりしが、今を去る十一年前、一層悪性なる臀部の病を得て、倍々大患者となれり。余は未だ曾て他に此の

大患の歐
者平癒し
たる保證